翅田大介
カバーイラスト+キャラクターデザイン
津路参汰(ニトロプラス)
イラスト
Ryuki
メカニックデザイン
石渡マコト(ポリゴン番長)
神話大戦
ギルガメッシュナイト
II
-Gilgamesh Knight-

目次

序章　闇ノ吐息
一章　再会ト再開
二章　大蛇ノ巫女
三章　愛情ト呪詛
四章　守護ノ盟約
終章　聖王ト戦神
あとがき

序章　闇やみノ吐と息いき

圧あつ迫ぱく感のある闇だった。

多くの篝かがり火びが焚たかれているが、広大な洞どう穴けつ内から闇を駆く逐ちくすることは出来ていない。むしろ揺ゆらめく炎ほのおが、闇をより濃こく重くしているかのようだった。

だが……それだけだろうか？

ひやりとした洞穴内にも拘かかわらず、その空間には生物の吐息めいた気配が其そ処こ彼かし処こから漂ただようよう。じっとり絡からみ付つく視線すら感じ取れそうだった。

もし霊れい視しの――魔ま術じゆつ師しの才を持つ者ならば、この空間に充じゆう溢いつする気配を察して顔を青くするだろう。この空間には、通常では考えられぬ濃のう度どの魔ま力りよくが渦うず巻まいていた。魔力という此この世よならざる幽かくり世よのざわめきが、質量なき闇に存在感を与あたえているのだ。

渦うずを巻く魔力の中心には、不思議な輝かがやきを放つ石版が安置されていた。

深い藍あい色いろに天の川のような銀の斑はん紋もんが散らばった、夜空が結けつ晶しようになったかの如き不思議な材質。その表面には楔くさび形がたの文様――楔形文字がびっしりと刻まれていた。

その楔形文字の石版へ、一人の少女が近付いてゆく。

ぬばたまの黒くろ髪かみに黒瞳が艶あでやかに輝き、なんとも言えぬ幽ゆう玄げんな美しさを醸かもしている。同時に、白い肌はだに加えて白衣に白帯という姿は白骨の如き白々しさで、どこか幽ゆう鬼きめいた不気味さが同居していた。

少女は石版の前に立つと、ゆっくり手を上げて石版へ伸のばした。

指先が、石版に触ふれる。

瞬しゆん間かん、石版に刻まれた楔形文字が星光の如き銀色の輝きを放ち、さらに周囲の魔力も夥おびただしい光を発する。乱らん舞ぶ

する光に、少女は戸と惑まどったように下がろうとするが、急に左頬を押おさえて蹲うずくまった。噛かみ締しめた歯の隙すき間まから、堪こらえ切きれぬ苦痛の呻うめきが漏れ出した。

蹲る少女の背に、ゆらりと新たな光が生じる。

極ごく彩さい色しきの、虹にじ色いろの光。

西洋の聖人に、東洋の神仏に、神聖な存在の背に洋の東西を問わず顕あらわれる後光が、少女の背にも現出していた。

虹色の後光が少女の背に生じると、周囲を満たしていた魔力の輝きが恐おそれ慄おののいたようにしゅるしゅると収まっていく。やがて地下空間には、篝火の揺らめく光と、少女の背から発せられる虹色の輝きだけが残った。

「……おお……」

「……おおぅ……選ばれた……」

「聖人の証あかしたる光背……神性が宿ったか……」

炎の光に、新たな人ひと影かげが歩み出た。神事の際に用いられる斎さい服ふくをまとった老人たちだった。彼かれらは頬を押さえて蹲る少女に目をやり、にたり、と滴したたるような笑えみを浮うかべた。

「これで、権利を得た」

「神話の再編……永き歴史の積み重ねを覆くつがえす戦たたかいへの参加権を」

「永きに渡わたる忍にん従じゆうはこれで終わる……」

「ただ打うち倒たおされるだけの『敗者』という役割を、いまこそ返上する……！」

怨えん嗟さの篭こもった陰いん鬱うつな響ひびきは、それだけで不気味な呪言めいていた。

蹲っていた少女が、頬から手を外してゆっくりと立ち上がる。彼かの女じよの頬には、楔そのもののような刻印が刻まれていた。星の光を象しよう徴ちようする八はち芒ぼう星せいの刻印が。

少女はその刻印を歪ゆがませ、周囲の闇も老人たちの声も知らなげ

に、明るく朗ほがらかな笑みを浮かべるのであった。

一章　再会ト再開

1

　宿すく儺な星せいーいち郎ろうは、これまでの十七年の人生をとかく女家族に囲まれて育った。
　幼少時代に預けられていた家ではかしましい姉妹とーいつ緒しよだったし、数年前に新京都に越こしてきてからも姉と叔母おばの三人家族。周りが女だらけという状じよう況きようでずっと育ってきて、星一郎は心の底から学んだことがある。
　女というのは、男をからかって楽しむ生き物である。
　彼女らが男をからかうのは、猫ねこが猫じゃらしに飛びつくのと同じだ。牛がヒラヒラ振ふられる赤い布に突とつ進しんするのと同じだ。そういう習性を持った生き物なのである。
　故ゆえに、平常心。平常心こそが何よりも重要だ。
　こっちがちょっとでも狼狽うろたえれば、あっちはさらに調子に乗ってくるのだから。
「そう、平常心……平常心だ……」
　星一郎は自宅の脱衣所の扉とびらに手を掛かけたまま、ぶつぶつと何度も何度も繰くり返かえした。
　扉の向こう、浴室からはシャワーの音が漏れ出している。いま湯を浴びているのは、つい昨晩、星一郎が守るべき主と定めた少女だ。
　ディーナ・チャレンジャー。
　金きん髪ぱつ碧へき眼がんに、凛りんとした表情が印象的な少女。彼女は〈聖楔者ヒエロス〉――神々の力に選定された超ちよう常じよう能力者たちのバトルロイヤル『摩天の夜宴バビロン・ナイト』に参加するため、新京都にやってきた。
　深い昏こん睡すい状態の兄の無念を晴らすため、兄を覚醒めざめさせるという願いのために戦う彼女に、星一郎は亡なき姉、宿儺摩ま子

こと似た表情を見て取った。そんな彼女の願いと決意を守りたいと、星一郎はディーナに協力して共に『摩天の夜宴』で戦い抜くことを誓い合った。

そして『摩天の夜宴』の最初の一日、最初の戦いを終えた彼女は、唐とう突とつに、

『わたしの肌を清める栄えい誉よをお前にやろう！』

と言い出した。

ディーナとしても、ただ協力してもらうのは心苦しかったらしい。だから信しん頼らいの証として素す肌はだを晒さらすのだと言っていたが……正直言ってワケが分からない。

男女七歳さいにして、とは言わないが、信頼の証を示すなら他にも方法があるはずだ。なのに何で一足飛びに沐もく浴よくに付き合うことになるのだろうか？

「……いや、彼女も女だ。こうして思おもい悩なやむ僕ぼくを想像して、ほくそ笑んでるに違ちがいない」

星一郎の脳のう裏りに、これまでの人生が蘇よみがえる。

八歳の時だったか。当時一緒に住んでいた姉妹と一緒に川遊びをした時、下着姿になって川に飛び込んだ彼女たちは、躊ちゆう躇ちよする自分を「星くんのいくじなしー」と指差してケラケラ笑っていた。その後一週間ずっと「いくじなしー」と笑われ続けた。

それに、考えてみれば一緒にお風ふ呂ろに入った時もそうだ。こっちが気き遣づかったら「星くんのムッツリスケベー」と覚えたばかりの言葉で詰なじってからかわれた。おかげで学校でのアダ名がしばらく「ムッツリスケベ」になったのはトラウマ級の思い出だ。

ディーナだって、言こと葉ば遣づかいはかたっ苦しいし何かあると口より先に手を出だすが、あれでれっきとした〝女〟である。男をからかい慌あわてさせ、そうしてイニシアチブをもぎ取ろうと虎こ視し眈たん々たんと狙ねらっている生き物なのだ。

ならば、これ以上躊躇するのは得策ではない。

だいたい、何を躊躇することがある？　所しよ詮せんは女の裸はだ

かではないか。
「圭けい子こさんを着き替かえさせるのと要領は同じだ……」
　自分に言い聞かせ、星一郎は浴室への扉を開いた。

「う、うう……な、何な故ぜ、わたしはあんなことを言ってしまったのだ……！」
　お湯で濡ぬれた頭を抱かかえ、ディーナ・チャレンジャーは後こう悔かいの呟つぶやきを漏らした。幸さいわいなことに呟き声はシャワー音で紛まぎれてお湯と一緒に排はい水すい口こうへ流れ落ち、外に漏れることはなかったが。
　ともかく、ディーナは後悔していた。焦あせっていた。ものすごく悶もだえていた。
「うう……に、兄様にだって見せたことないのに……！」
　彼女の実家には執しつ事じもメイドもいたが、他人に身体を洗ってもらうなど幼い時の話だ。実じつ践せん派はというかアウトドアな家風のお陰かげで、自分でできることは自分でするよう躾しつけられた。逆さに振ってもいまの状況が出てくるような素地などない。
　何故、いったい、どうして、男に肌を晒すなんて事になってしまったのか？
「……いや、これは……そう、そうだ！　あいつの真意を確かめるための手段なのだ！」
　特にそうする必要はないのだが、ディーナは勢い良く立ち上がった。豊かな連れん峰ぽうがたゆんと揺れる。
　宿儺星一郎。彼は『守るべき誰だれか』を喪うしなって自分を持て余していた。その守るべき対象をディーナと定めて協力することを申し出てくれた。一緒に戦って敵〈聖楔者〉を打ち倒してその神格を回収し、行動でもその申し出の確かさを示した。
　だが、それだけで一〇〇パーセント信じることなど出来ようはずがない。
　だから生まれたままの素肌を晒し、あの男の本心を測ってやるの

だ。一寸ちよつとでも邪じや心しんがあれば、きっとぼろが出る。協力態勢を敷しくにしても、ここでダメ押しの確かく認にんは必ひつ須す事じ項こうだ。
「覚かく悟ごしろ、星一郎……貴様の本意、この身を以もって測ってやる……！」
　ディーナは鏡に写る自分自身に言い聞かせるように呟き、特にそうする必要はまったくないのだが、ぐっと拳こぶしを強く握り込んだ。
「入るよ」
　ガラッと浴室のドアが開いた瞬間、ディーナは勢い良く腰こし掛かけに座り直した。
「どうかした？」
「何でもない！」
　即そく座ざに怒ど鳴なり返した。別段怒おこるようなことなど何もないのだが、とにかく怒鳴ってしまう。ディーナは内心を取とり繕つくろうように、星一郎へ――正確には正面の鏡に映る星一郎へ――皮肉げな笑みを投げた。
「……随ずい分ぶんもたもたしていたな？　飄ひょう々ひょうとしているようで、意外に初心うぶなところもあるではないか」
　精せい一いつ杯ぱいの余よ裕ゆうをアピールしてみると、鏡の中の星一郎は「ああ、やっぱりね」とでも言いたげな顔になった。
　――もしや、こちらの内心を見み透すかしているのか？
「っ……では、さっそくやってもらおうか」
　ディーナは滲にじみ出でそうな冷ひや汗あせを根こん性じようで押し留とどめて星一郎を急せかした。
　鏡越しに窺うかがい見ていると、星一郎は「はいはい、分かってますよ」と言うように頷うなずいて袖そでをまくる。何やら手慣れた、ごく当たり前のような風ふ情ぜいで準備をしている。さっさと終わらせようとばかりに、まるでむずかる子供の相手でもするかのようだ。
　自分の裸をこれといって意に介かいしていなさそうな星一郎のその様子に、ディーナはもやもやしたものを胸中に感じる。

「それじゃ、始めるよ」
　出っぱなしだったシャワーを止めると、星一郎はシャンプーを手で泡あわ立だててディーナの金きん髪ぱつを洗い始めた。
「む……髪かみからなのか？」
「お湯で傷いたみやすいからね。特に女性の髪は男性より繊せん細さいだから、最初に洗ってしっかりリンスでガードした方が入浴時のダメージが少ないんだ」
「……」
　頷いたら女子として負けのような気がしたので黙だまっておく。というか、なんでそんな事を知っているのだろう？
　星一郎は手て櫛ぐしで梳すくようにしながら満まん遍べんなくシャンプーを行き渡らせ、指先で丁てい寧ねいに毛根まで揉もみ込こんでゆく。美容院顔負けに手慣れてスムーズな手しゆ腕わんである。
（き……気持ちいい……）
　言い伝えるまでもなく痒かゆいところをわしわしと適度な力加減で揉み込む。特に、髪が長いと汗が溜たまりやすい首筋の生はえ際ぎわの洗い方など絶ぜつ妙みようだ。髪を持ち上げ、下から上へと小刻みに指を動かして刺し激げきしてくる。
「んっ……っ……！」
　耳の後ろを優やさしく撫なで上あげられ、ぴくん、と身体が小さく震ふるえる。
　リンスを摺すり込む手て際ぎわも実に鮮あざやかで柔やわらかい。髪の一本一本が、お日様の匂においのする干したてのタオルで包まれるかのようだ。人は髪を洗われるだけでこんなに心ここ地ち好よくなれるのかと、未体験のリラックス感が頭皮から全身へと染み渡っていく。
「っ……んっ……んぁ……ふぁぁ……」
　喉のどから漏れる声が、甘あまえた猫のように蕩とろけてしまう。もう、何も考えず、このまま身を任せてしまいたい。いっそこのまま眠ねむったら、さぞかし幸せな夢が見られるだろう。

これは人を——女性ひとをダメにする洗せん髪ぱつだ。

何をどうしたら、こんなに女性の髪を気持ちよく洗えるようになるのだろうか……

「……んむぅ……」

溶け出しそうになる意識に、辛かろうじて活を入れる。

そう、気持ちいい。あまりに気持ちいい。あまりにも手慣れて、女性の髪を知り尽くしたかのようなやり口である。そう考えると、またモヤモヤしたものが胸中に広がっていく。

ディーナが襲い掛かってくる快感に抗あらがっている間にも、温ぬるめのシャワーで余分なリンスが洗い流される。

ひと通りの工程が終わると、星一郎はひとつ頷いて立ち上がった。

「よし、それじゃあ後はゆっくりと——」

「何を終わったような顔をしている？」

首を捻ひねって振り向くと、鏡越しではない星一郎がぴくりと片眉を吊つり上あげた。

「……髪が終わっただけだ。まだ肌を清めてもらってないぞ？」

（……意外にしぶとい）

声には出さず、星一郎は心の中で舌打ちした。

（抗ってみせられたのは、ここ数年で久しぶりだ……！）

星一郎だって、そういう気がないのに女性の肌に触れるのは躊躇ためらいがある。なのに女って生き物は、暇ひま潰つぶしとか気分転てん換かんとか酔よった勢いとか、そういうどうでもいい理由でこういう風にからかってくるのだ。こっちがその気になったらどうするのだ。

だからさっきまでの洗髪技術は、これまで女性にからかわれ続けた星一郎が反はん撃げきの為ために編み出した奥おう義ぎであった。こうさせないよう、先に気持ちよくするだけ気持ちよくして後のことをどうでもよくする為の手段であったのだが……まさか研けん鑽さんに研鑽を重ねた自分の洗髪技術に抗える相手が出てこようとは。

なるべく逸そらしてきた視線を、それとなくディーナの身体へ向ける。

きれいな肩かたと背中のラインだ。魔ま術じゆつ的てきな補助があるとはいえ大おお槍やりを振り回すくらいだから鍛きたえているのだろう。肩けん甲こう骨こつと広背筋の引き締まった背中が美しい。

そんな引き締まった美しい背中越しに、豊かに張り出した胸の膨ふくらみが目に入る。こちらにほとんど背中を向けているのに、肩かた越ごし背中越しにもしっかり確認できるのだから、大きさは推おして知しるべしである。

こっちの視線に気付いてディーナがかすかに身み動じろぐと、星一郎の目を奪うばっていた二つの丸い物体が柔らかく揺れる。ぷるんでもぶるんでもなく、たゆん、である。重量感と柔らかさが同居し、しっかり重力に抵てい抗こうしていなくては実現しない、奇き跡せきの擬音である。

さりげなく視線をさげると、バスチェアーに乗った尻しりが目に入る。軟なん質しつプラスチックも、この柔らかに歪む肌はだ色いろの物体と対比すると、まるで無骨な金属製品のようだ。

ざっと回し見しただけでも、凄すさまじいポテンシャルの肉体である。果たしてディーナ本人はそのことを理解しているのだろうか？

（……姉さんといい、圭子さんといい、刀と羽う華かや亜あ矢や香かちゃんといい……そしてこのディーナといい、よくもまぁこんなに体を張ってからかえるものだよなあ……）

自分が我が慢まん強づよすぎるのがいけないのだろうか？　いっそ男の怖こわさを教えてやろうかとも思うが後が恐こわい。一見無防備に白い背中を向けるこの少女は、自分を凌りよう駕がする戦せん闘とう技術の持ち主である。仕返しの仕返しで首が落ちたらたまらない。

とは言え、これまでの経験上、女性に対して妥だ協きようは見せても弱みを見せてはならない。

思考はほんの数秒。

星一郎はうんざりしたような顔を作って頷いた。

「ふぅ……了りよう解かい。手間が掛かかるなぁ、もう」
　面めん倒どう臭くさげに肩を竦すくめ、星一郎はボディーソープへ手を伸ばした。

（……やはりか。この男……）
　辟へき易えきしたような態度を見て、ディーナは確信した。
　おそらくこの宿儺星一郎にとって、女の裸など見慣れたものなのだろう。それどころか一緒に風呂に入ることすらよくあることに違いない。あの熟練じみて手慣れた洗髪技術に、あの顔がその証しよう拠こだ。女には興味なさそうな顔をしておいてなんという奴やつだろうか。
　平常通りに振る舞う星一郎のその姿に、ディーナの胸中のモヤモヤがドロドロしたものに変わってゆく。
（……昨日はあんなこと言ったくせに！）
　昨日の夜、激げき闘とうの最中、星一郎は真しん摯しな口調の中に熱いものを秘ひめて『ディーナの騎き士しになる』と誓った。自分を守ると誓った。自分を守るに値あたいする存在だと――特別な存在だと選んでおいて、この態度。舐なめているとしか思えない。
　蝶ちようよ花よと祭り上げろとは言わない。だがそれにしたって、選んだに相応ふさわしい対応というものがあるはずだ。なのにこれでは、そこらの女と十じつ把ぱ一ひと絡からげにされてるようではないか。
（見ていろ……その平静な顔を歪ませてやる……！）
　ディーナは胸中で毒づいた。当初に抱いだいていた目的は何処どこかに行ってしまっていたが、そもそもが勢いで生じた状況だけに自覚もない。典型的なドツボのハマり方である。
　ボディーソープを泡立てた星一郎が、とうとうディーナの背中に触れてくる。
　滑なめらかに泡立つ膜まくの向こう側に、女性の自分とは明らかに作りの異なる掌てのひらを感じる。骨ばっていて硬かたくて、そして

熱いほどの体温を秘めた手だ。
「ん……」
　掌が柔らかく背を滑すべっていく。肩甲骨や背筋のくぼみを的確になぞるような動きは、まるで自分の身体がスキャンされるみたいだった。骨格も肉付きも事細かに調べられているようで、裸を晒す以上に頼たよりなく感じられてくる。
　繊細かつ大だい胆たんに滑る指先が尾び骶てい骨こつのあたり、尻の割れ目にやってくると、ディーナは思わず悲鳴を漏らしてしまう。
「ひゃっ……」
「擽くすぐったかった？」
　星一郎はなんとも平へい坦たんな声で訊きいてきた。
「擽ったいならもうやめておく？」
「……ふ、ふんっ。そんなことを言っておきながら、ずいぶん念入りにわたしの肌に触れているではないか？　止めたい気などない癖くせに……っ」
「僕はあくまでディーナの指示に従ってるだけなんだけどね」
　泡立てた掌でさわさわと尻を擦さすっておきながら、小こ憎にくらしいくらい平然とした声である。羞しゆう恥ち心しんで赤らんだディーナの頬が、怒いかりの朱しゆも混ざってさらに赤くなる。
　意地になるディーナもディーナだが、これは星一郎も悪い。彼からしたら平然とするしかないのだが、ディーナの方が舐められていると感じてもしょうがない。
「くっ……そ、そこまでいうなら、一体いつまでもたもたしている気だ？　さ、さっさと正面も洗ってほしいものだがな？」
　結果、ディーナも後には退ひけず、要求がエスカレートする羽目になる。
「……そう？　ならこっちを向いてくれる？」
「ッ……い、いいだろう！　鼻血など流さないように頑がん張ばるのだな！」
　引ひき攣つりそうになる笑みを懸けん命めいに維い持じし、ディー

ナは星一郎へと振り向いてみせた。豊かに張り出した胸が柔らかくたわむ。

　一いつ瞬しゆん、星一郎は思わず目を見張ってディーナの胸の揺れに視線を合わせていたが、すぐに「ふーん」と素知らぬ顔をする。それに気付けばディーナも満足したのだろうが、自分のことで精一杯の彼女が気付く筈はずもなかった。

「……それじゃ、お言葉に甘えて」

　どこを見ているのか判然としない瞳で星一郎が言う。これが最後の引き返す機会だったのだろうが、ディーナは自分の胸に近づいてくる両手を凝ぎよう視ししていて、目のやりどころに困った星一郎の視線の行方ゆくえなど意識の外である。

「……ごく……」

　星一郎の手が近づいてくる。器用で柔らかな動きからは考えられないほど、彼の手は大きくてちょっと筋張った、見るからに〝男の手〟であった。これからこの手が、自分の胸に触れてくるのだ。泡あわを擦こすりつけ、余すところなく揉み尽くすのである。想像するだけで、ディーナはいますぐ生き娘むすめのような悲鳴を上げそうになる。

　近づく。近づいてくる。

　そしてとうとう星一郎の指の先が、ディーナの胸の先せん端たんにぽちっと――

「きゃあああ――――――――――っっっ!!」

　胸から全身に広がった甘痒い電流にびくんと震えた瞬間、ディーナは乙おと女めらしい悲鳴を上げるのと同時に洗練された動きで右みぎ脚あしを振り上げていた。腰こしの捻りも加わった上段蹴りは、彼女から視線を逸らしていた星一郎の側頭部へものの見事に叩たたき込こまれる。

「げぶっ!?」

　完全な不意打ちを食くらい、星一郎は蹴けられたのと反対側の頭を

壁かべに打ち付け、ばたりと浴室の床ゆかに倒れ伏した。
「あ……」
　ディーナは振り上げた足を降ろすのも忘れ、完全に気絶した星一郎を呆ぼう然ぜんと見下ろした。

2

　気絶した星一郎を引き摺ずり、ディーナはリビングへ向かった。
　宿儺家のリビングは、ちょっと見ない内に荒あれ果はてていた。ベランダのガラス扉はダンボールがガムテープで貼はり付けられているし、カーテンはレールからして千切れていた。ソファもひとつしかないし、ローテーブルは微び妙みように歪んでいる。
　昨晩〈聖楔者〉に襲われたのを返り討ちにした際の結果である。
　星一郎をソファに寝ねかし、ディーナはバツの悪い顔で頬を掻かいた。
「……慣れないことはするものではないな……」
　ちょっとばかり罪悪感を感じるディーナであった。そもそもが星一郎への礼ということだったのに、これでは恩を仇あだで返した格好だ。
　……だが、星一郎だって悪いのだ。
　せっかく一ひと肌はだ脱ぬいだのに嬉うれしがる様子もないのでは、こっちが馬ば鹿かみたいではないか。
　ディーナが幸せそうに気絶した星一郎を憮ぶ然ぜんと睨にらんでいると、破は壊かいから逃のがれていた電話が鳴った。
　星一郎が目覚める気配はない。起こした方が良いのだろうが、気絶させた当人としては無理やり起こすのは気き後おくれする。
「……仕方ない」
　ディーナは鳴りっ放しのコードレスホンを手にして、通話ボタンを押した。
「Hello?」

電話の向こうから、『ん？』と『へ？』が混じった、戸惑った息いき遣づかいが返ってくる。
『……ええと、どちら様ですか？』
女性の声であった。まだ若い、もしかしたら自分と同じ年とし頃ごろの少女かも知れない。
ついいつもの癖で返事していたのに気付き、ディーナは慌てて言い直した。
「――失礼。こちらは宿儺家の電話です」
『はあ……間ま違ちがい電話でなかったのならけっこうなのですが……それで、あなたはどちら様なのでしょうか？』
「わたしは……」
答えようとして、言葉に詰つまる。果たして、今の自分がここにいる理由を真っ正直に話して納なつ得とくしてもらえるものだろうか。
ディーナはソファの背に寄りかかり、気絶したままの星一郎を見下ろした。
「……居い候そうろうみたいなものです」
『居候っ？　女の人がっ!?　それも外国の人っ!?』
電話の主が慌てた声を出した。
変な想像をされても面めん倒どうなので、ディーナはなるべく穏おん当とうに説明を試みる。
「……失礼。わたしは新京都に留学している者です。宿儺家には、ホームステイ先としてお世話になっております」
『あ……そ、そうですか。そうですね。新京都にはそういう方も多いと聞きますしね』
電話の向こうの少女（たぶん）の安心したような吐息が聞こえてくる。
直感的に、この少女は星一郎に気があるのだと分かった。ディーナにも覚えがある。まだ幼い頃ころ、友人が気になる男の子にガールフレンドが出来たと聞いて落ち込んで、それが単なる噂うわさと知った時に今みたいな吐息を漏らしていたものである。

ディーナは、すぐ横で眠りこける星一郎の顔をじとりと睨んだ。

まったくもって忌いまいましいが、見た目は格好良い。何を考えているのか今ひとつ判然としないし、いつも余裕ぶった態度で可か愛わいげが欠片かけらもないが、見た目は悪くない。

そう、見た目が悪くないのが一番悪いのだ。苛いら立だたしい飄ひょう々ひょうさも、鼻持ちならない傲ごう慢まんさも、見た目のせいで隠いん蔽ぺいされ、それどころか優しさにすり替かわってすらいる。

『あの……ところで星く……星一郎さんはご在宅でしょうか？　もし居らっしゃるのでしたら、電話を替わっていただけると嬉しいのですが？』

きっとこの電話の少女も、そうやって騙だまされた人間の一人に違いない。

ディーナは電話の向こうの少女の姿を思い浮かべる。声の調子や話し方を聞くに、多少そそっかしそうな気配はあるが、ちゃんと教育の行き届いたお嬢じようさんみたいである。大和やまと撫なで子しこという言葉から連想する、着物姿で黒髪の少女が目に浮かぶようだ。

可か哀わい想そうに。きっとこの少女も星一郎の見た目に惑まどわされたに違いない。

――電話の向こうの少女の目を覚まさねばならない。

ディーナの胸の内で、メラメラと使命感が燃え上がった。

「――星一郎なら、わたしのすぐ横で眠っている」

『……は？』

「言った通りだ。星一郎はいま、わたしのすぐ横で眠っている」

すぐ横のソファで、であるが。

「さきほどまで、一緒に汗を流していたので」

『汗っ!?』

「まるで天に昇のぼるような快感で」

『快感っ!?』

「最後にはのぼせるようにして気絶してしまって」

『気絶っ!?』
「それで、星一郎に替わって欲ほしいのでしたよね？　なんなら起こしますが、出来れば時間を置いて頂けますか？　なんせ、とても心ここ地ち良よさそうに寝ているので。そうですね、コーヒーを一いつ杯ぱい淹いれ終わるくらいにまた掛け直していただけると助かります」
『……ひぐっ』
　北極の永久凍とう土どみたいな沈ちん黙もくの後、氷が罅ひび割われるような嗚お咽えつが上がった。
『ひ……ひ、ぐぅ……ぅ、えええぇぇぇぇぇぇぇえええええええええええええええええええぇぇぇぇぇぇぇえええええええええぇぇぇぇぇえええええええぇぇぇぇぇえええんんんっっ!!　星くんのばがぁぁぁぁぁあああああぁぁぁぁぁあああぁぁあああっっ――――――――――っっっ!!』
　死神に肩を叩かれてもこうはならないだろうという痛つう烈れつな泣き声を響かせた後、電話は悲鳴に耐たえかねたみたいにブツリと切れた。
　受話器を戻もどし、ディーナはそこはかとない達成感に胸を張った。
　これで電話の向こうの少女も目が覚めただろう。なんせ宿儺星一郎という男は、女の裸を見ても顔を赤らめすらしない小憎らしい奴なのだ。こんな男に好意を寄せたって時間の無む駄だだ。
　だからこそ、自分が一肌脱いで防ぼう波は堤ていとならねばならない。こんな男に抱かれたなどと嘯うそぶくなど、それだけで気が遠くなりそうだが、しょうがない。自分が一人犠ぎ牲せいになれば、多くのいたいけな女性が救われるのである。
　ディーナは自己犠牲的な使命感に目め頭がしらを熱くさせた。
「……ぅう、ん……？　どうしたの、ディーナ？　何だかベタな感動映画に心打たれちゃったみたいな顔しているけど？」
　頭を振って起き上がった星一郎が何かほざいたが、ディーナは

「ふっ」と余裕ある笑いを返すのだった。

風ふ呂ろ場ばで気絶して目を覚ますと、ディーナは何だか妙みような雰ふん囲い気きだった。

昼食時も、これまでは「料理は美う味まい。料理に罪はない」と星一郎の料理をしっかり噛み締めつつも不ふ機き嫌げんな顔をするのだが、今日はやけにリラックスした顔で味わっていた。それどころか「お前の味み噌そ汁しるは格別だな」などと言い出した。

とにかく、やたらに余裕というか優ゆう越えつ感かんめいた態度である。

一いつ矢し報むくいてやったと云いわんばかりのディーナの様子に、いったい自分が気絶してる間に何があったのかと、星一郎は急に不安になった。けれど顔に落書きはされてないし、他にも知らない間に悪いた戯ずらをされたような形けい跡せきもない。

果たして、ディーナは何を以もって心に余裕を取り戻したのだろうか？

その答えは、午後のおやつ時になってチャイムを鳴らした。

ティータイム時は英国人らしく紅茶への注文を事細かに指示するディーナであったが、昼食時から続いて何も言わずゆったり優ゆう雅がにカップを傾かたむけていた。チャイムが鳴った時も、

「来客のようだな。お茶のおかわりは対応の後で良いぞ」

と、鷹おう揚ように頷いて微笑ほほえみさえした。

星一郎は背中にむず痒がゆさを感じつつ玄げん関かんに向かう。

「……はい。どちら様でしょうか？」

『……』

呼よび掛けても返事がない。星一郎はまたもや首を傾かしげた。

さっきのチャイムは、玄関のものだ。宅配便などは管理人が受け取ってくれるし、新聞や宗教の勧かん誘ゆうは完全にシャットアウトされている。ここまで来たなら、部屋番号を間違えたのでなければ星一郎の顔見知りの筈だ。

まったく反応のない来訪者の正体を想像する星一郎。玄関の覗のぞき穴を見ても姿が見えない。マンション住人の誰かが突とつ発ぱつ的てきにピンポンダッシュでもしたくなったのだろうか。

さすがにもうリビングへ戻ろうかと思った矢先、ようやくインターホンから声が漏れた。

『……星くん……』

消え入りそうな小ささだったが、それでも聞き間違えようのない懐なつかしい声だった。

「……刀羽華？」

『うん、そうよ……久ひさし振ぶりね……』

来訪者の声はよく見知った幼おさな馴な染じみの少女――忌いみ寸き刀羽華のものだった。

星一郎が新京都に引っ越した後も何かと連れん絡らくし、年に二度は遊びに来てくれる。幼い頃は彼女の実家に引き取られ、姉ともども随分と世話になった。星一郎にとって家族同然の少女であった。

それだけに、星一郎は怪け訝げんに思った。星一郎の知る忌寸刀羽華という少女は、明るく快活な声の持ち主で、こんな風に沈しずんだ声など聞いたことがない。

「……とにかく、いま玄関を開け――」

ようとしてドアノブに手を掛け、はたとリビングの方を振り返った。ディーナの事をなんと説明すべきかと考えると、星一郎もその難しさに閉口せざるを得ない。

「……刀羽華。ちょっと待っててくれる？　いま外出の用意を――」

『……やっぱり、そうなのね……』

「？」

『やっぱり居るのね！」

最後の辺りはインターホンからではなく直接響いた。考えてみれば、彼女には合あい鍵かぎを渡していたのだった。

玄関を押し開あけ立っていたのは、黒髪の美少女であった。

長い黒くろ髪かみを纏まとめ上げてポニーテイルにし、紅白のリボ

ンで飾かざっている。すこし幼い気もするが、美しく流れる黒髪に程ほどよいアクセントになっていた。長い睫毛まつげが烟けむるように飾る黒目がちの大きな瞳ひとみ。柔らかそうな頬ほおは桃もも色いろに染まり、唇くちびるはむっすりと閉じられていても柔らかそうである。

星一郎のよく見知った幼おさな馴な染じみの少女がそこに居た。

だが、いつも小こ春はる日び和よりみたいなほんわかした笑え顔がおを浮かべている彼女は、かなりご機き嫌げん斜ななめな様子で星一郎を睨んでいた。

いや、睨むというのとはちょっと違う。

じろじろと、星一郎の旋毛つむじから爪つま先さきまでを穴が空くほど視線を注いでいる。とくに、何故か首筋のあたりを念入りに確認している。その視線たるや、河岸かしを物色する寿す司し職人か、帳ちよう簿ぼの不備を探す税収官かという真しん剣けんぶりであった。

「……見えるところには跡あととかはないみたいね」

刀羽華はわずかに視線を緩ゆるめてむぅと唸うなった。

幼馴染みの謎なぞの態度に混乱する星一郎だが、彼にはそれよりももっと気になることがあった。

「刀羽華……その格好、どうしたの？」

記き憶おくにある彼かの女じよは、実家の神社の手伝いもあっていつも巫女みこ服ふく姿であった。私服もあまり持っておらず、中学生の時は外出は制服で済ませていた。

新京都に遊びに来てくれる時のお洒しや落れ着ぎといえば雅みやびな柄がらの着物を着こなして、男の自分が見ても極きよく端たんだと思わないでもなかったが、綺き麗れいな黒髪には和服が似合うので、本人に似合ってるならこれでいいかと思っていた。

が。

今日こうしてやってきた刀羽華は、星一郎の記憶にはない衣装でやって来た。

というか、露ろ出しゆつが多い。これまでが巫女服とか和服ばかり

見てきたせいか、余計にそう思う。腰こし回まわりはほとんど剥むき出しだし、スカートも短い。特に、ここ数年でみごとに育った胸がやたら強調されていて、家族同然の幼馴染みであっても目のやり場に困る。

　表面上は冷静な星一郎が問うと、難しい顔をしていた幼馴染みはきょとんと目を瞬しばたたかせ、ややあってぽんと手を叩いた。

「ああ、これ？　めいっぱいおめかししたつもりなのだけど……ど、どう、星くん？」

　そう言って、刀羽華はその場でくるりと回って見せる。短すぎるスカートが翻ひるがえって足の付け根が見えかけて、星一郎はがしりと刀羽華の頭を引ひっ掴つかんで回転を止めた。

「似合ってる。似合ってるよ刀羽華。とっても似合ってるから回らなくてもいいよ」

「せ、星くん……頭がいたいよぅ……はうぅ……」

　ぎりぎり食い込む指先とは裏腹に、刀羽華はそこはかとなく嬉しそうな声を漏もらした。

　外見はともかく中身はあまり変わってない事にほっとしつつさてどうしようかと思案する星一郎であったが、生あい憎にくと考える時間はすぐに終わった。

「どうした、星一郎？　やけに騒さわがしいが……？　そちらは？」

　さすがにこれだけやかましければ紅茶を嗜たしなむのも無理だったろう。背中にディーナの声が掛かる。

　瞬しゆん間かん、星一郎の手を振ふり払はらい、刀羽華が厳しい表情でディーナを睨にらみ据すえた。

「出たわね、この泥どろ棒ぼう猫ねこ！」

「泥棒猫って……」

　ほとんど死語みたいな単語を耳にして苦く笑しようする星一郎だったが、その苦笑いはすぐに柔らかな感かん触しよくに覆おおわれた。

「むがっ……」

「星くんの優しさに付け込んだんでしょうけど、わたしの目が黒い内

はあんたみたいな性悪猫ねこに星くんの貞てい操そうは汚けがさせないんだから！」
「ふ、ふむが……」
　とにかく放してくれと言い返そうとするが、口元から鼻先までがむっちりと遮さえぎられ、言葉どころか呼吸もままならない。顔を赤くする前に、呼吸不全で青くなりそうだ。
　しかし、こんなに育っていたのか。風呂場でディーナのものを見た時はあんなけしからんものがあっていいのかと思ったが、刀羽華のそれも負まけず劣おとらずだ。
（……刀羽華……成長したんだね……）
　幼馴染みの成長の証あかしで窒ちつ息そくしかける星一郎の頭に、臨終間ま際ぎわの保護者みたいな感かん慨がいが泡ほう沫まつのごとく浮うかび上がった。
「……泥棒猫シーフ・キヤツトなどという言葉を本当に聞けるとは思っても見なかったが……」
　突とつ然ぜん現れた少女に泥棒猫呼ばわりされてどう反応すべきか迷うようなディーナだったが、星一郎の様を見て、どんどん声こわ音ねが硬くなっていく。
「わたしから見れば、あなたこそが泥棒猫だ。返してもらおうか。その男はわたしの物だ」
「なにがわたしの物、よ！　星くんはわたしの物なんだから！」
「ふふ、随分と自信ありげだが、残念だったな。その男が自分で言ったのだ。『どうか貴女あなたの物にしてください』とな」
「っ……う、嘘うそよ！　口から出任せを言わないで！」
「嘘ではない。膝ひざを突ついて頭こうべを垂れ、『心も体もすべて捧ささげる』と宣言したのだ。『どうか貴女の所有物として使ってください』と、忠実な犬も唖あ然ぜんとするぐらい従順に、な」
　……何かいろいろと盛り過ぎてるんじゃない？
　星一郎は抗こう議ぎしようと思ったが、肌色の泥どろ沼ぬまにすっぽりとハマり込んでは叶かなわぬことだった。しかも頭を抱え込む力

が強まり、本格的に息ができなくなる。
「くっ……さては口に出しては言えないような方法で星くんを誑たぶらかしたのね！　ああっ、可哀想な星くん！　けど安心して！　わたしがこの女の毒を吸い出して、きれいな星くんに戻してあげるから！」
「毒も何も、この男はすでにわたしの物だ！　さっさと返してもらおう！」
　ぐいっと右みぎ腕うでが引っ張られる。ディーナが業ごうを煮にやして実力行使に出たらしい。
　が、対たい抗こうして刀羽華も頭を抱える両手に渾こん身しんの力を込める。
　星一郎は自分の脛けい骨こつが軋きしむ音を聴きいた。そう遠くない内に首根っこが引っこ抜けそうだ。
「手を離はなしなさいよ泥棒猫！」
「放すのはそちらだ！　これはわたしの物だ！」
　二人の少女の甲かん高だかい声が共鳴しあってきゃんきゃんと響ひびく。まるっきり人形の奪い合いだが、今引っ張り合っているのが生身の人間だと自覚しているのだろうか？
（……まったく、もう……）
　首や腕うでが引っこ抜かれるまで付き合うのはごめんである。自分を人形のように引っ張り合う少女たちへ、星一郎は反撃を開始した。
　まず、まだ自由な左ひだり腕うでを持ち上げて、自分の頭を抱かかえ込む少女の腹――むき出しの臍へそをくすぐった。
「あっ、ひぃん!?」
　風ふ呂ろに連れ込まれたこともある幼馴染みだ。どこが弱点かはちゃんと覚えている。びくんと身体を震わせた刀羽華の両りょう腕うでから力が抜ける。
　さらに返す刀で、ディーナの首筋をさらりと撫でる。
「あぅ……ぅん……！」
　ディーナは首筋が弱点なのはさっき確認済みだ。右腕を引っ張る彼

女の両手からへなりと力が抜ける。
　片手で少女二人を無力化した星一郎はすぐに拘こう束そくから抜け出ると、両手を高く掲かかげ――それぞれ二人の脳天へ振り下ろした。
「あうちっ!?」
「あきゃんっ!?」
　いがみ合っていたディーナと刀羽華だが、二人仲良く頭を抱えて蹲うずくまる。
　少女たちへチョップを与あたえた星一郎は、じとりと少女たちを睨ねめ回まわした。
「――生憎と、僕ぼくは腕が千切れても新しい腕は生えてこないし、新しい頭と交こう換かんすることも出来ないんだ。もう少し丁寧に扱あつかって欲しいね」
「て、丁寧というのなら……！」
　乱れた金髪を直しながら顔を上げたディーナが、涙混じりに非ひ難なんする。
「これが、守ると誓ちかった主に対する騎士の振るまいか……？」
「ああ、恐おそれながら我わが主。誠まことに心が痛むことながら、敢あえて主をお諫いさめするのも務めのひとつでありますれば」
「いけしゃあしゃあと……」
　遺い憾かんな顔をして嘆なげくように言い返すと、ディーナは不ふ貞て腐くされたようにそっぽを向いた。多少は自制を失っていたのを自覚しているようであった。
「……わたしも言いたいわ……」
　涙混じりに、拗すねるような声で刀羽華が言う。
「これが、久しぶりに再会した幼馴染みに対する態度なの……？」
「残念ながら美み穂ほ子こさん――君のお母さんに昔から言付かってる。『刀羽華が調子に乗ったら星くんの好きなように調教してやってね』ってね。他ほかならぬ美穂子さんの頼たのみだ。僕には君を矯きよう正せいする義務がある」

「ちょ、調教って……母様ったら……」
　頭を押おさえていた両手を頬に当てて俯うつむく刀羽華。なにやら顔が赤いが、それよりも先に指し摘てきすることがある。
「だいたい、その格好はどうしたの？　ちょっと露出がありすぎるよ」
「え？『これくらいで普ふ通つうだ』って、亜あ矢や香かが見み繕つくろってくれたものなのだけど？」
「……あの子は……」
　星一郎の脳のう裏りに、小こ悪あく魔まな笑いを浮かべた刀羽華の妹が浮かび上がる。昔から何かと星一郎と刀羽華を玩具おもちやにしていたが、まったく変わっていないらしい。あの娘むすめ、自分の姉になんて格好をさせるのか。
　星一郎が頭痛を覚えて額を押さえると、刀羽華は自分の格好を見下ろして小首を傾げた。
「……何か変、だった？」
「変も何も」
　刀羽華の問に、横からディーナが鼻を鳴らして睨みつけた。
「なんだ、その格好は？　だらし無く膨らんだ胸ばかり強調して、頭が空っぽなのが一目瞭りよう然ぜんではないか」
「余計なお世話よ性悪猫！　あんたこそ何よ？　その無節操に大きいだけの胸は!?　計画性のなさがそのまま身体に表れてるようだわ！」
「ふんっ！　その言葉はそのまま返させてもらおうか！　何だ、その尻は？　安産型といえば聞こえはいいが、重力に負けて垂れているだけではないか！」
「なによっ!?　この金メッキ泥棒猫！」
「なんだとっ!?　この似非えせ大和やまと撫なで子しこめ！」
　とうとう星一郎そっちのけで、二人の少女はぎゃあぎゃあしゃあしゃあと威い嚇かくし合いながら掴み合いの喧けん嘩かをはじめた。
　女の喧嘩に男が下手に割り込んだら火に油なのは身に沁しみている。二人が息切れするのを、星一郎は辛しん抱ぼう強づよく待ち続け

る。
　胸むな元もとが乱れ、服の裾すそやスカートが捲まくれ上がって、下着どころか中身まで見みえ隠かくれする。やがて衣服と髪かみとを乱れるだけ乱れさせたディーナと刀羽華がじりじりと距きよ離りを置いて睨み合った。普通なら見苦しいだけのはずだがそれなりに絵になってしまうあたり、美少女というのは役得というより厄やつ介かいであった。
「っ……さっきまでの威い勢せいはどうした？　……元気がなくなってきたぞ……」
「こ、この……人が大人しくしてれば、付け上がって……！」
　憎にくまれ口ぐちを叩くディーナを睨む刀羽華の雰囲気が変わった。
　びり、と首筋の産うぶ毛げが逆立って、星一郎は思わず首に手をやった。
　ディーナの表情も引き締しまった。
「……覚かく悟ごしなさい。ここで叩きのめして上げるわ」
　先ほどまでの騒そう々ぞうしさが嘘みたいに凪ないだ声が漏れると同時に、刀羽華の背に虹にじ色いろの後光が顕けん現げんする。畏光メランム――洋の東西を問わず、神性の象しよう徴ちようとして聖人の背に顕あらわれる、神聖不ふ可か侵しんの威い光こう。
　星一郎は驚おどろきに目を見張って幼馴染みを凝視した。
「〈聖楔者〉っ!?」
「ちぃ！」
　ディーナが即そく座ざに飛とび退のいて懐ふところに手を差し入れた。強大な神格を宿した本型ストレージ・タイプ魔ま導どうデバイスたる〈第二書版セカンダリイ〉を引き抜くと、神格との経路である『神デインギル』の刻印が右手の甲こうで輝かがやきを放った。
　だが、それは刀羽華も同様だった。彼女も〈第二書版〉を取り出していた。そして左胸に、八はち芒ぼう星せいの楔形文字である『神』の刻印が眩まばゆく浮き上がる。

「覚悟しなさい、泥棒猫！　――〝神デインギルの威光よ！　神の門バベルの鍵かぎよ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！〟」

　夥おびただしい銀光が――魔ま力りよく励れい起き光が刀羽華を中心に渦うず巻まき、『神』の刻印を通じて第二書版へ流れ込んでゆく。〈聖楔者〉の武器、権能武装を顕現させようとしている。

「ちょ――」

　刀羽華に触しよく発はつされ、ディーナまでもが〈第二書版〉に魔ま力りよくを流し込みはじめた。

　こんなところで〈聖楔者〉が権能を振るうなど正気ではない。もはや火に油がどうこうの問題ではない。星一郎は慌あわてて二人に叫さけびかけた。

「二人とも止め――」

『男がしゃしゃり出るなっ!!』

　女二人が異口同音に叫び返す。

　あまりの剣けん幕まくに怯ひるんだ隙すきに、二人はいよいよ武装を顕現させようと第二書版を掲げ――

「そこまで！」

　ぴしゃりと鞭むちが地面を叩くような、鋭するどい女の声が響いた。

　その痛烈な声に、皆みなの視線が一いつ旦たん声の出で処どころへ集中した。

　見れば、開けっ放しの玄関の向こうに、若い女性が立っていた。キッチリとしたスーツ姿だが、タイトスカートから伸のびるタイツに包まれた両足がなんとも色っぽい。

「あなたは、たしか……グリムゲルデ、さん……？」

「はい。カルディア委員会のグリムゲルデ・シュランゲンです。覚えていて頂いて光栄です、宿儺星一郎様」

グリムゲルデは、静せい謐ひつな声に見合った無表情を星一郎へ向けた。

カルディア委員会――〈聖楔者〉同士の戦たたかいである『摩天の夜宴』を監かん督とくする組織に属する黒髪の麗れい人じんは、恭うやうやしく星一郎へ頭を垂れた。

「遅おくれましたが、『摩天の夜宴』の第一夜を勝利で飾ったことをお祝いいたします。……ディーナ・チャレンジャー様も、神格の覚かく醒せいと回収を大変喜ばしく思います」

グリムゲルデの視線を受け、ディーナは掲げていた〈第二書版〉を背中に隠した。

「あ、ああ……それで、何な故ぜあなたが此こ処こに……？」

「あれだけ大おお騒さわぎすれば、誰だれかが一一〇番くらいするとは思わないのですか？　もっとも、警察がやってきてもただの喧嘩なら問題はないのですが……念ねんの為ためにカルディア委員会の権限で様子見を買って出てよかった。こんな陽ひの高いうちから〈聖楔者〉が戦っていたら、事態の収しゆう拾しゆうがより困難になっていましたからね」

言葉こそ丁てい寧ねいだが、慇いん懃ぎん無ぶ礼れいの意味を知らしめるような冷れい淡たんすぎる声音に、ディーナはバツが悪そうに視線を逸そらした。

「……忌寸刀羽華様」

と、グリムゲルデは刀羽華にも目を向けた。

刀羽華は我が身みを省かえりみたのか、たじたじとなって慌てて畏光を収めた。

「……神性を持つ〈聖楔者〉の方々に、我々はただお願いすることしか出来ません。どうぞ『七聖条約』の下、理性ある戦いをお願い致いたします」

グリムゲルデはお願いというには機械的すぎる仕草で頭を下げた。

「う……すみません……」

刀羽華はすごすごと頷うなずいた。

ひとまずは開戦が回かい避ひされ、星一郎はグリムゲルデに頭を下げた。
「ありがとうございます、グリムゲルデさん……助かりました」
「いえ、礼はけっこうです。この状じよう況きようには、自分たちにも多少の責任がありますので」
グリムゲルデの言葉に顔を上げると、彼女は顔色をまったく変えずに話を続ける。
「忌寸刀羽華様に、星一郎様が〈聖楔者〉であると伝え、ついでにディーナ様に仕えることになったと説明したのは他ならぬ自分ですので」
「そこまでやっといて多少!?」
「まさかすぐに戦いになるなどとは予想もしませんでしたので」
〈聖楔者〉同士の連絡を取り持つのは通常業務だからと、グリムゲルデはしれっと顔をしていた。
「何はともあれ、一度落ち着いて話し合いましょう」
淡たん々たんとしたグリムゲルデの提案に、玄げん関かん先さきで突っ立っているのもバカバカしくなった一行はぼろぼろのリビングに場所を移した。
「この部屋の修理はカルディア委員会が負担します。この後委い託たく業者を回しますので」
「それは助かりますけど……そんなので誤ご魔ま化かされませんよ？」
「いえ、ただの規定業務です。カルディア委員会の役割は『摩天の夜宴』を穏当に監督すること。〈聖楔者〉の方々が七聖条約を順守してくれる限り、カルディア委員会は協力を惜おしみません」
星一郎のささやかな逆ぎやく襲しゆうに、グリムゲルデは怜れい悧りな表情を毛筋も揺ゆるがさずに淡々と事実だけを述べてゆく。慇懃無礼さも、ここまであからさまだとむしろ怒おこる方が馬鹿らしく思えてくるから不思議である。
ともあれ、キッチンから椅い子すを持ってきて何とか人数分の腰の

落ち着けどころを確保すると、ディーナがこほんと咳せき払ばらいした。
「それで星一郎、我が騎き士しよ。このだらし無い尻しりを晒さらした女はお前の何なのだ？」
　ディーナの対面に座すわる刀羽華が無言で眦まなじりを吊つり上げる。
　星一郎はなるべくそちらを見ないようにしてディーナの質問に答えた。
「……彼女は忌寸刀羽華。僕の幼馴染み。三年前まで一いつ緒しよに住んでいた、半分以上は家族みたいなものだ」
「そう、ずっと一緒だったの」
　刀羽華は腕を組み、勝かち誇ほこったようにたわわに育った胸を張った。
「昨日今日出会ったばかりの性悪猫とは年季が違ちがうわ」
「……ふっ。なるほどな。なるほどなるほど」
「む？　何か言いたいの？」
「いや？　ただ、な……」
　ディーナはもったいぶるように言葉を切ると、懐からスティック状のビニール包みを取り出した。封ふうを切り、好物のスティック羊よう羹かんを葉巻をそうするみたいに咥くわえてニヒルに笑うと、
ディーナは余よ裕ゆうたっぷりにセリフを続けた。
「ただ、わたしが日本フリークの友人から聞いた話では、幼馴染みは負けフラグとのことだったので、な」
「なっ……」
「そんな情けない事を自信満々に語るとは……くくく、やはり頭に栄養が足りていないと見える」
　ディーナは咥えていたスティック羊羹をもしゃもしゃと咀そ嚼しやくし、煙草たばこの煙けむりでするみたいに甘あまったるい吐と息いきを対面の刀羽華へ吹ふき掛かけた。
　実に大人げない。

皮肉交じりの甘ったるい吐息を吹き掛けられた刀羽華は、鼻に皺しわを寄せて星一郎に視線を向けた。
「……星くん。この無計画な腹回りの金メッキ女は何なのか、聞かせてくれる？」
余裕たっぷりに勝ち誇っていたディーナの額に青筋が浮かぶ。
意外と気にしているらしいディーナの胴どう回まわりから視線を移動して幼馴染みに答える。
「……彼女はディーナ・チャレンジャー。十日前に出会った〈聖楔者〉で……ええと……」
青色の視線がチクチクと横顔を刺すのを感じながら、星一郎は慎しん重ちように言葉を選んだ。
「……僕が戦う理由だ」
「ふんっ。多少言葉は足らないが……まぁ、そういうことだ」
ひびの入った表情に余裕を取り戻し、ディーナは追加のスティック羊羹を取り出しながら言った。
「星一郎は、わたしの盟友、わたしの騎士だ。すでに戦いも共にした戦友でもある。幼馴染みなどというダラダラ続いただけの関係より、強つよい絆きずなを結んでいるのだ」
「……ふぅん？」
刀羽華はすっと表情を引き締めた。ここまでも別に緩んでいたわけではないが、浮うわついた感情を吹き消して冷静な顔をする。
ディーナが「む？」と眉まゆ根ねを寄せた。
星一郎も、自分がまったく見たことのない幼馴染みの表情に目を細めた。
「……グリムゲルデさん」
「はい、刀羽華様」
「カルディア委員会は、星くんとそこの泥棒猫が手を組むのを認めるの？」
「我々としましては、最終的に〈聖楔者〉が最後の一人となって《天命の第二書版》を完成して下されば文句はありません」

グリムゲルデは淡々と言った。

新京都近きん郊こう、貴船山で建造されている魔ま力りよく湧ゆう出しゆつ炉ろ〈ＢＡＢＥＬ〉。『摩天の夜宴』はその完成のための魔ま術じゆつ儀ぎ式しき。〈聖楔者〉たちを選定した翻訳された神格を原初の神格、バビロニア神話に語られる原型神格へと回帰させ、魔力湧出機構の核かくとなる《天命の書版》を復活させる。復活した《天命の第二書版》によって完成した〈ＢＡＢＥＬ〉で無限の魔力を神界から引き出し、魔力の枯こ渇かつ問題を一いつ掃そうする。

それが『摩天の夜宴』を監督する国際魔導工学諮し問もん機関、カルディア委員会の目標である。

「それに、〈聖楔者〉の方々に順守してもらうべき七聖条約にも、『戦せん闘とう形式は一いつ切さい問わない』と明記されています。個人戦、チーム戦、直接戦闘に代理戦闘、いずれの場合も我々は黙もく認にんします。……戦闘場所を夜間の再現史し跡せきとして一いつ般ぱん市民に極力被ひ害がいを与えないよう努力する。それが守られる限りは、ですが」

「そう……」

静かに頷くと、刀羽華は星一郎に目を向けた。そして真剣な、とても真剣な瞳で、星一郎に問いかける。

「……星くん。星くんは、完成した〈ＢＡＢＥＬ〉で何か成したいことがあるの？」

最後の一人となった〈聖楔者〉、すなわち《天命の第二書版》を完成したものに〈ＢＡＢＥＬ〉の最初の使用権を与える――これもカルディア委員会の定めた七聖条約に明記されている一文である。

世界最大最高の魔導デバイスでもある〈ＢＡＢＥＬ〉。それにほぼ無限の魔力が加われば、およそ不可能な事などないだろう。現状の魔導工学で不可能とされ、多くの古典魔ま術じゆつ師したちが追い求めた不老不死。あるいは死者の蘇そ生せい。それらもまんざら夢物語ではない。

――むろん、野放図な妄もう言げんが何の効果もないように、理を

騙す為の緻ち密みつな嘘、繊せん細さいな計算が必要ではあるが。
「星くんは……摩子さんの為に戦っているわけではないのね……？」
「……僕は〈ＢＡＢＥＬ〉に願うべき願望はないよ。姉さんを蘇らそうだなんて思わない。姉さんは、姉さんの人生を一いつ生しよう懸けん命めい生きて、死んだ。たとえその死が事故であろうと、それを覆くつがえすのは姉さんへの侮ぶ辱じよくだ。姉さんを汚すような事を、僕が出来るはずない」
「……そう」
　刀羽華は深々と頷き、そのまま顔を俯けてしまった。
　どうやら、自分の答えは彼女にとってあまり望ましくないものだったらしい。しかし、いったいどの部分が彼女の表情を暗くしたのか、星一郎にはまったく分からなかった。忌寸刀羽華は、多少マイペースで浮うき世よ離ばなれした感性の持ち主であるが、後ろ向きな考えなど好まない陽性の人ひと柄がらなはずなのだが。
「……今日はもう失礼するわ」
　括くくった黒髪を揺らして刀羽華は立ち上がった。自然な表情を作っているようだったが、幼馴染みの目元や口元が微び妙みように歪ゆがんでいるのが星一郎には一いち目もく瞭りよう然ぜんであった。
「また、連絡するわ」
　それだけ言って、刀羽華は去っていった。登場した時の騒々しさとは真逆の粛しゆく々しゆくとした去り方に、ディーナも毒気を抜かれたように黙だまって見送るばかりである。
「……お前、実は嫌きらわれているのではないのか？」
「そんな事はないと思うけど……」
　記憶の引き出しをひっくり返し、星一郎は小首を傾げた。刀羽華があんなに深刻な表情をしたのは、姉の死を知って駆かけ付つけてきてくれた時以来だ。
「それでは、私もこれで失礼いたします」
　昨晩結成されたばかりの主従のやり取りを無感動に眺ながめていたグリムゲルデが言う。

「〈聖楔者〉が〈聖楔者〉に連絡を取る際は、我々カルディア委員会が仲ちゆう介かいいたします。星一郎様が刀羽華様に連絡される際は一度我々を経由しますので、よろしくお願いします」
　優美で完かん璧ぺきだが、どうにも無感情な印象のお辞じ儀ぎをして、黒髪の麗人は去っていった。

3

　再び二人きりになったリビングで、気分直しにコーヒーが淹いれられる。料理も紅茶もほとんど完璧に用意する星一郎だが、このコーヒーはいささか失敗なのではないかとディーナは思った。悪あく魔まの黒さと地じ獄ごくの熱さはともかく、天使の純じゆん粋すいさと恋こいの甘さは残念ながら抽出されなかったようだ。
　ディーナが好物のスティック羊羹で舌にこびりつく苦味を紛まぎらわしていると、対面の星一郎がぽつりと漏らした。
「しかし、驚いた……まさか、刀羽華が〈聖楔者〉になってたなんて……」
「……あのだらし無い尻の女は、どういう出自なのだ？」
　ディーナは問とい掛けた。声に苦味が混じるのは、なにもコーヒーのせいばかりではない。業ごう腹はらではあるが、今自分が抱いだいている感情が嫉しつ妬とであると、ディーナは認めないわけにはいかなかった。
　――まぁ、それもしょうがない。
　諦てい念ねんというより憤ふん激げきを以ってディーナは胸中でつぶやく。
　柄にも無いことだが、自分は浮かれている。そりゃそうだ。「あなたを守る」などと真まっ直すぐ告げられて嬉うれしくないはずがない。たとえそれがどんな男だとしても、だ。
　しかるに、自分がどれだけ好みじゃない、まったくもって好みじゃない男だとしても、守ると誓った自分以外の女に思おもい煩わずらっ

ているのをみれば、愉ゆ快かいな気分にならないのは当然のことだ。
　そう、つまりはこの男が悪いのだ。別にこの男がどれだけ優ゆう柔じゆう不ふ断だんでも構わないが、信義にもとる態度を見捨てておけるわけがない。
　などとディーナが長々と自分に言い聞かせているのを知ってか知らずか、星一郎はコーヒーで舌を湿しめらせて話し始めた。
「……宮ぐう司じの娘さん。実際本人も巫女だけど。けれどあくまでこぢんまりした神社だったから、〈聖楔者〉に選ばれるような素地があるなんて思わなかったけど……」
「ああ……それならあり得ることだ」
　魔導工学に加え古典魔ま術じゆつの知識もあるが、魔術師のコミュニティにいささか明るくない星一郎に、ディーナはもったいぶることなく説明する。
「昔どれほど権勢を誇った呪じゆ術じゆつの大家も、魔力がなければ無意味だ。黎れい明めい期きの中でその規模を小さくし、ごくささやかな家系になるのも少なくない」
「ディーナは、一応それなりのお嬢じよう様さまみたいだけど？」
「『一応』の一言は余計だが……まぁ、たしかに『それなり』の地位をご先祖は築き上げたが、それはあくまで副業が成功したからだ。いまでこそ細々と伝授してきた魔術の知識が役に立っているが」
　中世以降、魔力の枯渇によって、魔術という技術体系はほとんど死に体となった。少なくとも四半世紀前の『世界同時多発魔力災害』によって突とつ如じよ魔ま力りよくがこの世界に再び満ちるまで、魔術は絶ぜつ滅めつ寸前の迷めい信しんにまで没ぼつ落らくしていた。
「それに、表側がこぢんまりとしているからといって、裏側の世界でもこぢんまりとしているとは限らない。魔術界で知らぬ者のない高名な魔ま女じよが田舎いなかの純じゆん朴ぼくな老婦人だった、という例は欧おう州しゆうだとよくあることだ」
　ディーナの説明を聞き、星一郎は腕うで組ぐみをした。日本の呪じゆ術じゆつ者しや——多くの拝み屋や呪じゆ術じゆつ師しと呼ばれる

類たぐいの人々に傅かしずかれる幼馴染みの姿を想像しようとしているのかも知れない。だが、その想像はあまり上う手まくいかなかったようだ。
「……ピンと来ない……」
「その意見には同感だがな。あんな騒々しい女が恭しく拝まれている姿など想像できん」
　自分も同レベルの騒々しさでやり返していたのを棚たなに上げ、ディーナは声にたっぷりと皮肉を混ぜあわせた。
「……だが、あの女を選定した神格は相当なものだ」
　表情を引き締めたディーナは、隠しようのない緊きん張ちようを声に滲にじませる。
「あれは、かなり高位の神格だ。正直、何事も無く帰ってくれてほっとしている」
「そんなにすごいの？」
「お前はまだ覚醒したばかりだろうから経験と実感が結び付かないかも知れないが、あの女が放つ畏光の輝きは並みの神格を圧して余りあった」
　この際だからと、ディーナは居住まいを正して星一郎に向き直った。
「神格には階級が存在する。それぞれの組織や結社の流りゆう儀ぎで、悪魔の爵しやく位いや天使の階級などといろいろな区分があるが……カルディア委員会は分かりやすく五段階で表している」
　ディーナは右手を突き出し、その指を一本一本折ってゆく。
　Ａクラス……主神級。
　Ｂクラス……大神級。
　Ｃクラス……汎はん神しん級。
　Ｄクラス……精せい霊れい級。
　Ｅクラス……聖人級。
「呼び名はあくまで便べん宜ぎ上のものだが、聖人級は神性を宿して魔力に対する絶対支配権を得た人間が最初に達たつする位だ。〈聖楔

者〉は覚醒した段階でＥクラス相当の神格を有しているわけだ。だが真に覚醒することで、〈聖楔者〉は己おのれを選別した神格本来の階級に見合った力を発現させる。その最たるものは、神性の顕れである畏光の出力だな。畏光の出力が高ければ、当然ながら神聖不可侵の防ぼう御ぎよ圏けんも分厚く強固なものとなる」
「ディーナが先日まで苦戦続きだったのは、自分を選んだ神格が分からなかったから、最低限の畏光しか発現できなかった……ってこと？」
「そうだ。先日のアルヴィン・ヴァイスに宿っていた《風魔パズズ》はＣクラス相当の神格だった。あの時のわたしの発揮できる神格はＥクラス……二階級も差があれば、単純な畏光の削けずり合いでは勝負にならない」
「けど僕らはすでに自分に宿る神格名を知った。僕らの神格はどのくらい？」
「そうだな……いいところＤクラスの中ぐらいだろう」
「そんなに低いの？」
「当たり前だ。知名度はともかく、わたしたちを選別したのは純粋な神ではない。畏光の出力を左右する神格に限って言えば、神としては最低限の位階といっていい」
　ディーナを選定した神格は《至高の聖王ギルガメッシュ》。古代バビロニアの半神半人の王として神格化された英えい雄ゆうだ。
　星一郎に宿るのは《全き人間エンキドゥ》。半神半人の王と対になるべく生み出され、《ギルガメッシュ》とともに神格化された神造人間である。
　両神格とも知名度ではかなりのものだが、両方共に純粋な神ではない。付ふ随ずいする神性の強さは純然たる〝神〟には及およばない。
「人気のある天使の九階級で照応するなら、能天使級か。それで、お前の幼おさな馴な染じみとかいう女だが……彼女を選定したのはおそらくＢクラス、それも主神に限りなく近い大神級の神格と見た」
「大神級……」

「座天使か智ち天使か。世界各地の神話でも有名どころの神格だろう。正直、あそこで戦いを挑いどまれなくてホッとしている。大神級の畏光を削るのは気の遠くなる作業だ」
〈聖楔者〉が発する畏光は神聖不可侵の防御圏を形成する。この畏光の防御圏は同じ畏光を纏まとう〈聖楔者〉にしか突とつ破ぱすることは出来ないが、その出力差は厳然と存在するのである。
「もちろん、戦いは水物だ。畏光の出力と防ぼう御ぎよ力りよくだけで押し通とおせるものではないし、神格が保有する権能次し第だいではひっくり返すことも出来るが……難敵には違いない」
「なるほど。それは困ったなぁ……」
　腕を組み、星一郎は難しい顔で呟つぶやいた。
「幼馴染みってだけでも問題なのに、そんな強敵ならなおさら困るなぁ」
「……んん？」
　星一郎の物言いに、ディーナは小首を傾かしげた。
「……何が困るのだ？」
「彼かの女じよを倒たおすときに困るな、と思って」
　さらりと零こぼれたそのセリフに、ディーナはぎくりと固まった後、数秒ほどしてきわめて慎重に口を開いた。
「……戦う、のか？」
「それはそうだよ」
　難しい顔で悩なやみながら、けれどきっぱりと星一郎は頷いた。
「僕は、君を守るために戦うんだ。彼女が君の障害になるなら、彼女は僕の敵だ」
「う、うむ……」
　ディーナは気け圧おされたように頷き、表情を取り繕つくろおうとして、複雑と評するよりは不可解な表情を作ることになってしまった。
　彼女の立場としては、いまの星一郎の答えは望ましいものである。彼かれが動どう揺ようして戦えない、などとなっては困る。ディーナ

は名めい誉よと悲願にかけて、『摩天の夜宴』を最後まで勝ち抜かなければならないのだから。

いや、むしろディーナが恐れていたのは、強力な神格を宿す心安い幼馴染みが現れて、星一郎が自分との盟約を捨てて彼女と手を結ぶことだ。彼がそんな不心得者であるとは思えない。飄ひょう々ひょうとしていまひとつ本心の見通せない少年であるが、卑ひ怯きょうという言葉から程ほど遠とおい気質なのはすぐに分かることだ。分かることではあるが、不安というのはどこからともなく忍しのび込んでくるものである。

星一郎は悩んでいるが、戦うことに関しては悩んでいない。彼が悩むのは、あくまでどう戦うか、についてである。彼のその姿はディーナが望んでいたものであったが、いざその理想形を目まの当あたりにすると、彼女は何故か分からず動揺してしまった。

「……」

もやもやとした胸中を誤魔化すように、ディーナはぬるくなって苦味を増したコーヒーを喉のどの奥おくへ流し込んだ。

4

幼馴染みとの予期せぬ再会の次の日、星一郎はディーナとともに『洛らく外がい』の工場跡あとに出かけた。

新京都には四半世紀前の『魔力災害』の爪つめ痕あとを残す洛外と呼ばれる手付かずの場所が虫むし喰くい穴のように点在する。通常、こういった手付かずの場所は都市の不安定化の一因となるので早さつ急きゆうな再開発が行われるのが望ましいのだが、幸こうか不幸か、洛外には不安定な魔ま力りよく溜だまりを伴ともなう場所が多く、不気味な気配に近付こうとする者もほとんどいない。行政も、この魔導工学先進都市を監督するカルディア委員会も、安心して放置しているわけである。

もっとも、洛外に近寄ろうとしないのは、あくまで一いつ般ぱん人

じんの話。魔力を可視しうる魔術師の才ある者にとって、洛外は絶好の実験場、修しゆ行ぎよう場ばとなる。〈聖楔者〉に覚醒する前の星一郎も、新京都北東の打ち捨てられた工場跡にこっそり足を運んでいた。

そしていま、この工場跡では、星一郎とディーナの戦闘訓練が行われている。

――ギィィイイイイイイイ――――ッ！

星一郎の拳こぶしと、ディーナの振ふるう神こう々ごうしい大おお槍やりとがぶつかり合うと、薄うす皮かわ一枚挟はさんだその僅わずかな間かん隙げきから、極ごく彩さい色しきの火花と甲かん高だかい異音とが撒まき散ちらされる。神格に選定された〈聖楔者〉が、神性の顕あらわれとして発する畏光。神聖不可侵を具現する神々しき虹色の光同士がぶつかり合うことで、世界が悲鳴を上げているかのようだった。

「ひゅ――」

ディーナが大槍――権能武装〈ブリューナク〉をわずかに引き寄せる。ほんの僅かな角度の変化が、星一郎の拳を魔ま法ほうのように受け流した。

「くっ……」

上体が泳いだ星一郎に、ディーナが神槍を鋭く振り下ろす。だが、星一郎はその身体能力で無理やり体勢を立て直し、獣けもののごとく俊しゆん敏びんに槍の間合いから飛び退いた。

「相変わらず、でたらめな……」

感心半分呆あきれ半分に鼻を鳴らし、ディーナは改めて槍を構えて星一郎に斬きり掛かった。

「ぐ、う……」

突つく、薙なぐ、払はらう、斬り上げる。ディーナの槍やり捌さばきは、変へん幻げん自じ在ざいを体現するように目まぐるしく星一郎を翻ほん弄ろうした。およそ体術、戦闘術において、ディーナは星一郎を上回っている。だが、ディーナとて余裕があるわけでないのは、

翻ひるがえる金きん髪ぱつの下で見え隠れする首筋の冷ひや汗あせが物語っていた。

星一郎の身体能力は人間離ばなれした〈聖楔者〉と比べてもあきらかに異常である。腕わん力りよくや俊敏性もさることながら、より脅きよう威いなのは五感の鋭えい敏びん化だ。筋肉の僅かな軋きしみを聴きくかのようにディーナの動きを察知し、空気の流れすら視えるかのように槍の軌き道どうを看破する。

そして、

――ギィィイイイイ――――ィィイイインンッ！

「ちぃっ！」

星一郎の拳がかすめたディーナの肩かたから、虹色の光膜がごっそりと削れた。

彼に宿る《全き人間エンキドウ》は、神の加護篤あつき聖王と比ひ肩けんする存在、云いわば〈聖楔者〉の天敵。畏光を容易たやすく削り取る能力も、天敵の爪つめとして備わったものなのであろう。

「おおおおっ!?」

しかし、どれほど鋭い爪も、届かなければ無用の長物だ。

ディーナは巧たくみに星一郎の拳を躱かわし、したたかに反はん撃げきを加える。何度も同じ場所を神槍で突き込まれ、星一郎の畏光の防ぼう御ぎよに穴が開く。神聖不可侵の加護を削られたどてっ腹に槍先を突き付けられ、星一郎は両手を上げた。

「……降参」

「よかろう」

ディーナが槍を引き、権能武装を〈第二書版〉へと回帰させる。

訓練が終わり、星一郎はどっと地面に腰こしを下ろした。

「はぁ、はぁ……これで〇勝八十一敗二引き分けか……先は長いなぁ……」

「愚ぐ痴ちる余力があるくらいなら、それも残らず注ぎ込めばよいものを」

栄養補給用のスティック羊羹の包みを剥むき、動きまわったあとの

喉の渇かわきを加速しそうな甘ったるい食べ物を飲み込むと、ディーナは腰に手を当てて星一郎を見下ろした。
「わたしとしては、二回でも引き分けられたのが口くち惜おしいのだがな。実戦経験のほとんどない素人しろうとにこのざまでは、わたしの立つ瀬せがない」
　揶や揄ゆするような、かるく責めるような口調であった。
「……お前の動きの基き礎そは、あのだらしない女の関係者に教わったものか？」
　ディーナの刀羽華への呼び方は、いつの間にか「だらしない女」になっていた。いちいち「だらしのない尻の女」と呼ぶのも面めん倒どうくさくなって省略したのだろうが、かなり聞こえが悪いものになってしまっている。
「彼女のお父さんにね。やたらに強い人だったけど……」
「ふむ……ということは、あのだらしない女も？」
　星一郎は無言で頷いた。
　包丁を持って一分後には指を絆ばん創そう膏こうだらけにするほど不器用な幼馴染みだったが、身体を動かすこと自体は得意だった。雅みやびな舞ぶ踊ようも鋭い剣けん術じゆつもすぐに上達した刀羽華が、なんで日常生活となると役立たずになるのか、彼女の両親と一緒に首をひねったものである。星一郎は思い出し笑いしてしまった。
　ひとしきり笑ったあとで顔を上げると、ディーナがじぃ、と星一郎の顔を見つめていた。
「？　どうしたの？」
「……別に」
「心配しなくてもいいよ」
　こちらの真意をうかがうようなディーナに、星一郎は力強く頷き返した。
「家族同然の幼馴染みだからといって、戦いを避さける真ま似ねはしない。必ず君を勝たせてみせる」
「……そうか」

ディーナは小さく頷くと背を向けて離はなれて行った。
何か気分を損そこねただろうかと、星一郎は首を傾げた。そして訓練を切り上げて帰ろうとした時、さらにもう一段首をひねることになった。
「わたしはこのあと所用がある。昼食は不要だが、夕方までには帰る」
そう言うと、星一郎の返事も待たず、足早に歩き去っていった。
「……昨日から変だな？」
遠のいてゆくディーナの背中を眺め、星一郎は自問した。
ディーナはまだ自分を信じられないのだろうか？　共に戦ったといってもたった一回であるし、誓ちかいを立ててからまだわずか二日だ。星一郎の言葉を心の底から信じられなくても無理はない。
「……しょうがないことかな、それは」
星一郎はほろ苦く笑った。
「彼女が僕ぼくを信じ切れないのはしょうがない。僕は彼女を守って戦うだけだ」
それだけ承知していれば十分であると一人頷き、星一郎は主より一足はやく帰き途とに就いたのだった。

※　※　※

星一郎と別れたディーナは、ひとり南へと向かった。程ほどなく人気が増してゆき、すぐに雑多な人ひと混ごみと行き当たる。今も昔も京都の観光名所である祇ぎ園おん周辺に近付いたのだった。
『祇園さん』として親しまれる『八坂神社』は、日本神話における『三貴子』の一柱、『素す盞さの嗚おの尊みこと』を主な祭神とする。祇園と呼ばれるのは、素盞嗚尊と習合された神格、『牛ご頭ず天てん王のう』が祇ぎ園おん精しよう舎じやと訳される寺院の守護神で

あったからだという。全国の八坂神社が祇園神社とも呼ばれる由来である。

　素盞嗚尊と牛頭天王が習合された由来は、実はよく分かっていない。渡と来らい人じんによって牛頭天王が伝えられたのは確からしいが、牛頭天王は元々インド神話の主神インドラの化身アーヴアータールのひとつとされている。それが中国へ至って、農業の神である神しん農のうと同一視されるようになった。牛という生き物が農業と密接な繋つながりがあるからこれは当然のことであるのだが、面おも白しろいのは神農の子孫とされる軍神蚩し尤ゆうが牛頭の神とされる点である。インドラの化身という由来もそうだが、牛頭の神は農耕神としての側面とともに、武神軍神として語られる例も数かず多おおい。素盞嗚尊と牛頭天王が習合されたのも、荒あらぶる神という部分で親和性があったからかも知れない。

　ちなみに古代メソポタミア、シュメールを起源とするバビロニアの神々は、牛頭でこそないものの、牛の角を模した冠を被かぶっていたとされている。

　牛の角かどうかは定かでないが、いま自分が置かれている状況は、日本の「角を出す」という形容に限りなく近い。すくなくとも事情を知らない他人から見たら、間ま違ちがいなくそう思われるのだろう。そう考えると、ディーナの強こわ張ばった顔がますます強張った。

　八坂神社を横切り、三年坂などで有名な清水寺への上り坂のひとつへ折れ曲がる。もともと土み産やげ物もの屋やなどが軒のきを連ねたこの一帯は、魔ま力りよく災害前と勝まさるとも劣おとらない活気ある姿を取り戻もどしていた。

「ようこそいらっしゃいました、ディーナ・チャレンジャー様」

　昨日会ったばかりのカルディア委員会のエージェント、グリムゲルデ・シュランゲンが、こぢんまりとした甘かん味み処どころの前でディーナを出で迎むかえた。

「すでに中でお待ちです」

　グリムゲルデに連れられ、ディーナは店内に入った。ウナギの寝ね

床どこというのか。細く長い間取りで、通路の左側に小さな個室が連なっていた。その内の一つの障子がグリムゲルデの手で開けられる。
「……よく来て下さいました」
　個室で待ち受けていた人物は、内心はともかく、楚そ々そとした美しい動作でディーナに頭を下げた。ポニーテールに括られた黒くろ髪かみがさらりと揺れる。宿儺星一郎の幼馴染み、忌寸刀羽華であった。
「それでは、ごゆっくり」
　二人分の抹まつ茶ちやと和わ菓が子しを用意してグリムゲルデは退出する。
　狭せまい個室で、ディーナと刀羽華が二人きりで向かい合った。
「……」
「……」
　暫しばらくの間、二人は無言で睨にらみ合あう。見た目も、そこから感じる印象もまったく違う二人の少女だが、その表情だけは鏡写しのように似通っていた。
　――まったく……
　刀羽華の瞳ひとみに映る自分の姿を見て、ディーナは胸中で苦々しく舌打ちした。
　――これではまるで、男の歓かん心しんを独どく占せんしようとする愛人の喧けん嘩かではないか……
　昨晩、カルディア委員会を経由して、ディーナへ刀羽華からの伝言が伝えられた。二人きりで話し合いの席を持ちたいと。
　カルディア委員会を通した正式な会談の申し込みである。闇やみ討うち騙だまし討うちの可能性は低いだろう。もし一方的に会談を無視して事に及べば、委員会の顔を潰つぶすのみならず、なんらかのペナルティが課せられる可能性が高い。
　ディーナからすれば、刀羽華が言ってきそうなことは容易に想像がつく。大方、星一郎との関係を打ち切れ、といった類だろう。
　むろん、断る以外の答えは用意していない。

出会いこそ偶ぐう然ぜんの産物であったが、ディーナと星一郎の同盟、主従の契けい約やくは、あくまで星一郎が申し込んできたことである。幼馴染みだろうがなんだろうが、後からそのことでとやかく言う権利はないはずだ。

それに、星一郎の決意は固い。彼はすでに幼馴染みと戦闘になることを覚かく悟ご済みだ。昨日も、そしてつい先さき程ほども、星一郎ははっきりと言い放った。彼の表情にも言葉にも、誤魔化すような色は皆かい無むだった。容易に本心を読ませない男であるが、嘘うそを言う類の人物ではない。誤魔化すように笑うが、空言を口にすることだけはけしてなかった。

だから、ディーナはじっと刀羽華の第一声を待つ。彼女がどう言い繕おうと、こちらの勝利は揺るぎない。こちらは悠ゆう々ゆうと待ち構えればいいだけである。

――なのに、なんでこんなに落ち着かない……？

慣れない正座のせいか、それとも生来の気質のせいか。ただ黙って睨み合うというのは、ディーナにかなりのストレスを感じさせていた。

「……とりあえず、お茶をどうぞ」

ようやく、刀羽華はあたりさわりのない言葉を吐き出した。

中立を旨むねとするカルディア委員会が用意した以上、毒は入っていないだろう。ディーナは黙って器を持ち上げ、抹茶を口に含ふくんだ。

「――あなたは、星くんを愛してる？」

すぐに噴ふき出した。

ディーナの記き憶おくの限りにおいて、これほどまでに強きよう烈れつな精神攻こう撃げきを受けたのは初めての事だ。激しく噎むせ返かえった後、口元をハンカチで拭ぬぐって眼前の少女を睨み付ける。

「……どういう意味だ……？」

「そのままの意味よ」

刀羽華は静かに言い返した。

「あなたは星くんを――宿儺星一郎を愛している？」
　想像の埒らち外がいの質問に、ディーナは混乱のあまり目を白黒させる。口が阿あ呆ほうみたいに開けっ放しになっているのも気付かぬまま、彼女はまじまじと目の前の少女を見つめることしか出来なかった。
　――いったい、何を言っているのだ……？
　ディーナは自問した。いや、聞かれている意味は分かる。分からないのは、なんでそんな質問が目の前の少女の口から出てきたか、だ。彼女は、星一郎を取り戻す為ために自分を呼び付けたのではないのか？
「……何の意図がある？　こちらを混乱させようという魂こん胆たんなら……」
「企たくらみ事なんてないわ。私は質問しているだけ。あなたは、宿儺星一郎を愛している？」
「っ……な……そっ……せ……」
　何の意味もなさない呻うめき声ごえが漏もれ、ディーナは置きどころのなくなった両手をあたふたと彷徨さまよわせた。
　――なんだ？
　――いったい、なんでそんなことを問われなきゃならないのだ？
　――愛？
　――愛してるか、だと？
　――誰だれが？
　――誰を？
　――わたしが？
　――星一郎を？
　空白となった脳内と表情が、急速に熱を持って真っ赤になってゆく。
「な、な、ななっ、なにを馬ば鹿かな！　ま、『摩天の夜宴』の最中にあって、愛だ恋だなどと……」
「私は、愛してる。星くんを……宿儺星一郎を愛しているわ」

ディーナとは真逆の、落ち着き払った表情で、刀羽華は言った。彼女の粛々としながら自負にあふれて揺ゆるぎのない姿に、ディーナはなぜか強烈な敗北感を覚えた。

「私は星くんを愛してる。彼を救ってあげたいと思ってる。でも、あなたが星くんを愛してるなら……あなたが星くんを救ってくれるのなら、あなたに任せてもいい。私はあなたに私の神格を譲ゆずり渡わたして新京都を去る……けど」

ひやり、と。

氷の刃やいばに貫つらぬかれたように、ディーナは心臓が凍こおったように錯さつ覚かくした。

「……あなたが彼を利用しているだけだとしたら……ただこの戦たたかいの間だけの関係だと思って彼を使い潰すつもりなら――わたしは、あなたを殺す」

つい先だって命がけの戦いを経へた彼女をして戦せん慄りつさせるほど、刀羽華の放った殺気はすさまじく冷たく研とぎ澄すまされていた。

いったい何が彼女をそこまでさせるのか。ごくりと息を呑のんだその直後、悪お寒かんがディーナの背筋を走はしり抜ぬけた。刀羽華からもたらされたものではない。その証しよう拠こに、彼女もディーナと同じような気配を感じ、俄にわかに腰を浮うかせていた。

「これは……！」

「〈聖楔者〉の気配……！」

そう遠くない、ほんの目と鼻の先で、神性を発現させた者がいる。神聖不ふ可か侵しんにして絶対の支配権。神性に曝さらされた魔力は、さながら爆ばく弾だん低気圧のごとく収束してゆく。

二人の〈聖楔者〉は、ほぼ同時に同じ方向へと顔を振り向かせた。

5

ディーナと別れた後、星一郎は路面電車の停留所へ向かった。

京都が新京都へと再建される際、一度廃はい止しされた路面電車が再び整備された。その役割は『魔力災害』で大量に生まれた瓦が礫れきを運うん搬ぱんするためのものであった。一度整備さえすれば、電車はトラックやダンプよりよほどローコストで渋じゆう滞たいの心配もない。

その後も復興資材搬はん入にゆうに利用され続けたこの路線は、そのまま路面電車として再利用され続けるようになって現在に至る。初めて訪おとずれた観光客はその路線の数に混乱するらしいが、曲がりくねった東京の地下鉄網などに比べれば、格こう子し状じようの街並みを移動する新京都路面電車はよほど直感的に利用できる。

〈聖楔者〉として覚醒めざめた星一郎なら徒歩の方がよほど速いしまったく疲つかれないのだが、急いで帰っても別段することはない。時間つぶしに久しぶりに使うことにした。

『摩天の夜宴』という超常者たちの戦いが彼あ方ち此こ方ちで行われているというのに、停留所で並ぶ人の多さは常時と何ら変わらない。夏季休暇ということで普ふ段だんより多いくらいだ。

魔術が再さい認にん識しきされて魔導工学が生まれてから四半世紀。再現史し跡せきという実体を持った幻げん像ぞうと寄より添そう魔導工学都市にとって、多少の不可思議な行いは良くも悪くも慣れ親しんでしまっているらしい。

拳けん銃じゆうどころか爆弾を括りつけたような存在が列の最さい後こう尾びで路面電車を待っていると分かっているのだろうかと、星一郎はちょっとだけ苦く笑しようしてしまう。

「――失礼いたします」

柔やわらかな声が背中に掛かけられ、星一郎は考え事を止めて振り返った。

嫋たおやか、といういささか時代遅れな形容が似合う、着物を羽織った可か憐れんな少女だった。

背中に流された長ちよう髪はつは、ぬめるような艶つやを見せるぬばたまの黒。鮮あざやかな朱しゆの唇くちびるの緩ゆるやかな弧こに

加え、垂れ目がちな双そう眸ぼうが柔にゆう和わな印象を後あと押おしする。
　昨日は見慣れない格好で現れたものの刀羽華の着物姿を見慣れていたので、目の前の少女の着ている物が相当に高価なのが分かった。帯も紐ひももやはり値打ちものだったが、服に負けてはおらず自然に着こなしている。
　むしろここまで堂に入っていると、ダメ押おしに和わ傘がさを差してない方が不自然なほどだ。観光客ならずとも写真をお願いしたいほど、再現された古都の景色によく似合っている。
「突とつ然ぜんお呼び止めして申し訳ございません。恐おそれながら、宿儺星一郎様でいらっしゃいますか？」
「……ええ。僕は確かに宿儺星一郎です」
「ああ、良かった。間違っていたらどうしようかと思いました」
　ぽんと両手を合わせ、花が咲さいたように華やいだ笑え顔がおを見せる。
　――だが。
　――しかし。
　星一郎は胸中にかすかなざわめきを感じた。
　何かがおかしい。目の前のこの可憐な少女は何かがおかしい。
「申し遅れました。わたくしは波はゞば木き節せつ奈なと申します。実は、星一郎様にお願いがあって参りました」
「……なんでしょう？」
「ええ、大した事ではないのですが――」
　嫋やかな美少女――節奈は、可憐な笑顔を崩くずさずに、言った。
「――ちょっと手足を一本ほど頂ちよう戴だいいたしますね？」
　にこやかな笑顔で告げた直後、節奈の背後で虹にじ色いろの光が浮き上がった。さらにその頬ほおに、八はち芒ぼう星せいの楔形の刻印が浮き上がる。
　神性の顕あらわれたる畏光。
　神格との経路である『神』の刻印。

——〈聖楔者〉……！

目の前の少女を敵と認にん識しきした直後、星一郎の足元が破は裂れつした。

二章　大蛇おろちノ巫女みこ

1

「……あら？」
　爆ばく裂れつして大きく抉えぐれた地面を見つめ、波は々ば木き節せつ奈なはきょとんと小首を傾げた。
　周囲は突然の爆ばく音おんと飛び散った瓦礫で騒そう然ぜんとしはじめる。そんな中でも彼女の仕草は、今にも鈴すずの音ねが聞こえそうなほどに可憐であった。
「おかしいですね？　確実に左足を千切り取ったと思ったのですが……」
　眉まゆ根ねを寄せて困った顔は、万ばん人にんが手を差さし伸のべたくなるほど無む邪じや気きなものだ。
「いったいどういうことなのでしょうか……っ！」
　ハッとして彼女が振り向いた先には、星せい一いち郎ろうが思い切り右みぎ腕うでを振り上げていた。
　輝かがやきを放つ『神』の刻印を握にぎり込むようにした拳を、星一郎は目の前の少女へ一いつ切さいの容よう赦しやなく振り下ろした。
　――ギィィイイイイイイイイ――――――ッッ！
　星一郎と節奈、それぞれの身体に虹色の光膜が揺らめくように現れ、接せつ触しよく部である拳と顔の合間で極彩色の火花が散って強烈な異音が響き渡った。
「おおおおおお――――っ!?」
　あとひと押しで相手の畏光を削りきって拳が届く。そう思われた刹せつ那な、星一郎は足元に不ふ穏おんな気配を感じて全力で飛とび退のいた。
　間かん一いつ髪ぱつ、再び足元で起こった爆裂の範はん囲いから逃

のがれ、顔に降り掛かるアスファルトの欠片かけらを振り払う。
　距きよ離りを取った星一郎は、着物姿の美少女を睨みつつ、視界の端はしで爆ばく心しん地ちを確かく認にんした。
　大きく陥かん没ぼつした地面は、抉られたというよりは掘り上げられたという風に見えた。すべての衝しよう撃げきが地下から地表へと発せられたようだった。
　――あらかじめ『何か』を設置していたのか、それとも潜ひそませていたのか……
　地下という究極の死角から襲い掛かる攻撃は厄やつ介かいだが、それ以上に危険なのはこんな衆しゆう人じん環かん視しの中で攻撃を仕し掛かけてきたという事実だ。
　魔力的なものだけでなく物理的にも強固な畏光の防御圏を持つ星一郎は汚よごれ以外に傷一つないが、周囲には飛んできた破は片へんで怪け我がをして蹲うずくまる人も数人確認できる。急停止した車が玉突きでも起こしたのか、向こうから警告音が響いてくる。
　なのに、この事態を引き起こした少女は周囲の状じよう況きようなど素知らぬ顔だ。『神』の刻印を浮かべた頬に手を当て、星一郎を見やって意外そうに目を丸くする。
「……驚おどろきました」
　節奈と名乗った少女は、ほんとうに驚いたみたいに何度も頷うなずいた。艶あでやかな黒髪がさらりと流れ、着物の袖そでがふわりと揺れる。周囲から切り離してそこだけ捉とらえたら、なんともほのぼのとした光景であった。
「魔導工学と古典魔ま術じゆつの心得があると聞いていましたが、まさか〈聖楔者ヒエロス〉だったとは」
「……訊きいてもいいかな？」
　星一郎が呼び掛けると、節奈は無邪気そうに目をパチクリさせ、すぐに柔らかな笑えみを浮かべて頷き返した。
「はい。どうぞ」
「……なんで、こんな事を？」

「だって、両足があったら逃にげられるかも知れないじゃないですか？」
　至し極ごく当然のように告げる節奈に、星一郎の口元が苦々しく歪ゆがむ。
　如い何かなる理由からか、どうやら彼女は自分を捕とらえたいらしい。それで逃げられないように足を奪うばおうとした。比ひ喩ゆではなく、文字通りに。
「……確認するけど、君は僕が〈聖楔者〉だって知らなかったのか？」
「ええ。とても驚いています」
　この少女は、やはり星一郎が〈聖楔者〉だと知らなかったらしい。このにこやかな笑みを浮かべる節奈という少女は、迷いなく一般人の足を千切り飛ばそうとしていたのだ。
「こんな大事なことを調べられていなかったなんて……報告を上げてくれた方には後でお灸きゆうを据すえないといけませんね」
　可か愛わいらしく眉根を寄せる節奈だが、果たして彼女の言う『お灸』がどういうものなのか、想像するだに恐ろしい。
「……〈聖楔者〉と知らずに襲ったのも問題だけど、こんな町中で、しかも日中に力を振るうなんて……七聖条約を忘れたのか？」
「七聖条約は、あくまでカルディア委員会が協力する対価として要求する見返りです。彼らの助力を必要としないのなら、別段順守する必要はないのですよ。それに破ったからといって、カルディア委員会が〈聖楔者〉に何か出来るわけではありませんからね」
　節奈は朗ほがらかな笑みを崩さずに言う。
　なるほど、と星一郎は納なつ得とくした。自分が〈聖楔者〉なのを刀と羽う華かが知っていて彼女が知らなかったのは、カルディア委員会に話を通したか通さなかったかの違ちがいらしい。
　考えてみれば当然だ。神の力を振るう〈聖楔者〉同士の戦いを『摩天の夜宴』という枠わく組ぐみで出来るだけ穏おん当とうに進めたいカルディア委員会からしたら、こんな真っ昼間に衆人環視の中で力を

振るわれるのは暴挙以外の何物でもない。話を通していたら、こんな事を絶対に許しはしないだろう。
「質問は終わりですか？」
　しゃらりと着物の裾すそを揺らし、節奈は下げ駄たを履はいた足を一歩星一郎へと進めた。
「終わりでしたら、どうか大人しくしていてくださいね？」
　ざわり、と背中の産うぶ毛げが総毛立つ。
　節奈を中心として、その足元から巨きよ大だいな力の気配が周囲へ広がっていくのを感じる。視えない力の水脈が、ざわざわと這はうようにして自分に向かってくる。
「止めろ！　こんなところで――」
「それが？」
　ころころと笑い、節奈は星一郎を指差した。
「――お行きなさい」
「くっ！」
　星一郎は力の限りに跳ちよう躍やくした。宿った神造人間エンキドウの神格が底上げした身体能力により、一気に数メートルを飛び上がる。
　星一郎の眼下、一いつ瞬しゆん前まで立っていた地面が破裂した。空中の星一郎に向かい、地下から地表を破裂させるようにして攻撃してきた『何か』が姿を現した。
　蛇へびだ。
　大蛇だ。
　巨大な、悪夢みたいに巨大な大蛇が、人を丸まる呑のみできそうな大顎を開いて迫せまってくる。
「随ずい騎き!?」
　神が引き連れる使し役えき獣じゆうを魔導工学で再現した人造の魔ま獣じゆう。波々木節奈に宿るのは、蛇に由来する神格の一柱らしい。
　地面の下から這い伸びた黒こく鱗りんの大蛇が大太刀じみた毒どく

牙がを突き立てんとする。星一郎は牙きばに対してとっさに腕うでを翳かざす。

――ギャリリリリリリイィィィイイイイイ――――――ッッ!!

「っ!?」

星一郎の腕と、大蛇の牙、その境目で畏光が拮きつ抗こうする際の異音と火花が激しく舞まう。いや、わずかに大蛇の纏まとう輝きの方が強つよい。

星一郎の腕が押し込まれ、さらに下した顎あごからも大牙が迫る。

「くっ、おおっ！」

腕を翳し足を踏ふん張ばり、押し潰さんとする大顎に全力で抗あらがう星一郎。だが踏ん張る間にも異音は響き、身体を覆おおう虹色の光こう輝きが弱まってゆく。敵の大蛇は使役獣とは思えないほどの畏光を発していた。

「ぐっ……あああああっ！」

大蛇の牙が左下腕に突き刺さる。焼け付くような痛みが襲い掛かるが、覚悟の上だ。

集中させた畏光の輝きを刻印とともに握り締め、星一郎は大蛇の上うわ顎あごの裏側に渾こん身しんの右拳を突き上げた。神に連なる系けい譜ふに対たい抗こうすべく生み出された《エンキドゥ》を宿した星一郎の拳が、大蛇の纏う畏光の防御を突き抜ける。

『ジャアアァァァァアアアアアアアアアアアアアッッッ!!？」

口こう腔こうにダメージを負った大蛇が身体をくねらす。その巨きよ体たいの生み出す慣性が襲い掛かり、星一郎は為なす術すべなく空中に放り出された。

「う、わ、あ――――――」

勢い良く地面に叩たたきつけられるものとおもいきや、その前に星一郎の身体はガラスを突き破って幾いく分ぶん勢いを殺されつつも硬かたい座席にめり込んだ。

「ぐ、ぐ……」

突然飛び込んできた星一郎を、目を丸くする人々が呆ぼう然ぜんと

見つめていた。
　星一郎は察する。ここは路面電車の中だ。投げ出された先で、前面の窓を突き破って飛び込んでしまったらしい。
「……早く車内から出ろ！」
　叫さけぶが、乗客も運転手も突然の事態に唖あ然ぜんとするばかりで動きが鈍にぶい。
　よろよろと立ち上がった星一郎は、自分の突き破った窓を指さして再度叫さけぶ。
「あれを見ろ！」
　星一郎が指差した先には、黒光りする鱗をコブラのように鳴らして迫る大蛇の姿。さすがにそれを見れば誰の目にも危機は明らかで、乗客たちは我先にと出口から窓から飛び出していった。
「ぐっ……」
　だらだらと血が流れる左ひだり腕うでを押さえて迫ってくる大蛇を睨む。
　大蛇は電車の直前でぐるりと螺ら旋せんを描えがくように身をくねらすと、電車の外がい壁へきにその長大な身体を巻き付かせた。金属製の路面電車の外壁はあっさり大蛇に屈くつしてみしみしと潰され、星一郎を圧あつ搾さくすべく迫ってくる。
　星一郎は身を翻し、電車の奥おくへと走り出す。紙細工みたいに押し潰されてゆく車内は、それ自体が大蛇の食道のようだった。
　このまま後ろの窓から飛び出そうと思った星一郎だったが、二両連結の後車の一番後ろの席に小さな女の子が腰を抜かして蹲うずくまっているのを見つけてしまう。
「ぐっ――」
　星一郎は女の子に覆おおい被かぶさった。直後、押し潰されてゆく車内が追いつく。
「ぐっ、がぁぁぁあああ……」

両手両足を伸ばして押し返そうとするが、外壁や座席や窓まど枠わくがぎりぎりと容赦なく迫ってくる。

身体の下に庇かばった女の子は恐きよう怖ふのあまりか気を失ってしまった。その方が幸しあわせだろう。目覚めた時に悪い夢と思ってくれればなお良い。目覚めることができれば、だが。

「ぐっ、ぅうう……波々木節奈！」

大蛇を操あやつる〈聖楔者〉に、星一郎は声を張り上げた。

「攻撃を止めろ！　子供が巻き込まれている！　無関係の人間まで巻き込む気か!?」

「――それは出来ませんね」

ぎゃりぎゃりと圧搾される金属音に紛まぎれ、鈴の転がるような声が漂ただよってくる。

「――今攻撃をやめたら、貴方あなたを逃してしまうかも知れないではありませんか」

「逃げない！　約束する！　だから一いつ般ぱん人じんを巻き込むな！」

「――わたくしも心苦しいのですが、貴方が抵てい抗こうするのが悪いのですよ？　一般人を巻き込んだのは貴方自身です」

声に憂うれいが含まれたが、攻撃をやめる気はさらさらないようだった。むしろ、さらに圧あつ迫ぱくされる力が強まってゆく。

「――心苦しいですが、これも運命と思って、その子供には諦あきらめてもらいましょう」

「っ……」

星一郎は悟さとる。

これまでの人生でやたらに女に揉もまれてきたが、目の前の少女は星一郎がこれまで関かかわってきた女性とは決定的に違う存在だ。姉や叔母おば、刀羽華やその家族たちは、悪いた戯ずら心ごころはあっても邪じゃ気きはなかった。

波々木節奈も邪気はない。邪気はないが、この少女の声から感じるのは、まるで蜘く蛛もの巣に掛かった蝶を眺ながめるような、無邪気

なほどの無む慈じ悲ひさであった。人を害そうとしているのに、まるっきり関係のない命を眺めるようだった。
「ふ、ざ、けるな……っ！」
　ふつふつと、星一郎の胸中で止めどない怒いかりが溢あふれ出でる。
「がっ……あああぁぁぁあああああああああああっっ!!」
　怒りのままに叫ぶ星一郎。その喉のどから迸ほとばしるのは、心中の激情がそのまま吐き出されたような、獣けものの如き咆ほう哮こうだった。怒りの咆哮とともに、星一郎の身体に次々と楔くさび形がたの刻印が浮き上がった。むき出しの腕はもちろん、シャツの生き地じ越ごしにもその輝きが漏れ出す。
　神格の依より代しろである《天命の書版》の欠片。その欠片を肉体に宿した星一郎は、その身体そのものが権能武装と言っても過言ではない。
　ただでさえ高められた〈聖楔者〉としての身体能力がさらに底上げされ、押し潰さんとしていた大蛇の締め付けを徐じよ々じよに押し返してゆく。反発しあう力に耐たえかね、腕や足の筋肉がぶちぶちと千切れて肌はだにも裂れつ傷しようが生じてゆくが、浮き上がった刻印の輝きがたちどころに癒いやしてゆく。
「ぐっ、がぁぁぁあああああああああああああああああああああああああああああああああっ！」
　迫ってくる電車の内ない壁へきを突き破り、星一郎の手がその向こうの大蛇の鱗に触ふれる。畏光がぶつかり合う異音が響くが、その拮抗はほんの一瞬。
　猛もう禽きんの鉤かぎ爪づめの如く突き立てられた星一郎の指は大蛇の畏光を突き破り、その黒鱗を握り潰した。
『ジャアァァァアアアアアアアアアアアアッッ!?？』
　大蛇は実体こそあれど、内部機構はあくまで仮想的なもの。大蛇を実体化させる内部の魔術構造を、星一郎の右腕がぐちゃぐちゃに掻かき乱みだす。大蛇は危機を感じて潰れかけの電車から身を離した。

「がぁぁあああああああああああああああああああっっ！」
　圧力が消えた瞬しゆん間かん、星一郎は右腕で突き破った穴に左手も掛け、紙を引きちぎるように壁へき面めんをぶち破った。気絶した女の子に怪け我ががないのを確かめ、星一郎は車外へ飛び出す。
　周囲からはすでに人気が消えていた。魔術で造られた大蛇が暴れるという事態では、野や次じ馬うまに興じることも出来ないだろう。
　ガラスやコンクリートの破片が撒まき散ちってひび割れた道路には、まるで場ば違ちがいみたいに優美な佇たたずまいの節奈が立っている。彼かの女じよは星一郎を見て、小さく悲鳴を漏らした。
「お、鬼おに……！」
　自身の血で汚れ、双眸を爛らん々らんと怒りに燃やす星一郎は、たしかに赤あか鬼おにもかくやという姿だ。星一郎は己おのれの姿を顧かえりみ、にぃ、と口角を持ち上げた。
「ひっ……」
　節奈が怯おびえたような声を出す。誰もが守りたくなるような弱々しい姿だが、星一郎はもはやそんな外見に微み塵じんも頓とん着ちやくしない。
　この女は、外見が可憐なだけになおさら醜しゆう悪あくだ。こんな女が目の前に立っているだけで吐き気がする。こんな女は耐えられない。
　潰れかけた路面電車から跳躍し、星一郎は一気にその間合いを詰つめる。
「くっ――〈オロチ〉！」
　節奈の声に応こたえ、黒鱗の大蛇が再び地下からその顎を開き襲い掛かった。空中の星一郎は、為す術なくその口内に飲み込まれる。
「ふぅ……え？」
　大蛇の頭部が爆散。
　魔力に還かん元げんされて消えてゆく大蛇の肉にく片へんを引ひき裂さき飛び出したのはもちろん星一郎だ。
　大蛇はすでに先ほどの一いち撃げきで畏光の加護を大おお幅はばに

失っていた。神格そのものを宿した星一郎の畏光出力と桁けた外はずれの腕わん力りよくが加われば、如何ほどのこともない。

「きゃあああああっ!?」

頭を抱かかえて蹲る節奈。

だが、星一郎は一瞬たりとも躊ちゆう躇ちよせず、大蛇を砕くだいた勢いのままに拳こぶしを――

「――なんて、ね」
「っ!?」
　あと僅わずかで拳が届くというところで、星一郎は下からの衝撃に突き上げられた。予期せぬ衝撃に錐きり揉もみしながら地上を見下ろすと、節奈のすぐ側に大蛇の姿が。
　――一匹ではなかった!?
　節奈がさらりと鱗を撫なでると、新たな大蛇はその身を空中へ伸ばした。自らの身体で檻おりを作るように蛇身をくねらし、星一郎の身体を一気に締め上げる。
「ぐっ……！」
　全身に力を込めて対抗する。星一郎の畏光と大蛇の畏光がぶつかり合って異音を立てる。先ほどのように引き千切りたいが、巻き付き締め付けられるせいで肝かん心じんの拳が振ふるえない。攻撃では出力差を無視したような星一郎の畏光の加護だが、防ぼう御ぎよに回るといまひとつその効果が発揮されない。ぎりぎりと削り合う状況となってしまう。
「容赦の無い方ですね」
　からんころんと下駄を鳴らす節奈が、空中で締め上げられる星一郎をさも恐ろしそうに見上げて言う。
「か弱い女性に手を挙げるだなんて……なんて恐ろしい」
「……ぬかせ……！」
　星一郎は締め付けてくる大蛇に対抗しつつ、畏光の拮抗音に負けぬよう、憎にく々にくしさを込めて言い返す。
「……か弱い女性？　そんなセリフは人間に生まれ直してから言うんだな、メス犬」
「なっ……」
「おっと、こんな言い方は犬にも失礼だな……お前は醜みにくい、女の形をしただけの泥どろ人形だ……っ！」
「……ひどい」
　袖そで口ぐちで口を押さえ、目の端から涙なみだを一筋零こぼす節

奈。
「ひどい……こんな侮ぶ辱じよくを受けたのは初めてです……なんてひどい……」
　ショックを受けたように弱々しい声を漏らす節奈は、まるで理り不ふ尽じんに泥を投げ付けられた深窓のお嬢じよう様さまのようである。だが、周囲の惨さん状じようは彼女が生み出したもので、彼女の使し役えきする大蛇は心中を代弁するかのように締め付けを強めてくる。
「ひどい……あんまりです……なんで、こんな……こんな……」
　よよよと泣いていた節奈が、俯うつむけていた顔を上げる。潤うるんだ瞳で星一郎を見上げてくる。
　ぞっ、とした。
　可憐で綺き羅らびやかな外見は変わらず、その瞳だけががらっと印象を変えていた。さっきまで彼女が星一郎に向けるのは、窓の外の景色でも眺めるような視線だった。いつでも視線を切れる、そんな薄うすい注意しか向けてこなかった。
　だが、今の彼女の黒瞳には、汚お泥でいのような情念が渦うず巻まいていた。目を合わせるだけで侵しん食しよくされるような、薄うす気き味みの悪い炎ほのおが彼女の視線をゆらゆらと歪ませている。
「……いいじゃないか……そういう眼が出来るなら最初からそうしていれば、さっきよりも数倍マシだ……」
「……ほんとうにひどい方ですね、貴方は。なんであの方は、貴方みたいな方にご執しゆう心しんなのでしょうか？」
　理解出来かねるように首を振る節奈。
　星一郎は、いったい何を言っているのかと聞き返そうとしたが、
「――動くな！」
　厳しい声が響く。
　見れば、大蛇を使役する節奈を囲むように、複数の警官が展開していた。
「警察だ！　魔導犯罪の現行犯で逮たい捕ほする！　いますぐ魔術の

行使を止めて、デバイスの一切を捨てろ！　さもなくば実力行使で無力化する！」

　節奈を取り囲む警官たちは、魔ま力りよく光こうを発する拳銃に似た機械を節奈に向け、その顔にはサングラスに似た大型のバイザーを掛けていた。攻性魔導デバイスと、魔術に必ひつ須すな霊れい感かんのない人間に霊視力を付加する『霊視鏡グラムサイト』だ。

　魔導工学が実用化されるに従い配備された、魔導犯罪対策課の部隊であった。

「繰り返す！　いますぐ魔術の行使を止め――」

「邪じゃ魔までです」

　節奈が漏らした次の瞬間、警官たちの足元が盛り上がり、破裂した。

　たたらを踏む警官たちの前には、巨大な大蛇が地中から首を伸ばしていた。

「三体、目……！」

　星一郎が目を見張る前で、大蛇が蹂じゆう躙りんを開始した。

　黒鱗の大蛇は、手でホコリを払はらうように警官たちを薙なぎ払はらう。

　無論、警官たちもデバイスを大蛇に向けて攻撃するのだが、

「な、なんだ!?」

　彼かれらの放つ魔術は、大蛇の身体のはるか手前で意味のない魔力と化してあっさり霧む散さんする。炎も、氷も、風も、多種多様な魔術が次々と放たれるものの、大蛇の身体に虹色の輝きが揺らめくだけで、そのすべてが魔力光を散らして無効化されてしまう。

「ひるむな！　使い魔がダメなら術者を狙ねらうんだ！」

　ならばとばかりに、彼らは次に節奈へとデバイスを向けた。

　が、節奈の頬の『神』の刻印が輝き、流れこんできた神性を虹色の後光として顕けん現げんした瞬間には、とうとう警官たちのデバイスは何の反応も示さなくなってしまった。

「う……」

「う、あぁ……」
　あまつさえ、警官たちは畏光の輝きに魅み入いられたように動きを止める。武器を構えた腕が下がり、がくがくと足が震ふるえて膝を突く。畏おそれ多おおいものに相対したように――神に逆らったのを悔くいるように。
「――薙ぎ払いなさい」
　ばさりと着物の袖が翻ひるがえると、大蛇は主の意を汲くんで、身動きできなくなった警官たちを弾はじき飛とばした。ボーリングのピンのように飛んだ警官たちは物言わぬ丸太のようにごろごろと路面を転がってゆく。
「っ……や、めろ……やめろ！」
「そうは申されましても……わたくしはいま、とても気分が悪いのです」
　悲鳴と嗚お咽えつが漂う中、節奈はころころと幼女のように笑った。
「これは貴方の所せ為いですよ、星一郎様。わたくし、貴方の所為で気分が悪いのですから」
「こ、の……ぐ、うぅ!?」
　手足が壊こわれるのも構うものかと力を振り絞ろうとした時、星一郎の身体からがくんと力が抜けた。
　浮き上がっていた刻印の群れが輝きを失い、身体を覆う畏光の輝きも弱まってゆく。
「ぐっ、うう……」
「あらあら？　どうやら貴方の力も、いつまでも続くものではないようですね」
「ぐ、ぐぐ……」
「ならば今のうちに、大人しくなっていただきましょうか？」
「ぐぐ……ぐあああああぁぁぁぁぁああああああああああああああ
あ……」
　畏光の護まもりが掻かき消きえ、大蛇の鱗が星一郎の肌を削り始め

る。身体が締め付けられて肺から空気が抜け出る。抜け出た空気は肺に戻もどることなく、星一郎の喉はか細い悲鳴を絞り出すのみだった。

「ぎっ……ぁひゅ……」

「ふふ。安心してください。殺しはしません。けれど死なない程度に動かなくさせてもらいますね？」

みしみしと全身の骨が軋きしむ中では、節奈の言葉には欠片も信しん憑ぴよう性せいがない。

「ふふふ……」

軽かろやかな笑い声が響く中、視界がどんどん暗くなってゆく。そうなってくると、否いやが応おうでも体内の悲鳴ばかりが際きわ立だってくる。

悲鳴を上げる空気さえ体内からなくなると、ぼきん、とどこかの骨が折れた。空気の代わりに喉から血が溢れ出る。肋ろつ骨こつが折れたのかも知れない。

「ふふ、ちょっと力加減を間ま違ちがったかしら……あら？」

――ギィィィィイイイイイイイイイイイイイイイィィィイイイイイッッ!!

節奈の意外そうな声に被さるように、畏光の打ぶつかり合う異音が激しく響き渡る。

目め隠かくしをされたみたいに真っ暗だった視界がわずかに光を取り戻した。

わずかに回復した星一郎の視界に飛び込んでくるのは、畏光が削り合う際に生じる極彩色の火花。そして美しく翻る、輝かしい金色――

「――しっかりしろ、星一郎！　それでもわたしの騎き士しか!?」

凛りんとした叱しつ咤たの言葉にはっと意識がクリアになる。

星一郎は残った力を総動員し、わずかに緩んだ大蛇の締め付けから右手を引き出した。

「う、おおおおおおおおっ！　ディーナァァァアアアアアアアアアアアッ!!」

「星一郎っ!!」
　伸ばした手の平に、ディーナの右手が重なった。間近に感じる彼女の『神』の刻印、神力の経路に、星一郎はありったけの思念を注ぎ込む。
「んっ……いくぞ、〈ブリューナク〉！」
　顔を赤らめたディーナは気合を入れるように叫ぶと、右手で星一郎の手を掴つかんだまま、左腕で抱える大おお槍やり、権能武装〈ブリューナク〉を変形させた。鋭するどい切っ先が分かたれて三さん叉さ戟げき――神の雷槍トライデントのシルエットが形作られる。
「穿つらぬけ、〈輝ける神槍ブリユーナク〉ッ！」
　三みつ叉またの矛ほこ先さきから眩まばゆい雷らい光こうが迸り、拮抗する畏光の神聖不可侵の防御を貫く。
　黒い鱗をなお黒々と焦こがす大穴が空き、大蛇が苦しみの悲鳴を上げる。
『ジャァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ!?』
　のたうつ大蛇の縛いましめから抱え込まれて逃れ、星一郎は大きく空気を吸い込む。地面に下ろされると、ズキリと痛む脇わきを押さえた。やはり肋骨が折れたらしい。だが、そこまで大事には至っていないようだ。
「……すまない、ディーナ」
「まったくだ！」
　星一郎を見下ろし、ディーナは不ふ機き嫌げんそうに鼻を鳴らした。
「わたしを守ると誓ちかっておいてその体ていたらくとは！　守るべき騎士が守られてどうするのだ!?」
「痛み入るよ……」
　耳に痛い言葉だったが、星一郎は自然と笑みを浮うかべた。
　厳しい言葉をかけるディーナだが、彼女の目はせわしなく星一郎の状態を確認している。そして致ち命めい傷しようでないことを悟っ

て、小さく吐と息いきを漏もらしていた。本人は気付かれてないように思っているらしいが星一郎には丸分かりで、おかげで微笑ほほえみそうになるのを我が慢まんするのに一苦労だった。
「……どちら様でしょうか？」
　大穴の空いた大蛇を労いたわるように撫でる節奈が、ディーナへ咎とがめるように問い掛けた。
「わたくしと星一郎様のお話に突然割り込んでくるとは、随ずい分ぶんと礼儀知らずではありませんか？」
「ふむ……星一郎。ひとつ訊くが、あの女もお前の幼おさな馴な染じみか何かか？」
「とんでもない」
　ディーナのぞっとする質問に、星一郎は慌あわてて首を横に振った。
「あんなのと幼馴染みを続けられるほど、僕ぼくは我が慢まん強づよくない」
「それなら良かった。お前は女性に対してたいそう意地が悪いが、女性の趣しゆ味みはまとものようだ」
　皮肉るように星一郎へ笑いかけた後、ディーナは表情を引き締めて節奈を睨にらんだ。
「あれは、外見は妖精アールヴだが、中身は鬼レツドキヤツプの同類だ」
　美しい妖精と血に飢うえた醜悪な小鬼とを引き合いに出して毒づくディーナに、星一郎は無言で頷いた。
　波々木節奈は、外見こそおっとりとした美少女に見えるが、戦野の如き光景の只ただ中なかで朗らかに笑っているというだけで、そのおかしさは一いち目もく瞭りよう然ぜんであった。
「……聖書の一節でも唱えてみる？」
「十じゆう字じ架かをおまけしても無む駄だろうな」
「まあ……なんてひどい言い草なんでしょうか」
　節奈は目元を袖で押おさえて拗すねたように言い返す。

「今日だけで、一生分の罵ば詈り雑ぞう言ごんを浴びた気分です……ひどい。ほんとうにひどい」
　めそめそという擬ぎ態たい語ごが聞こえてきそうな節奈の弱々しげな姿だが、脇わき腹ばらを押さえる星一郎も、大槍を構えたディーナも、じっとりと嫌いやな汗あせを掻き始めた。不気味な気配がずるずると周囲を這いまわり、自分たちへと目標を定めているのが濃のう密みつに漂ってくるのである。
「ひどい……ひどい……本当に、酷ひどい方たち」
　地面が連続して破裂する。コンクリートを突き破り土ど砂しやを巻き上げ、次々と大蛇が飛び出した。
　一、二、三……星一郎に砕かれて再生中のもの、ディーナが大穴を空けた手負いの頭も含ふくめて、すべてで八。
　八つの大蛇が星一郎とディーナを取り囲み、鎌かま首くびをもたげて威い嚇かくする。
「酷い方たちには、お仕置きが必要ですね」
　にこりと微笑み、節奈が袖を払って腕を振り上げた。
　八対つい十六個の眼球がギラリと輝き、顎が開かれ折おり畳たたまれていた鋭い牙が持ち上がる。
「さあ――」

　――ギィィィイイイイイイイイイイイイイイイ――――――ィィイイインンンッ!!

　節奈が腕を振り下ろそうとしたその間ま際ぎわ、ひときわ強きょう烈れつな異音が響き渡った。
　八つの大蛇の首のひとつから、極ごく彩さい色しきの火花が激しく舞う。
『ジャアアアアアアアアアアアアアアアッッ！』
　悲鳴を上げる大蛇だが、その悲鳴はすぐに首ごと真っ二つに斬り飛ばされた。

巨大な大蛇の頭が宙を飛び、瞬またたく間まに魔力光を散らして霧散してゆく。
「――――これはどういう事ですか、波々木節奈？」
大蛇の首を切り落とした乱入者は、そよ風を感じさせる軽やかさで地面に降り立った。黒くろ髪かみのポニーテイルがふわりと翻る。
忌いみ寸き刀羽華であった。
昨日も見た露ろ出しゆつの多い格好であるが、その右腕には長大というよりは巨大な大たい剣けんが握られていた。すさまじい存在感を放つあの大剣、あれが刀羽華の権能武装なのだろう。
大蛇の首を薙ぎ落とした大剣を羽う毛もうのように振り上げ、刀羽華はその鋭い切っ先を節奈に向けて詰きつ問もんした。
「答えなさい、波々木節奈！　この国の荒あら御み魂たまを鎮しずめてきた覗かんなぎの末まつ裔えいが、このような惨さん事じを起こすとは言語道断！　言い訳があるなら言ってみなさい！」
「……あはっ」
大剣の切っ先を向けられた節奈は、あろうことか破顔した。まるで――そう、まるで憧あこがれの人物とようやく対面できた、無む垢くな少女のように。
「ふふふ……お久しぶりですね、刀羽華様。ああ……そういうお姿も素す敵てきです。本当に素敵……」
うっとりとした視線を向けられ、刀羽華が訝いぶかしげに目を細める。
「あなた、いったい……？」
「ふふふふふ……」
『シャアアァァァァァアアアアアアアアッッ！』
主に反応してか、大だい蛇じやたちが身をくねらせて鱗をかき鳴らす。それは垂すい涎ぜんの獲え物ものを目の前にしたかの如き、歓かん喜きの音色に聞こえた。
「ふふ……本当は、そこの星一郎様を確保してからお会いしたかったですわ。貴女あなたは随分と、その幼馴染みにご執心でいらしたか

ら」
「まさか、星くんを……星一郎を人ひと質じちにしようとしたの？」
　刀羽華の背に畏光が浮かび、ぶわりと彼女を中心に強風が吹ふき荒あれる。
　すさまじい風圧だった。油断すれば吹き倒されそうなほどの剛風である。
「波々木が忌寸に只ただならぬ確かく執しつを抱いだいていたのは伝え聞いていましたが……そんなつまらない事に私の幼馴染みを巻き込んだというなら、いまここで貴女を成敗します！」
「あははっ！　心ここ地ちよいです、刀羽華様のその荒あら々あらしい敵意……是ぜ非ひともお受けしたいところですが、残念ながらこちらの準備が整ってませんので……」
『ジャァァアアア
――――ッ！』
　大蛇たちが再び鱗をかき鳴らす。だが今度響ひびいたのは、明らかに攻こう撃げき的てきな威嚇音だった。
　かき鳴らされる鱗の隙すき間まから、夥おびただしい霧きりが噴出する。ただの霧ではなかった。吹き荒れる強風の中、むしろ風を蝕むしばむように広がってゆく。霧は瞬く間に周囲を満たし、黒鱗の蛇身も、微笑み佇む節奈の姿も白く覆い隠してしまう。
「天あめの叢むら雲くもっ⁉」
「それでは御ご機き嫌げんよう、刀羽華様。次にお会いする時には、誠心誠意を尽つくした歓かん待たいの宴うたげを用意いたしますね…………」
「待ちなさい！」
　刀羽華が大剣を天へ翳した。吹き荒れる風がその強さを増し、風を蝕む霧に対抗する。
「はぁ！」
　大剣が振り切られると、清せい浄じような烈れつ風ぷうが霧を薙ぎ

払った。霧は一いつ掃そうされたが、すでに着物姿の少女も、その下げ僕ぼくである大蛇どもも、霧に映った幻まぼろしのように消え去っていた。あとに残ったのは、破は壊かいの爪つめで引き裂かれた日常風景の残ざん骸がいばかりであった。
「……逃のがした」
　悔くやしげに唇くちびるを噛かむ刀羽華だったが、気を取り直すように首を振ると、手にした大剣をひゅんと振り払う。風を纏う大剣は少女の手の中でしゅるしゅると折りたたまれ、本型の魔ま導どうデバイス〈第二書版〉へと戻った。
〈第二書版〉を腰こしのポーチにしまうと、刀羽華はくるりとこちらを向き、風のように近付いて星一郎に取りすがった。
「星くん！　大だい丈じよう夫ぶだった星くん!?」
　肩かたを貸すディーナを撥はね除のけ、刀羽華は星一郎を抱き込んだ。昨日同様、星一郎は肌はだ色いろの谷間へと顔を埋うずめさせられた。
「星くん！　星くん星くん星く――」
「いいかげんにしろ！」
「はみゅっ!?」
　撥ね除けられたディーナが、刀羽華の括くくった後うしろ髪がみを無造作な手つきでぐいっと引っ張る。仰のけ反ぞった刀羽華は、
ディーナの手を振り払って睨にらみ返かえした。
「なにするのよ！　髪かみは女の命でしょうが！」
「ほほう？　だとすると貴様の命は随分とお安く出来ているのだな」
「それはあなたの方でしょ？　なによ、その金メッキみたいな髪は。安っぽく惨みじめな心を表しているようだわ」
「ほほう？　自分の目が節穴であると公言したな？」
　女の命の値段はともかく、睨み合う二人の品格が暴落する前に、星一郎は彼女たちの脳天へ手刀を振り下ろした。
「「おうふっ」」
「落ち着きなさい」

「……ひどいわ、星くん……」
　べしりと脳天を叩くと、刀羽華は「あうっ」と呻うめいて仰け反った。半泣きで頭を押さえるその姿は、節奈を追い払った際の毅き然ぜんさの欠片かけらもない、星一郎が慣れ親しんだ幼馴染みのものであった。
「酷いのは刀羽華だ」
　この幼馴染みは、自分の見た目というものをもう少し肝きもに銘めいじて欲ほしいものである。彼女が犬を撫でまわすみたいに擦すり寄よってくるせいで、星一郎がどれほどの男どもの嫉しつ妬とを買って謂いわれ無き火の粉をかぶってきたのか、いつか滔とう々とうと語ってやる必要がある。
「星一郎……お前はわたしの騎士のくせに、この女の肩を持つのか……？」
　拗ねたようにディーナが言う。見た目が見た目なのでふてくされた様子も可か愛わいらしいが、刀羽華との罵り合いを見た後だとせいぜい三割引である。
「戯れ合う時と場所は考こう慮りよしてもらいたいけど？」
「……そうだな」
　ディーナは周囲を見回した。周囲の惨状を見、不ふ愉ゆ快かいそうに眉まゆ根ねを寄せる。
「こんな真昼間の往来で暴れるとは……力持つ者の振る舞いも知らないのか。これならアルヴィンの方がよっぽどマシだ」
　かつて不意打ちで手傷を負わされた〈聖楔者〉を引き合いに出し、ディーナは義ぎ憤ふんに声を震わせる。
　ディーナの言葉に頷うなずくと、星一郎は刀羽華に顔を向ける。忸じく怩じたる表情をする幼馴染みは、あの大蛇を引き連れた〈聖楔者〉と浅からぬ因いん縁ねんがあるようであった。その因縁と、自分が襲おそわれた経けい緯いを問おうとした時、頭上からけたたましいローター音が響いた。
　三人の〈聖楔者〉が一いつ斉せいに顔を上げる。三対の眼まな差ざ

しが向けられた先には、中型のヘリコプターが滞たい空くうしている。ドアがスライドすると、その腹に収まっていた乗員が飛び降りた。数メートルの距きよ離りを落下しつつも、彼女らの着地はちょっと階段を一段飛ばししたかのように気軽なものであった。
「――お疲つかれ様さまです」
　わずかに乱れたタイトスカートの裾すそを整え、グリムゲルデが慇いん懃ぎんに腰を折った。右手には、魔力光を発する鞭むちが握にぎられている。ヘリから無事飛び降りたのは、あの鞭状の魔導デバイスの恩おん恵けいらしい。
「しっかし、やりたい放題やってくれたもんだなぁ、おい」
　グリムゲルデとはまったく真逆の雰ふん囲い気きの、オレンジがかった金きん髪ぱつの美女が面めん倒どう臭くさそうな口調でこぼした。
「死人がいないのは、たまたまなのか、それとも最低限の気き遣づかいは残ってたのか……いや、間違いなくたまたまだな」
　派手な金髪の美女、グリムゲルデ同様にカルディア委員会のエージェントであるブリュンヒルデは、巨きよ人じんに握り潰されたみたいにぐしゃぐしゃな路面電車の残骸を見やった。カルディア委員会の息のかかったらしき者たちが、電車の残骸から気絶した女の子を救出していた。
「……この混乱は、カルディア委員会が収しゆう拾しゆうする」
「お三方には、私たちと同行してこの場を離はなれていただきます」
　面倒臭そうなブリュンヒルデに続き、冷ややかな面おも持もちでグリムゲルデが続けた。
「これ以上の混乱は、流石さすがに皆みな様さまも避さけたいでしょう？」
　邪魔だから移動してくれという心の声が聞こえてきそうなグリムゲルデの提案に、星一郎たちは不承不承頷いた。

カルディア委員会の用意した車で移動した先は、こぢんまりとした喫きつ茶さ店てんであった。鴨かも川がわを望む好立地で内装も趣味が良いが、店内に客の姿はいなかった。

グリムゲルデとブリュンヒルデが案内した先には、小こ柄がらな人ひと影かげがソファに腰こし掛かけていた。ディーナや刀羽華より一回り幼い少女のようだが、ただ座すわっているだけでも妙みような気品があった。豪ごう奢しやなドレスに顔半分を隠すヴェール付きの帽ぼう子しという装いも、大げさどころか妙に似合っている。

「我らが主ミ・ロード、宿すく儺な星せい一いち郎ろう様、ディーナ・チャレンジャー様、忌寸刀羽華様をお連れいたしました」

「お疲れ様です、グリム、ブリュン。皆みな様さま、お久しぶりです」

少女は立ち上がって腰を折った。首筋に一筋こぼれた銀ぎん髪ぱつがさらりと揺ゆれる。

「どうぞ、お座りください」

カルディア委員会の実働部隊を取り仕切る少女、アスタは、幼さに似合わぬ洗練された仕草で席を勧める。軽く礼をしてアスタの向かいに座ろうとした〈聖楔者〉たちだが、ここでひと揉めあった。

「ちょっと、星くんにひっつかないで、金メッキ女」

「これはわたしのものだ。だらしない身体をひっつけるな、似非えせ撫なで子しこ」

星一郎を挟はさんで二人の少女がいがみ合う。もう一度チョップをかますべきかと星一郎がさり気なく両手を持ち上げようとすると、春風みたいに柔やわらかな笑い声が対面から漂った。

「ふふ……先日お会いした時はギクシャクしていましたが、いまではディーナさんとすっかり仲良しなのですね、星一郎さん？」

桃もも色いろの唇を上品に隠しながらアスタが言う。

「けれども、こういう時は殿との方がたが先導しなければいけませんよ？」

「僕は、あくまでディーナの護衛、騎士役ですから」
「役割や身分というものは、時として塵ちり芥あくたに等しい物ですよ？」
　そう言うと、アスタはソファの背後に立とうとしていた部下二人に顔を向けた。
「この二人もいまはこうしていますけれど、プライベートではとても可愛らしいの。いまのディーナさんと刀羽華さん以上にいじましくていじましくて」
「我らが主……」
「今そんなことを言わなくても……」
　慇懃なグリムゲルデと大おお雑ざつ把ぱなブリュンヒルデであるが、アスタの言葉に可愛らしく頬ほおを染めてしまう。
「ね？　可愛らしいでしょう？」
　アスタは星一郎たちへ自じ慢まんするように言った。
「普ふ段だんがこんな風だけれど、人目のない時にはとても可愛らしくて。ふふ、ですからお二方も、可愛い争いはほどほどにしませんと」
　アスタたちが発する甘あまい気配に当てられたのか、ディーナと刀羽華が居い心ごこ地ち悪そうに視線をそらせて距離を取った。ようやく静かになると、真ま面じ目めな顔に戻ったグリムゲルデが咳せき払ばらいをして話をはじめた。
「……今回の波々木節奈の起こした騒さわぎは、七聖条約を斟しん酌しやくしない無む軌き道どうなものです。よって我々カルディア委員会は〈聖楔者〉波々木節奈への協力を破は棄きし、彼女にペナルティを与あたえることといたしました」
「真っ昼間に往来で暴れたんだ。ま、当然のことだな」
「ペナルティ？　その内容を聞かせるためにわざわざ僕らを？」
「違ちがうぞ、星一郎。わたしたちをここに招いたのは、ペナルティにわたしたちを巻き込むためだ」
　星一郎の疑問に答えたのは、カルディア委員会の者たちではなく

ディーナだった。
「カルディア委員会がいかに最先端で強力な魔導デバイスを揃そろえていようとも、〈聖楔者〉には〈聖楔者〉でしか対たい抗こうできない。委員会が直接〈聖楔者〉に罰ペナルテイを与えることなど出来ない」
「だからね、星くん。『摩天の夜宴』におけるカルディア委員会のペナルティは、罪を犯おかした〈聖楔者〉の情報を開示して優位性を剥はく奪だつすることなの」
　ディーナに続いて刀羽華も説明する。もっともそれは補足ではなく、あくまでディーナ一人に説明させるのが気に入らないからだろう。
　再び視線をぶつけ合うディーナと刀羽華。この二人にはなるべく口を開かせないのが得策だと悟さとらざるをえない。仕方なく、星一郎は対面のカルディア委員会の者たちへ率そつ先せんして言葉をかけた。
「彼女——波々木節奈の行動は止められなかったのですか？　こうなったことへの謝罪の為ために連れて来られたと思ったのですが？」
「その点については、ほんとうに申し訳なく思っています。『摩天の夜宴』を監かん督とくする者として忸怩たる結果になってしまいました」
「むしろアスタ様がこうして足をお運びくださったことがカルディア委員会の誠意であると了りよう解かいしていただきたく思います」
　頭を下げるアスタを横目に、グリムゲルデが硬かたい声で告げる。殷いん懃ぎん無ぶ礼れいぶりに罅ひびが入って『おいたわしや』という心情が漏れ出している。
「申し訳ないと思うからこそ、狙われたアンタらを呼んで真っ先に情報を伝えようっていうんだぜ？　多少は感謝してもらってもいいと思うけどな」
「こら、ブリュン。星一郎さんは一いつ般ぱん人じんに被ひ害がいが出たことをお怒いかりになっておられるのです。むしろ彼のおかげで

死者がなかったのですから、感謝するのは妾わらわたちですよ？　グリムも、私心で平静を乱したりして、あまり褒ほめられたものではありませんよ？」

　アスタに窘たしなめられ、二人の美女は『申し訳ありません』と肩を落とした。見た目は幼い少女だが、才能が経験を凌りよう駕がすることなど珍めずらしくないのが魔ま術じゆつの世界だ。やはり、見たままの少女であると思わない方が良さそうである。

「とはいえ、謝罪に時間を掛かけるのは愚ぐ者しやの行いでしょう。謝罪とは言葉ではなく、行動で示すものですからね」

　アスタはそう言うと、ぱちんと細い指を打ち鳴らした。

　ローテーブルの上に、映像スクリーンが浮かび上がった。映しだされているのは先ほど襲い掛かってきた〈聖楔者〉、波々木節奈の顔であった。

「――波々木節奈。十七歳さい。二月十一日生まれ」

　グリムゲルデが説明し出した。淡たん々たんとした声こわ音ねが、あの恐おそろしい少女の情報を詳つまびらかにしてゆく。

「彼かの女じよの原型神格は《七しち頭とう龍りゆうムッシュマッヘ》。顕現神格は日本神話における悪蛇、『八岐やまたの大蛇おろち』です」

　神格の宿った《天命の書版》の欠片たちは、永き歴史の漂ひよう流りゆうで翻ほん訳やくされ、変質している。原型神格は書版に宿った元々の神格。顕現神格は数あま多たに翻訳された中から、〈聖楔者〉が書版から引き出して力とする神格である。

「八岐大蛇……ずいぶんとメジャーな神格が出てきたな……」

「カルディア委員会ではＣクラス相当の神格と規定しています。それもＢクラスの大神級に近い、強力な神格です。霊れい獣じゆう、神しん獣じゆう、魔ま獣じゆうは数多かれど、多頭龍の悪名は世界的にも有名ですから」

　もともとバビロニア、アッシリアなどの古代メソポタミア地方には、異形の混成獣を悪あく魔まや悪神とする信しん仰こうが根付いて

いた。例えば、先日ディーナが回収した《風魔パズズ》も、獅し子しの頭に猛もう禽きんの手足という、典型的な混成獣、典型的な悪神のひとつだ。

いまやファンタジーの代名詞である竜ドラゴンも、元はバビロニアが発はつ祥しようであり、それが現代にまで連綿と語かたり継つがれてきた。鷲頭獅子グリフインや人頭獅子スフインクスなどの幻げん獣じゆう、牛頭人ミノタウロスや人狼ワーウルフといった獣人など、そのほとんどが四千～五千年前にはすでにメソポタミア地方で描えがかれ語り継がれていたというから驚おどろきである。その多た彩さいさたるや、この世のありとあらゆる生命を混ぜ合わせたかのようで、現代にまで伝わる異形たちは、その中のほんの一ひと握にぎりに過ぎない。

そんな混成獣でもとびきりの異形とされ、悪の代名詞とされたのが多頭龍である。

自然界にも突とつ然ぜん変異で多頭蛇が生じる場合がある。遺伝子の知識がなくとも、その異常な在り方は古代人にとっても明らかであったことであろう。

「《ムッシュマッヘ》は、最も旧ふるい神々――《太母竜ティアマト》が新しい神々を滅ほろぼすべく生み出した『十一の獣』の一柱。この獣たちは調ちよう伏ぶくされて神々の使し役えき獣じゆうや守護獣になったものも数多いですが、《ムッシュマッヘ》は悪神として打ち倒されています。こうした由来もあって、多頭の竜りゆう蛇じやは悪の代名詞、神々の天敵という神格を得ました。そうして《七頭龍ムッシュマッヘ》の欠片は、長い時の中で世界を流る浪ろうする間に、その土地その土地で悪蛇、悪竜として様々な神格に翻訳されたのです」

中東の地では、ゾロアスターのアジ・ダハーカや、ペルシャのヴィシュヴァルーパに。

インド神話における悪竜ヴリトラも、三頭蛇であるアジ・ダハーカやヴィシュヴァルーパの系けい譜ふである。

ギリシャ神話の英えい雄ゆうヘラクレスが十二の試練の一つとして退治する恐ろしい怪かい物ぶつヒュドラも、無数の首を持つ蛇の怪物であった。

聖書の『バビロンの大淫婦ベイバロン』とも呼ばれる『黙もく示し録ろくの赤い竜』などは極きわめつけだろう。七つの頭と十の角を持つ赤い竜はサタンの化け身しんともいわれ、あらゆる悪徳の象しよう徴ちようとされた。

頭の数こそ様々に翻訳されるものの、多頭龍・多頭蛇は常に神々の天敵、英雄の敵対者として語られてきた。それは極東の日本においても何ら変わらない。

「八岐やまたの大蛇おろちも、その源流は《ムッシュマッヘ》だと？」

「この極東の地は、多くのものが流れて来ますからね。渡と来らい人じんの中には碧へき眼がんの者達たちもいたと言われているくらいですし」

「神み輿こしの由来は元を正せば聖書に出てくる聖せい櫃ひつだ、などという説もあるしな」

「日ユ同祖論というやつですね？」

鼻で笑うようなブリュンヒルデの言に、星一郎は頷いた。

とかく神秘を追究する学術体系は、その神秘の大本を解き明かそうとする傾けい向こうが強つよい。日ユ同祖論も、そういう神秘の由来を求める中で唱えられた説である。

「何にせよ、《ムッシュマッヘ》の欠片はこの日本に流れ着いて八岐大蛇に翻訳され、その神格は連綿と波々木一族によって管理されてきました」

「波々木一族？」

「八岐大蛇を祀まつる役目を与えられた巫ふ覡げきの一族です。波々木節奈は千年以上にわたって多頭龍の神格を継けい承しようしてきた『大蛇の巫女みこ』の末裔。彼女が選定され、八岐大蛇の神格を顕現させるのは至し極ごく当然の結果ですね」

「そこらへんは、そこのお嬢じよう様さまに聞いた方がはやいんじゃないか？」
　ブリュンヒルデは意味ありげに刀羽華へ顔を向けた。
　ディーナが「む？」と訝しむ顔で刀羽華を見る。
　むろん、星一郎も隣となりの刀羽華へすぐに振ふり向むく。
「そこの忌寸刀羽華は、『蛇』を継承してきた波々木家の主家に当たる家いえ柄がらだ。波々木節奈とも面識がある筈はずだ」
　ブリュンヒルデの言葉に刺し激げきされ、先ほどの戦せん闘とうを思い出す。そう、気にはなっていたのだ。刀羽華と節奈の間で交かわされた言葉は、顔見知り同士の会話だった。
「……刀羽華？」
「……迷めい惑わくをかけてごめんね、星くん」
　沈ちん痛つうな顔で刀羽華は謝あやまった。ポニーテイルも元気をなくしたように垂れ下がって見えた。
「忌寸の家も代々の巫覡の一族なの。もっとも歴史はあっても、そんなに金満家というわけでもないのだけど……」
「そいつは謙けん遜そんにすぎるのではありませんかねぇ、お嬢様？　忌寸はこの国の呪じゆ術じゆつ界で隠いん然ぜんたる力を持つ巫覡の大家。祓はらい屋やや陰おん陽みよう師じとは歴史が違う。なんと言ったって『英雄』の代名詞の――」
「ブリュン、私たちはあくまで波々木節奈の情報を開示するためにここにいるのです。刀羽華様の情報を明らかにしてどうするのですか」
「っと、そうだった」
「刀羽華様と波々木節奈の関係については、あとで刀羽華様ご本人にお聞きください。いまは、説明を続けさせてもらってよろしいでしょうか？」
「……星くん。悪いけど、そうしてもらえる？」
「僕にその決定権はないよ」
　星一郎は幼馴染みから、守護対象の少女へと視線を移す。ディーナはむっつりと唇を閉じていたが、仕方ないとばかりに頷いた。

「では、続けます。波々木節奈の顕現神格は八岐大蛇。その神格を十全に発揮する為に作られた器が、先ほどあなた方も目もく撃げきした黒こく鱗りんの大蛇〈オロチ〉です。極めて強力な自律人形オートマタ……云いわば、あの随ずい騎きこそが権能武装なのです」
「だから、あんなに強い畏光を……」
「はい。こうしたタイプは『随騎』と区別して『随ずい獣じゆう』と呼んでいます。神々の使役獣ではなく、『神獣』の神格そのもの。随獣は神格の写し鏡として設計されるので、強力かつ多彩な能力を持ちます。撤てつ退たいの際に吐き出した『天叢雲』の他にも、八岐大蛇として獲かく得とくした権能を再現する能力が数多く装備されています」
「それ、ほとんど反則じゃないですか？」
「ご心配なく。何事もそう上う手まくは行きません。随獣は強力ですが、その分〈聖楔者〉本体にさしたる権能はなく、畏光の加護も最低限です」
　星一郎は節奈との戦いを思い出した。
　たしかに大蛇の邪じゃ魔まが入らなければ、節奈の畏光の防ぼう御ぎよは容易たやすく砕くだけるところであった。随獣に力の大半が注ぎ込まれた分、〈聖楔者〉自身の能力はさほどでもないということか。
「神格の権能を発揮することに集中した権能武装は、一いち撃げきが強力な分多彩さには欠けますが、白兵戦闘では有利です。随獣を掻かい潜くぐって〈聖楔者〉本体を間合いに捉とらえれば、相手は対抗する手段は多くありません」
「……随獣を掻い潜れれば？」
「ええ。随獣を掻い潜れれば」
　簡単に言ってくれる。とはいえ、掻い潜るための情報はくれるようであった。
「〈オロチ〉はそれ自体が強力な自律人形でもありますが、厄やつ介かいな機能が二つあります。水神とされる蛇性の神として発揮される

『天叢雲』。製鉄神の暗あん喩ゆと語られたことによる『錬れん鉄てつ』の再現がそれです」

撤退するときにも用いられた『天叢雲』は、本来は雨を呼ぶ術式であるらしい。神格化される大蛇は、山に烟けむる霧や災害を引き起こす大雨をともなう水神の化身とされる。いざとなれば、あの女は戦場を水みず浸びたしにして敵の機動力を削そぎに来るだろうという。

そして『錬鉄』は、様々な鉄製の呪物を錬れん成せいする能力だという。砂鉄は川から採取されるし、炎ほのおは蛇の舌を想起させ、何よりかの有名な天あめの叢むら雲くも剣のつるぎ――草くさ薙なぎ剣のつるぎがその尾おから現れたというエピソードが良い例だが、八岐大蛇は製鉄技術の暗喩とも語られているのだ。語り継がれるなかで原型にない性質が付加される。神話の翻訳とはそういうものだ。

水神と鍛たん鉄てつ神の神格を持つ多頭龍。それが八岐大蛇なのであった。

「以上が、妾たちが提供できる波々木節奈とその随獣の性能情報です。この情報は後日、新京都の〈聖楔者〉全員に公開されることになるでしょう」

部下が語り終えると、アスタはヴェール越ごしに、三人の〈聖楔者〉の顔を順々にゆっくりと見回した。

「ただし彼女がどういう戦い方をするのかは分かりません。『摩天の夜宴』が始まってよりまだ三日。様子を伺うかがう〈聖楔者〉も多く、波々木節奈もその一人。その戦闘スタイルを明らかにはしていません。しかし、強力かつ凶きよう悪あくな相手であることに間違いはないでしょう」

アスタは立ち上がると、対面の星一郎たちへと頭を下げた。

「ペナルティと言いながら、結局はあなた方〈聖楔者〉に頼たよらざるをえない我々の非力をお許し下さい。その代わりと言ってはなんですが、波々木節奈が再び無体なやり方であなた方を襲った場合、カルディア委員会は最優先であなた方に協力することを約束いたします。どうぞ、ご容よう赦しやください」

　少女の優ゆう雅がで丁てい寧ねいな謝罪によって、波々木節奈の情報公開ペナルテイは終しゆう了りようした。

3

「うーん、やっぱり星くんのご飯は美味おいしいわ。星くん、おかわり！」
「ふっ。居い候そうろうの分際でその厚かましさ。せっかくの栄養も頭に足りてないようだ」
「ご心配なく。私はどこかの誰だれかさんと違って、胴どう回まわりにお肉が付きにくいから」
「それはそれは。なら、遠えん慮りよなくお代わりしてくれ。膨ふくらみすぎた贅ぜい肉にくがそれ以上だらしなく垂れるのは自己責任だからな」
「た、垂れてなんていないわ！　あなたこそ無計画な贅ぜい肉にくだらけのくせに！」
「言ったな！　このだらしのない尻しりデカ女め！」
「何よ！」
「何だ！」
　ぐるぐると、野の良ら犬いぬのように唸うなって睨み合う二人の美少女。
　片や、金きん髪ぱつ碧へき眼がんの凛りんとした印象の美少女。
　片や、黒髪黒瞳の優やさしげな面おも立だちの美少女。
　女性二人が睨み合うなどみっともなく思えるはずだが、そこはタイプが違えど類まれな美少女同士であるゆえか、それほど見苦しくはない。見苦しくはないが、それは見た目だけの話で、彼女らの側で配はい膳ぜんをする星一郎にしてみれば充じゆう満まんする悪い空気でむせるばかりである。
「星くん！　この金メッキ女にガツンと言ってやって！」
「星一郎！　まさかお前はこのだらしない女の肩など持つまいな!?」

睨み合っていた二人がこちらを向く。星一郎の立場からすればディーナに味方しなければならないのだが、この場合はどちらに味方したとしても睨み合いは解消するどころか深まるばかりだ。まこと、女子と小人は養い難がたいものである。

「星一郎！」

「星くん！」

ディーナと刀羽華が言いい募つのるが、星一郎は黙だまって茶を啜すするくらいしか道がない。

（……何でこうなったんだっけ……）

星一郎は数時間前のやり取りを思い返した。もちろん、現実逃とう避ひのためである。

※　※　※

アスタらカルディア委員会の面々が去った後、自然と残された〈聖楔者〉たちは三方向それぞれの席に散った。正確には、星一郎の両サイドに座っていた少女たちがそれぞれの方向に移動しただけだが。

星一郎は両サイドに移った少女たちを見み遣やった。さて最初の一声をどうしようかと考えていると、ほとんど手を付けずに冷めてしまったコーヒーをウェイトレスが取とり替かえた。料金はカルディア委員会持ちだとのことだ。

ひとまずはひと心地をつけるためにコーヒーを味わった。非常に美味しい。あとで豆を購こう入にゆうして帰ろう。

ディーナと刀羽華も、ひとまずといった風にコーヒーに口を付けた。コーヒーカップがソーサーに戻もどされる音をスイッチ代わりに、星一郎はまずディーナへ顔を向けた。

「どうする、ディーナ？」

「どうするといっても……」

　ディーナは腕うでを組み、どこか呆あきれたように星一郎を見返した。
「それをわたしに訊きくか？　襲われたのはお前だろうに」
「そうだけど、僕ぼくはあくまで君の騎き士しだからね」
　降りかかる火の粉は払はらわねばならないが、火の粉がディーナに降りかかったら本ほん末まつ転てん倒とうだ。
「しばらくは距離を取ろう、とでも考えているのか？」
「それも少しだけ考えたけど……」
　いまのディーナは不完全ではあるが、本来は彼女の兄を選定した〈神しん槍そうブリューナク〉の神格を振るうことができる。神々に愛された《聖王ギルガメツシユ》の権能によるものだ。彼女自身の戦闘技術も相まってそうそう遅おくれを取ることはないだろうが、古今東西の神格が入り乱れる『摩天の夜宴』では何が起こるかわからない。〈聖楔者〉に圧あつ倒とう的てき有利と思われた星一郎とて、さきほどは危あやうく半死半生にされかけたのだ。
「それに、僕のご主人様は意外に抜ぬけてる部分があるし……」
「わたしは抜けてなどいない！」
「そう？　けど今いま更さらひとりで生活するのは……」
「……」
　ひと月にも満たない同居生活であるが、ディーナの生活能力が壊かい滅めつとは言わないまでも低いことは白日のもとに晒さらされていた。星一郎が提供する高レベルの生活環かん境きようにどっぷり浸つかったディーナは、何も反論できずそろそろと顔を逸そらした。
「別に、僕がやられるのは構わないのだけど……」
「星一郎!?」
　逸らしていた顔を戻し、ディーナは流りゆう麗れいな眉まゆを吊つり上げて星一郎を睨にらんだ。
「そんな自じ暴ぼう自じ棄きな考えは許さないぞ！」
「分かってる。そんなのは無責任だ。僕は、ディーナを勝たせなきゃならないんだから」

真正面から視線を受け止めてそう言うと、ディーナは「う、うむ……」と頷いて赤くなった顔色を誤ご魔ま化かすようにコーヒーを啜った。

相変わらず、直情的なのに素す直なおな感情に弱い少女である。

「そもそも、何で波々木節奈は僕を襲ったんだ？」

と、星一郎は刀羽華へと視線を移した。

刀羽華は深々と溜ため息いきを漏もらすと、肩かた身みが狭せまそうに星一郎へ向き直った。

「……さっきの話にもあったように、忌寸家は波々木家の主家のような立場なのだけれど……」

大昔、強力な神格を持つ二つの《天命の書版》の欠片を管理するために二人の巫覡が選ばれ、その子孫が忌寸家と波々木家となったのだという。

「『本物の神』を管理する家として、この国の呪術の世界では隠然たる発言力があったのだけれど……お祭りしている神様が神様だったから……」

八岐大蛇は有名な神格であるが、多頭龍であり打ち倒される悪という役割に変わりはない。一方で忌寸家が管理してきた神格は、その多頭龍を打ち倒す『英雄神』であった。

「ここまで言えばもう分かってしまうと思うけれど……この私、忌寸刀羽華を選定した神格は『素す盞さの嗚おの尊みこと』よ」

刀羽華を選定した神格が強力であるというディーナの予想は大当たりだったらしい。

それでも、日本人なら誰でも知っている有名な神格に選ばれたという幼おさな馴な染じみを、星一郎はまじまじと見み詰つめてしまう。

「……確かに、刀羽華の実家の祭神は素盞嗚尊だったけど……」

「自分でも言うのが何だけれど、あまり大きい神社じゃないから意外よね。それに素盞嗚尊はよくあるし……」

日本神話であまりにもメジャーであるから、祇ぎ園おん社以外でも素盞嗚尊が祀られている神社はたくさんある。地図を見て近場の適当

な神社に足を運べば、ふたつにひとつは素盞嗚尊の神名が祭神の列に並んでいるであろう。刀羽華の実家も、そういった神社の一つなのだと星一郎は思っていたのだ。
「呪術の世界で幅はばを利きかす代わりに、表の世界では大人しくしようという暗あん黙もくの了解があったらしいわ。本物の神なんていう厄介な力を奪うばおうなんて頭足らずが現れないとも限らないから。ともかく、忌寸家と波々木家は本物の神格を管理してきたからこの国の呪術界では一目置かれてきたのだけれど……神格が神格だから、自然と忌寸家が主、波々木家が従という風に見られてきたの」
「素盞嗚尊と八岐大蛇じゃ、自然とそうなるだろうね」
　英雄神と、その英雄神に打ち倒される悪神と。素盞嗚尊を祀る忌寸家が上に見られるのは、至極当然の成り行きだろう。
「波々木家は、それがずっと気に入らなかったみたいね。けれど荒あら御み魂たま――無む秩ちつ序じよな魔ま力りよくを鎮しずめるための祭り、神話の再現という役割を担になう以上、神話の在り方を覆くつがえすことなど出来ない。代を経へるごとに魔力も減って、本物の神を祀る巫覡の元もと締じめという立場もほとんど有名無実化していたのだけれど……魔力災害によってそれまでの我が慢まんが一気に噴き上がったみたい」
　世界各地の聖地聖域を中心に吹ふき荒あれた魔力災害以降、この世界には再び潤じゆん沢たくな魔力が満ちた。世界の裏側で細々と伝えられてきた魔術や呪術が脚きやつ光こうを浴びることとなったのだ。
「波々木家は、千年以上の忍にん従じゆうをこの機会に晴らしたいみたい。おあつらえ向きの『摩天の夜宴』という舞ぶ台たいで、素盞嗚の巫女である私を討うち倒たおして、主従を逆転しようという魂こん胆たんね。別に忌寸家が波々木家を従えようとしたことなんてないのに……」
「本人同士に何かなくとも、周りの目というものがある」
　理解不能だと顔を曇くもらせる刀羽華に、ディーナがちょっとだけ同情するように言った。

「周りに『家格が劣おとっている』と見られれば、見られた家は不愉快になる。おまけに、忌寸家とやらと波々木家とやらは、千年以上も存続した家柄なのだろう？　それだけ長い間周りから『下だ』と思われていれば、事実や真実はほとんど関係なくなる」
「なんか、実感がこもった言葉だね」
「長い歴史を持つ王家や貴族が後ろ暗い噂うわさを嫌きらうのはそういう理由だ。嘘うそというのはある程度塗ぬり固かためられると、事実や真実以上の強度を持つ。わたしの家も、歴史だけは長いからな」
　人の噂も七十五日というが、それでも霧む散さんせず長く続いた噂や嘘は、事実や真実よりも重いものとなるらしい。
「それに、魔ま術じゆつ師しの世界は意外と狭い。永く続いた家同士が反目しあっている例は枚挙に暇いとまがない。この『摩天の夜宴』は、そういう者たちにとって格好の決闘場だろう。無論、〈聖楔者〉に選定されれば、だが」
「その波々木家から目め出で度たく選ばれた〈聖楔者〉が、憎にくき忌寸家の〈聖楔者〉である刀羽華を確実に倒すため、幼馴染みの僕を人ひと質じちに取ろうとした、と」
「……ええ。そういうことだと思うわ。巻き込んでしまってごめんなさい、星くん」
「刀羽華が謝ることじゃないよ。巻き込んだのはあくまであの波々木節奈だ」
「そう言ってもらえると助かるわ」
「それに、巻き込まれるのはいまさらだし……」
　星一郎が苦く笑しようすると、刀羽華は「？」と首を傾かしげた。
「刀羽華と幼馴染みのせいで、昔からいろいろあったからね……」
　刀羽華もそうなのだが、彼女の妹も星一郎に懐なついていた。おまけに一つ屋根の下で家族同然だったのだが、おかげで刀羽華たちに告白しようとする少年たちに妬ねたまれること妬まれること。おまけに『刀羽華に告白するには星一郎を倒さないといけない』などというまことしやかな噂が出回って、新京都に来るまで、星一郎は有う象ぞう

無む象ぞうの挑ちよう戦せん者しやたちの相手をしまくってきたのだった。
「謝るんだったら、あと十年早く謝って欲しかったな」
「……ごめんなさい……」
　刀羽華はしゅんと肩かたを落とした。
「まあ、昔からそんなだったから、巻き込まれても『いまさら』としか思えないのだけど……ディーナ。どうすればいいと思う？」
「わたしに訊くのか？　その女はお前の幼馴染みだろう。お前が決めればいいだろう」
「僕は、ディーナを護まもると誓ちかった身だからね」
　いまの星一郎は、ディーナの騎士として『摩天の夜宴』に臨んでいる。幼馴染みを手助けしたい気持ちはあるが、それとこれとは別の話だ。
「君の許しなく、他の〈聖楔者〉に協力するわけにはいかない」
「……」
　星一郎がはっきり告げると、ディーナは複雑な表情になった。
　自分の言葉にどこか不愉快な部分があったろうかと問おうとすると、ディーナは星一郎から刀羽華へと視線を移した。
「……お前の幼馴染みはこう言っているが？」
「星くんならそう言うでしょうね。昔から義ぎ理り堅がたい性格だったから」
「それでお前はどうしたいのだ、忌寸刀羽華？」
　ディーナが問いかけると、刀羽華は一いつ瞬しゆんだけ星一郎を見やった後で意見を述べた。
「少なくとも波々木節奈を打ち倒してその神格を回収するまでは、あなたたちと協力関係を結びたいと思うわ」
「……その提案を受け入れよう」
　意外にも、ディーナはあっさりと刀羽華の要望に頷いた。
「ディーナ？」
「大神級の神格に選定された〈聖楔者〉なら、戦力としては申し分な

い。本人がどうであろうとも、な」
「そうね。私としても〈聖王〉の神格もそうだけれど、〝竜殺し〟に連なる〈ブリューナク〉も頼たのもしいわ。本人はともかく。よろしくね、星くん」
　やたらに刺とげ々とげしい空気の中、波々木節奈を打ち倒すまでの同盟が締てい結けつされたのだった。

※　※　※

（……協力しあうなら、ちょっとは仲良くすればいいのに……）
　などと星一郎は思うのだが、そもそも出会いからして最悪だったディーナと刀羽華がそう簡単に歩み寄れるわけもなかった。せっかく元通りになった宿儺家のリビングに用意された夕食も、こうなると味も何もあったものではない。一応同盟記念ということで、星一郎もそれなりに腕を振るったのだが。
「星くん、片付け手伝うわね……きゃっ！」
「ふん、なんだその手付きは……ひゃっ！」
　食器の割れる音が連続する。甲か斐い甲が斐いしく手伝いを申し出た刀羽華に対抗してディーナも食器の片付けをし始めたのだが、二人の手先の拙つたなさは皮肉にも仲の良い姉妹のようだった。二人ともけして不器用ではないし運動神経も優すぐれているのに、何な故ぜか家事一いつ般ぱんとなると動きが極きよく端たんに鈍にぶくなる。何かの呪のろいではないかと、星一郎も首をひねるばかりだ。
　結局はお茶と茶ちや菓が子しを押おし付つけてキッチンから追い出した。
　さすがに無様を晒したのでしばらくは大人しくしていたのだが、
「お風ふ呂ろが沸わいたよ」
　といった途と端たん、また火種が再燃した。

「来い、星一郎」
「ま、待ちなさい！」
　星一郎を引っ張っていこうとするディーナの前に、刀羽華が慌あわてて通せんぼする。
「なんで星くんを引っ張っていくの!?」
「なんでも何も、星一郎には私の背中を流してもらわないとならないからな」
　ディーナの勝かち誇ほこったような言葉に、刀羽華がみるみる顔を赤くする。
「っ……星くん！　いやならいやって言ってもいいのよ!?」
「ふっ。いやも何も、星一郎はすでにわたしの了りょう承しょう済みだ」
「なっ……まさか……もう……！」
「実によい手て際ぎわだった」
　うろたえる刀羽華に対して胸を張るディーナ。大人げない遣やり取とりに、星一郎はひっそりと嘆たん息そくするばかりである。
「星くん！　なんでそんな女に!?」
「そんな事言われても……だいたい一いつ緒しょにお風呂に入るくらい、刀羽華とも散々してきたじゃないか？」
　幼い頃ころに『星くん、ジイシキカジョー！』とか言ってからかってきた刀羽華にだけは文句を言われたくない星一郎であった。
「ぐっ……な、なら星くん！　ひさしぶりに一緒に入りましょう！」
「何でそうなるかな……」
「星一郎！　頷うなずくことなどないぞ！　お前は私の騎士なのだから、わたしだけ相手にしていればいいのだ！」
「ふふん、ものは言いようね？」
「なに？」
「そうよね。あなたみたいな無計画なお腹なかじゃ、私に敵かなうはずもないものね」
「ほう……だらしなく垂れた肉を恥はずかしげもなく強調する女は言

うことが違うな」
「なんですって!?」
「なんだっ!?」
　再び睨にらみ合あう二人。四六時中いがみ合って疲つかれないのだろうか。
「……なら、三人で一緒に入る？」
　もう面めん倒どう臭くさいのでそう言ってしまう。途端、ディーナも刀羽華もぴたりと黙りこんだ。
　何がどうしたって自分が風ふ呂ろ場ばに連れ込まれるのは決定事じ項こうっぽい。しかし万が一、これで前言を撤てつ回かいしてくれれば儲もうけものだと星一郎は思ったのだが、
「……よかろう。だらしのない身体など見たくもないが、ここでひとつ無む知ち蒙もう昧まいな戯たわ言ごとを撤回させるのも一興だ」
「いい考えね……無節操で無計画に引っ付いた贅肉を顧かえりみさせるために、ここはひとつ私が肌はだを脱ぬぐわ」
　据すわった目付きで睨み合いながら頷き合う二人。やっぱりこうなるよなと諦あきらめた星一郎だが、時間の節約にはなったかと前向きに考えた。
　そして三人して風呂場に向かう。多少手て狭ぜまだが、ファミリーサイズなので三人くらいは普ふ通つうに入れる。
「ふん。よくもまぁ、恥ずかしげもなくそんなだらしない身体を晒せるものだ」
「あなたこそ、将来が心配になりそうなその無節操な胸を強調するのはやめたら？」
　素す肌はだを晒す二人の美少女。冷静に考えて素す晴ばらしい光景なのだろうが、星一郎は最も早はや『面倒臭いなぁ……』というのが正直な感想であった。裸はだかの付き合いなどというものは都合のいい幻げん想そうらしい。
「……よく考えたら、僕ってこの場に必要なの？」
「何を言っているのだ、星一郎？　お前はこの場でただ一人の男なの

だぞ？」
「星くんが判断しなかったら、一体誰が私とこの女の勝敗を判断するというの？」
「……つまり、どちらの方が女性として魅み力りよく的てきか、僕が判断しろってこと？」
「その通りだ」
「お願いね、星くん」
「それだけ言うんだったら、後ろ向いてないでこっち向いたら？」
『……』
　こちらに背中を向け、首をきっちり九〇度ど曲げて睨み合うディーナと刀羽華が、仲良く顔を赤らめる。勢いだけで行動しているのが丸分かりの反応だった。
「……自信がないのなら逃にげても良いのだぞ、忌寸刀羽華？」
「……同じ言葉をそっくりそのまま返すわ、ディーナ・チャレンジャー」
　いま止めるんなら勘かん弁べんしてやるぞとばかりに牽けん制せいしあう二人だが、いまさら引っ込みなど付かないだろう。五分ほどああでもないこうでもないと言い合った後、意を決して星一郎へと振り向いた。
（……やっぱり、すごいな……）
　すでに一度見たディーナの裸だが、こうして改めて見ると胸のボリュームが圧倒的である。おまけに『見るなら見ろ！』とばかりに腕を組んでいるので、余計に柔やわらかさと大きさが強調されている。刀羽華に『無計画な腹回り』などと言われていたが、骨格と筋肉がしっかりしているのでむしろメリハリよく引ひき締しまったシャープなくびれである。
　そして、
（……なんとなく予想していたけど、刀羽華もちゃんと育っていたんだなぁ……）
　共に育った幼馴染みだが、最近は長期休きゆう暇かで会えるぐらい

だった。それだけに会う度に大人びていく幼馴染みに驚いたものだが、こうして改めて一糸まとわぬ姿を見下ろすと、からかい半分で自分を風呂に引っ張りこんだ時分とは隔かく世せいの感がある。

　ディーナには『だらしのない尻』などと揶や揄ゆされた刀羽華であるが、ほっそりとした腰こしから安産型の尻の肉しし置おきの輪りん郭かくは芸術的ですらある。胸の大きさはディーナにわずかに負けているみたいだが、十分豊かに育っている。

『……』

　顔を真っ赤にして星一郎の視線を受け止めるディーナと刀羽華。そんなに恥ずかしいならもう少し言動に気をつければいいのにと思うが、自分だって巻き込まれた被ひ害がい者しやである。これくらいの役得がなければやってられないというのが正直な感想なので、この際だからと開き直ってしっかり目に焼き付けた。
「……どうなのだ？」
　しびれを切らしたようにディーナが問う。
　星一郎は顎あごに手を添そえて「ふむ」と頷いた。
「……下の毛は意外にディーナの方が薄うすいね」
「そんなこと聞いてない！」
　スパーンと星一郎の左頬が叩たたかれた。訊かれたから答えたのに、ひどい仕打ちだ。
「……あの、星くん……ど、どうかしら……」
　と、今度は刀羽華が問とい掛かける。もじもじと内うち股またになって、落ち着かなげに両手をしきりに組み直している。ようやく羞しゆう恥ち心しんというものが備わってきたらしいが、出来るならそれを十年前から持っていて欲ほしかった。
「……ちゃんと生えていて安心かな？」
「そんなことは聞いてないわ！」
　今度は右頬である。せっかく幼馴染みの成長を感かん慨がい深ぶかく報告したのに、とんでもない仕打ちであった。
「……じゃあ、ちゃんといろいろ測って比ひ較かく検討する？」
「うっ……」
「それはちょっと……」
　体重もそうだが、とかく数すう値ちは女性の鬼き門もんである。案の定、二人ともお腹や胸を押さえて視線を逸らした。
「み、見た目でズバリと言えばいいのだ！」
「そうよ、星くん！　星くんの好みはどっちか言ってくれればいいの！」
「僕の好みねぇ……」

二人ともに類たぐい稀まれな美少女である。身体付きだって多少の差異はあるが実に魅力的だ。

だが星一郎が選んだからって二人が納なつ得とくするかはまったくの別問題なのだから、ここはお茶を濁にごして誤魔化すのが一番無難な選せん択たくである。

「……見た目だけだとちょっと分からないから、ここは実際に確かめてみようか？」

そう言って、星一郎は両手を上げてにぎにぎと指を蠢うごめかせた。

「じ、実際にって……」

「やっぱり触さわり心ごこ地ちとかも重要かと思って」

「さ、触り心地……」

たじたじになって星一郎から距きよ離りを取ろうとする二人だが、やはり意地からか、お互たがいを睨んで受け入れた。

――そして数分後。

「ん、あぅ……」

「ディーナ、痒かゆいところはある？」

「べ、別に……ひっ……わ、脇わきは弱いんだからぁ……」

「ひぅんっ……せ、星くぅん……」

「刀羽華は相変わらず尻しり笑え窪くぼが弱いよね」

「や、あぁ……せ、星くん……そ、それより下にいったらぁ……」

二人とも、泡あわまみれになった身体をなんとか支えて抗あらがっている。しかし顔は熟しきった林りん檎ごのように真っ赤で、ふらふらと赤べこ人形のように揺ゆれ動うごいていた。

「くっ、うぅん……ふ、ふふ……見ろ……星一郎はすでにわたしの身体を隅すみ々ずみまで知っているんだ……幼馴染みなどという負けフラグの付いた女など既すでに飽あきが来ているのだ……ぁあっ！　せ、せいいちろぉ……そ、そんなに耳のうしろをくすぐるなぁ……」

「ひあっ……ど、どうかしら？　……こ、こうして私の弱いところをちゃんと覚えててくれるんだもの……相あい性しようからいっても私

の勝ち……ひぅううっ？　せ、せいくぅん……あ、あぁ……そんなにうなじばっかりぃ……」

そろそろ頭の中まで茹ゆだってきたのか、だんだんキャラが崩ほう壊かいしてきた。トドメとばかりに耳の穴へ優しく吐と息いきを吹きかけると、ディーナと刀羽華は仲良くクタリと風呂場に倒れ伏した。

「……意外に粘ねばったな」

星一郎は頭に巻いた保ほ冷れい剤ざいを潜ひそませたタオルを解き、風呂場から出て温度を限界ギリギリまで上げた浴室暖だん房ぼうのスイッチを切った。

「……ようやく静かになった」

湯あたりでのぼせた二人に温ぬるめのシャワーを浴びせかけて泡を洗い流すと、星一郎はてきぱきとタオルで水分を拭ぬぐってゆく。少女たちに意識があったら全力で抗うような部分まで丁寧に拭ふいてゆくのだが、なんてことない顔で黙もく々もくと作業を進める。こういうところがディーナなどに『飄ひょう々ひょうとして考えが読めない』などと言われる所以ゆえんであるが、女に慌てふためく姿を見せても男には損しかないのだから、『ただの女の裸でしょ？』という顔をするしかないのである。

ディーナを客室に、刀羽華を叔母おばの部屋へ放り入れ、ようやく星一郎は一息ついた。

「……明日の朝起きたらまた元もとの木もく阿あ弥みなんだろうなぁ……」

顔を合わせたらまた碌ろくでもない意地の張り合いがはじまるのは自明である。星一郎は深々と溜息を漏らした。

「……さっさと襲おそってきてくれないかな……」

不快感ばかりを与あたえる存在であったが、いっそいますぐ節奈が殴なぐりこんで来てくれた方が清々すると思う星一郎であった。

「あああぁ――――っ……」
　薄うす暗ぐらい部屋に、甲かん高だかい嬌きよう声せいが響き渡る。
　甘あまい悲鳴はすぐに途と切ぎれ、掠かすれるような呼吸音へと変わった。
　気を失った少女から身体を離はなし、波々木節奈は頬に張り付いた髪かみを指先で払った。そしてべったりと濡ぬれた口元をぺろりと舐なめ上げた。
「……少し強くしすぎたでしょうか……？」
　己の身体の下でぐったりと気をやった少女を見下ろし、節奈は自じ戒かいするように呟つぶやいた。
　初心な反応をしてくれたから最初はソフトに可か愛わいがろうと思ったのだが、いつの間にか気絶するほどに責め立ててしまっていた。
「ごめんなさいね」
　少女の解ほぐれた髪を整えてやる。まだ快感の熱が残っているのか、眠ねむっている少女は節奈の指が撫ぜただけでびくんと反射的に震ふるえた。可愛らしい反応にくすくすと笑い、節奈はベッドから起き上がり、備え付けの浴室に向かった。
　ここは、縁えん結むすびの神様で知られる某ぼう神じん社じやの近くのホテルの一室だ。神様を祀まつるすぐ側でこういった即そく物ぶつ的てきな施し設せつが密集しているのは、人によっては苦笑いの種であろうが、節奈は面おも白しろくて気に入っていた。
　ノブを捻ひねり、お湯ではなく水を浴びる。ぬめついた体液が流れてゆくが、ほてった身体はなかなか冷めてくれない。
「……刀羽華様……」
　うっとりと呟き、節奈は高鳴る心臓を収めるように左胸を握り込んだ。だが心臓の鼓こ動どうはまったく収まらない。
「ああ……刀羽華様ぁ……」
　胸を押さえるというよりは握り締めるようになってしまったのとは

反対の手が、自らの恥ち部ぶへと伸のびる。冷たい水を浴びながら、節奈の吐はく息はどんどんと熱く濡れてゆく。
「刀羽華様……ああ、あの姿も素す敵てきでした……ふふふ、いつもの着物姿の刀羽華様も素敵でしたけれど、ああいう姿もいいです……ああ、いけない」
　自じ慰いに浸ひたりかけた両手を何とか引き戻す。一時的な繋つなぎとはいえあの少女を可愛がってやる方が、一人遊びよりもよっぽど生産的だろう。
　ざっと汗あせを流した節奈は、シャワーを止めて浴室を出た。次はどんな風に遊んでやろうかと考えてベッドに戻ると、ベッドの前にスーツ姿の男が佇たたずんでいた。
「……無ぶ粋すいですね。ノックもせずに入ってくるなんて」
「この女は誰だ？」
　男は節奈の揶揄には反応せず、ベッドの上の気絶した少女を指差した。
　節奈は悲しげに首を振ふって嘆息した。
「名前は知りません。傷心旅行らしいので、こうして慰なぐさめてあげています」
「……いいかげんに、くだらない遊びは止めろ」
　男は苛立たしげに言った。
「貴様には、使命があるはずだ。我ら波々木家の悲願を果たす……それが貴様の使命だ」
「ええ、そうですね。お爺じい様さま方からはそう言いつかりました」
「ならば何故、それを実行しない？　何故、あの憎き忌寸の娘むすめを前にして逃げ出した？」
「あら？　あの状じよう況きようでなおも戦せん闘とうを続けるべきだったとおっしゃいますの？」
「貴様の随ずい獣じゆう〈オロチ〉には、それだけの力があるはずだ。〈オロチ〉には、我ら波々木のすべてを注ぎ込んだ。術も、金

も、想おもいもだ。危険を犯おかして七聖条約を破った以上、あそこですべてのケリを付けるべきだった」
「危険？」
　節奈は目を瞬まばたかせ、すぐにくすくすと無む邪じや気きに笑い始めた。
「ふ、ふ……何が危険だというのです？」
「あれだけの騒さわぎを起こしたのだ。カルディア委員会は貴様の情報を他の〈聖楔者〉に広めるだろう。そうなれば、この先の戦いが厳しくなる」
「それが？」
「なに？」
「それがどうしたというのです？」
「……分かっているのか？　カルディア委員会は〈聖楔者〉同士の情報によって『摩天の夜宴』を管理しようとしている。下手をするとお前の討とう伐ばつに何らかのボーナスを付けて、新京都中の〈聖楔者〉に襲わせようとするかも知れんのだぞ？」
「それが？」
「我らの悲願が遠のくということだ！　それが分からんか！」
「それが？」
　まったく揺るがぬ微笑ほほえみを浮うかべたままの節奈に、男はようやく怪け訝げんな顔をする。
「波々木の悲願？　そんなものは、わたくしには関係ありません」
「な、に……？」
「主従の逆転……忌寸の打だ倒とう。一つ覚えで繰くり返かえして、そろそろうんざりです」
「何を、言って……？」
「もういいです。これ以上煩うるさく言われるのは、邪じや魔までしかありません」
　節奈の周囲が、薄うす暗くら闇やみの中でさらに深みを増したかのように男は錯さつ覚かくした。男は急いで飛とび退すさろうとする

が、それよりも早く節奈の背に畏光の光背が浮かび上がる。虹にじ色いろの輝かがやきを目まの当あたりにし、男の足が意志に反してガクリと膝ひざを突つく。
「う、うう……？」
「黴かびの生えた、古さだけが取り柄の一族の悲願がどうしたというのです？　そのようなもので若者を縛しばるなど、愚おろかしいことだと思われないのですか？」
「ぐ、う……お、お前も波々木の一員だろう、が……？」
「産み育ててくれたことには感謝しますが、子はいつか独り立ちするもの。それをいつまでも家に縛るのは、あまり健康的とは言えませんよ？」
　節奈はおいたを窘たしなめるような口調で言って、跪ひざまずいた男へゆっくりと歩み寄る。
　白く浮き上がる節奈の美しい裸ら身しんだが、それを見つめる男の目に宿るのはただひたすらに恐きよう怖ふであった。いますぐ逃げだしたいがそれも出来ない。目の前の存在に、完全に屈くつ服ぷくしてしまっていた。
「そういえば……貴方あなたにはお仕置きをしなければならないのでした」
　思い出したようにそう言うと、節奈は足元に広がった着物の中から、〈聖楔者〉を〈聖楔者〉たらしめる神格の器、〈第二書版〉を抜き出した。
「貴方の持ってきた、宿儺星一郎の情報……一番大事な情報が抜けていました。おかげでわたくしの計画が滅め茶ちや苦く茶ちやです。上う手まく行けば、戦いもなくあの方を手に入れられたというのに……」
「それは……あの少年が〈聖楔者〉として覚かく醒せいしたのはほんのつい最近で……」
「おかげであの少年を人質に取るのが難しくなりました。それどころか、なんとか刀羽華様から引き離す算段をする必要が出てきまし

た……余計な手間を掛けさせた責任は重いですよ？」

節奈は柔らかく、しかしはっきりと男の言葉を断たち切きると、自らの〈第二書版〉を掲かかげてその頁ページを開いた。

「――〝神デインギルの威い光こうよ。神の門バベルの鍵かぎよ。原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ。太母より遣つかわされし《七しち頭とう龍りゆうムッシュマッヘ》よ。波々木節奈が汝なんじの正当なる末裔すえ〈雲気くも纏まとう八岐ヤマタノ大蛇オロチ〉の名を借りて訴うつたえ奉たてまつる。語かたり継つがれしは神々の天敵よ。その昏き顎あぎとにて、輝かがやかしき光を飲み干し給たまえ〟――――」

ずるり。

節奈の掲げた〈第二書版〉の頁と装そう丁ていが一緒くたに溶とけ崩くずれ、彼かの女じよの裸ら体たいを黒々とした粘ねん液えきとなって滴したたり落おちる。白い肌に無数の蛇へびが這はうような模様を描えがいて流れ落ちた粘液は、彼女の足元に落ちた影かげの中へと吸い込まれてゆく。

自由の利かない身体で、男はぶるりと震えた。霊視力を持つ魔術師である男の感覚は、目の前の少女の足元から自分の下へ、おぞましい気配が這はい寄よってくるのをはっきり感じ取っていた。

「ま、待て……我々の助けなく、今後の夜宴を勝ち抜けると……」

「それも、わたくしにはどうでもよいことです」

節奈が童女のように笑う。

男は悲鳴を上げようとしたが、断だん末まつ魔まの絶ぜつ叫きようは巨きよ大だいな顎に余さず飲み込まれた。

「……う、ぅん……」

何か物音で、少女は目を覚ました。身を起こそうとしたが、身体の芯しんに気け怠だるさが居い座すわってひどく億おつ劫くうだった。

「あら？　目が覚めた？」

鈴すずの音ねのような声が耳に入った途端、身体に居座った気怠さは吹き消え、少女は急いで飛び起きた。薄暗闇の中で浮かび上がる、黒くろ髪かみの美少女の裸身を目にし、少女はドキリと心臓を高鳴らせる。

「ごめんなさい。目を覚まさせてしまったかしらね？」

「あ、い、いえ……」

おっとりした雰ふん囲い気きの美少女の顔が曇り、少女は慌てて首を振った。あまりにも勢いが良すぎて、頭の後ろで括くくったポニーテイルがばふんと自分の顔に当たってしまった。

「あぅ……」

「あらまぁ……そんなに必死にならなくとも良いのに」

美少女は笑って、自分の顔に引っ掛かった髪を整えてくれる。みっともないが、彼女の顔色が晴れるなら安いものだと少女は思った。

少女が彼女と出会ったのは、新京都をぶらついている途と中ちゆうだった。失しつ恋れんとも言えない失恋を慰める傷心旅行で何となく再現史し跡せきを観光していると、着物を着ていかにも京都に似合う彼女が話し掛けてきた。絶ぜつ滅めつ危き惧ぐ種しゆの大和やまと撫なで子しこを体現するような美少女に最初は戸と惑まどったものの、やはり寂さびしく人ひと恋こいしかったのだろう。自分も一人旅だという彼女と一緒にお茶をして、一緒にホテルに泊とまることになった。

お金を節約したかったから二人で一部屋に泊まるのは助かったが、やはり緊きん張ちようした。その緊張をほぐすように彼女が悪いた戯ずらっぽくボディタッチをしてきて……いつの間にかベッドの上で狂くるったように泣なき喚わめいて気絶してしまった。

霧きりがかった記き憶おくを思い出そうとすると、お腹の奥おくがじんわりと熱を持ち始める。

あんな経験、あんな感覚は初めてだった。そういう知識はそれなりにあったが、女同士であんな快感が得られるなんて想像もしていなかった。それとも女同士だから、だろうか。彼女は気持ちよくなる場

所と気持ちよくなる言葉を完全に心得ており、肌で、耳で、舌で、甘い刺し激げきを休みなく送り込んできた。

彼女の視線に撫なでられただけで、悦びの予感に瞳ひとみが潤うるんだ。口の中で涎よだれが溢あふれ、毛穴という毛穴が開いたように全身の肌が敏びん感かんになる。

「あらあら……まだ足りないの？」

「……」

言葉を紡つむぐ余よ裕ゆうもなく、少女はこくりと頷いた。

彼女はその意図を汲くんで、細くしなやかな指で少女の乳ち房ぶさに手を添えた。

一気に高まった体温に浮かされて唇くちびるが開いた途端、熱く濡れた舌がするりと忍び込む。

「ふっ……ん、んむ、ぅ……」

彼女の舌は容易たやすく少女の舌を絡からめ取とる。

されるがままの少女であったが、潤んだ視界の端はしに部屋の様子を捉とらえて微かすかな疑念を抱いだいた。部屋の壁かべ紙がみが何やら汚よごれているように見えたのだ。なんの面白みもないベージュの壁紙だったはずだが、今は赤っぽく染まっている。それに変な匂においが鼻をつく。ずっと使っていなかった水道管から出てくる錆さび水みずみたいな湿しめった異い臭しゆう。

俄にわかに思考が回ろうとしたが、絡み合った舌を伝って喉のどの奥に甘い唾だ液えきを流し込まれた途端、媚び薬やくを注ぎ込まれたように少女の思考はどろどろに溶かされてしまう。

少女は目を閉じ、与えられる快楽を全身で貪むさぼる。そして翌朝血ち塗まみれの部屋で一人目覚めるまで、快感の余よ韻いんに包まれて幸しあわせに気絶するのだった。

三章　愛情ト呪じゆ詛そ

1

――ギィィィイイイイイイイイ――――ッッ!!

異音が虹色の火花とともに響き渡る。

お馴な染じみの工場跡あと。広々とした屋内で、二人の少女が高速で移動しながら武器を振るう。

ディーナは鮮あざやかな金きん髪ぱつを翻ひるがえして漆しつ黒こくの大おお槍やりを繰り出し、刀と羽う華かは艶あでやかな黒髪を靡なびかせて身みの丈たけを越こえる大たい剣けんを振るう。

「〈ブリューナク〉！」

ディーナが《聖王》の力で兄から借り受けた神槍が、切っ先を変形させて三さん叉さ戟げきとなる。三みつ叉またの切っ先の間でちりちりと細い紫し電でんが瞬いたかと思うと、すぐさまその規模が増大し、眩まばゆい雷らい光こうが神槍を覆おおってゆく。

「〈クサナギ〉！」

対する刀羽華が《天命の書版》の欠片かけらから引き出す顕けん現げん神格は素す盞さの嗚おの尊みこと、荒あらぶる嵐あらしを伴ともなう戦神だ。刀羽華の大剣型の権能武装〈クサナギ〉に、景色を歪ゆがませるほどの圧あつ倒とう的てきな豪ごう風ふうが集ってゆく。数百数千の獣けものが一いつ斉せいに吠ほえ立てたかのような咆ほう哮こうが、工場の屋根を弾はじき飛とばさんばかりに渦うずを巻く。

「はあああ――――っ！」

「せあああああ――――っ！」

雷らい撃げき纏まとう大槍と、豪風を招く大剣とが、真正面からぶつかり合う。

風に散らされた雷かみなりがコンクリートを焦こがし、雷に灼やかれた風が鉄筋を軋きしませる。神格が有する権能を再現する権能武装

が生み出す力はすさまじく、ディーナと刀羽華を守る畏光の守護が凄すさまじい勢いで削けずれてゆく。

　やがて雷と風が収まると、二人の少女はばっと身を引いて距離を取った。すでにディーナも刀羽華も、その身を守護する畏光の光膜は吹ふき飛んでいる。強力無比な権能がぶつかり合ったので、さすがに神聖不ふ可か侵しんの加護も種切れのようだ。

「やるな……」

「あなたもね……」

　力をぶつけ合った二人はそこはかとなくお互いを認め合うような表情をしていた。拳こぶしをぶつけ合って云うん々ぬんというより、戦闘訓練を受けた魔ま術じゆつ師しの家系だからだろう。実力者には一定の敬意をはらうという考え方が染み込んでいるらしい。

　なんにせよ、あの面めん倒どうないがみ合いが緩かん和わされるならありがたい。星せい一いち郎ろうは用意してあったドリンクやタオルを二人に差し出した。

「おつかれさ……」

「図ずう々ずうしいぞ。これはわたしに差し出されたものだ」

「あなたこそ、何もせずに星くんの優やさしさに甘えないで」

　多少の敬意などあっさり消し飛び、差し出したタオルの端と端を掴つかんだディーナと刀羽華が眦まなじりを吊つり上あげて睨にらみ合あう。

　星一郎は天を仰あおぎたくなった。まだ同盟が決まって一晩しか経たっていないが、もうすでに気力がすり減って肩や背中が重く感じる。

　というか、なんでこんなに仲が悪いのだろうか？

　出会いからしてあまりよろしくなかったが、付き合わされる方の精神的平へい穏おんもすこしは考こう慮りよして欲しい。

「……ディーナは、なんで刀羽華が嫌きらいなの？」

　糖分補給にスティック羊よう羹かんを味わっているディーナに、星一郎はそっと訊きいてみる。

「嫌って当然だろう？　わたしの騎き士しを奪うばおうとしているんだからな」
「……僕ぼくってそんなに信用ない？」
　ディーナがそういう風に思うのは、自分が幼おさな馴な染じみに絆ほだされて裏切るのではと心のどこかで疑っているからではないのか。そう考えると、星一郎は申し訳ない気分になる。
「あ、いや……せ、星一郎が裏切るなどとは思っていないぞ！」
「ほんとに？」
「ああ！　それは、星一郎はいつも飄々としてて掴みどころがないし、いつも笑え顔がおだが心の底じゃ何を考えているのか分からなくて、その癖くせ女のあしらい方ばかり上手で実は心の中で馬ば鹿かにしてるのではないかと疑ったりもするが……」
「……」
　なかなか正直にこき下ろしてくれるものである。
「だが、嘘うそだけは吐つかない。その事だけは信用している」
「……掴みどころがなくて何を考えてるのか分からなくて、心の中で舌を出してるかも知れないのに？」
「お前は嘘を言わない。嘘を言うくらいなら笑って誤ご魔ま化かして何も言わないだろう？」
「誤魔化しているなんて人聞きの悪い」
「ほう？　ならあのだらしのない女とわたしと、どちらが好みか言ってみろ」
　ディーナがじとりと半はん眼がんになって訊いてくる。ここで『ディーナの方が好みだよ』と言ってしまえば簡単なのだが、長年染み付いた処世術は如何いかんともしがたく、星一郎は曖あい昧まいに笑ってそろそろと視線を逸そらしてしまう。
「そら、見たことか」
　呆あきれたように嘆息するディーナだが、しばらくすると諦めたように苦く笑しようした。
「だが、嘘を吐くより数倍マシだ。むしろ言葉に細心の注意を払はら

うのは、ある意味で魔術師らしい心こころ掛がけとも言えるしな」
　一度口に出してしまった言葉は、口に出した本人の思う以上に人を縛る。『言こと霊だま』に注意を払うのは、魔ま術じゆつに関係する者なら当然の配はい慮りよともいえた。
「あの女が気に入らないのは、単純にわたしの好みと相性の問題だ。星一郎は裏切らない。お前自身が、誓ちかったのだから」
「――うん。僕はディーナの騎士だ。君を守り、君を勝たせるために全力を尽つくすよ」
　星一郎は笑顔で再度、ディーナに誓って頭こうべを垂れた。
　ディーナは嬉うれしそうに頷いたもののどこか心配気に瞳を揺らすのを、頭を垂れた星一郎が確かく認にんすることは出来なかった。
　そして、少し離れた場所でディーナと星一郎のやりとりを眺ながめる刀羽華は、痛ましい顔でひっそりと溜ため息いきを吐くのだった。

　昼間の訓練が終わると、宿すく儺な家へ戻もどって夕食を摂とる。食後のお茶を挟はさんで入浴時間となるのだが、さすがに二日目ともなると『一人でゆっくり身体を休めたいんだけど？』と星一郎が辟へき易えきした顔でディーナと刀羽華へ言ってきた。
　ディーナも、別に毎日身体を洗って欲しい訳ではないので、渋しぶ々しぶと頷いた。安心したように浴室へ向かう星一郎の後ろ姿に勿もつ体たい無ないなどと思ってしまい、慌てて首を振る。まるで期待しているみたいではないか。自分はそんなに安っぽい女ではないのだと、ディーナは自分に言い付ける。
　……いささか遅おそい気もするのだが。
「……どうかした？」
「いや、何でもない」
　風ふ呂ろの順番を待つ間、ディーナと刀羽華はリビングで二人きりとなる。星一郎がいるときは自然といがみ合って罵ば詈り雑ぞう言ごんを飛び交わせる二人であったが、二人きりになると思った以上に静かになる。

ディーナも不思議なのだが、星一郎を間に挟まないと、この忌いみ寸き刀羽華という少女にそれほど嫌けん悪お感を抱かなかった。座り方はぴしりとしているし、挙動もキレがある。着ている服が和服だったら、とても様になるだろう。

星一郎にはだらしなく表情を緩ゆるませているが、いまは適度に引き締まって生来の整った顔立ちを際きわ立だたせている。売り言葉に買い言葉でいろいろ言うが、とても綺き麗れいな少女だ。

翻ほん訳やくされた神格を代々祀ってきた家系という出自もあって、ディーナと似通った部分も多い。もし普通に敵として相対していたら、きっと敬意を払って戦たたかいに臨のぞんだことだろう。もしかしたら友人になれたかも知れない。

「……そういえば、先日の話し合いが途中だったな」

波はゞば木き節せつ奈なの騒ぎで中断してしまった会見の事を切り出すと、刀羽華は目元を歪めた。

「そうね……そうだったわね……」

憂うれい顔がおの刀羽華は、ちらりとリビングのドアを見やった。さんざん少女たちに振り回されたせいか、星一郎はまだしばらく風呂場から出てくる気配はない。一人でゆっくり長なが風ぶ呂ろと洒しゃ落れこんでいるのだろう。

「……あなた、星くんのお姉さんのことは知っているわね？」

「宿儺摩ま子このことか？」

最新の魔導工学士であっても、伝統を伝える古典魔術師であっても、宿儺摩子はけして無視することの出来ない存在だった。魔導工学の技術を十年早めた天才として、彼女は国内外を問わず有名であった。

現在の魔導デバイスの根幹を成す、魔術構文を保存展開する『魔導晶体マギア・シリコン』も、霊れい感かんのないものに霊視を可能とする『霊視鏡グラムサイト』も、宿儺摩子が実用化したものだ。それもわずか十三か十四という若さ、いや、幼さで成なし遂とげたのだ。

魔術に関かかわる者で、宿儺摩子の名を知らぬ者はモグリと言って

良い。
「一年前の大規模な実験事故で行方不明……だが小規模とはいえ魔ま力りよく災害に巻き込まれたのだ。恐おそらくは……」
　魔力災害のもっとも厄やつ介かいな点は、暴走した魔力がまったく制せい御ぎよを受け付けないことだ。災害を起こすほどに暴走した魔力は現世の法則を掻かき回まわすだけ掻き回し、希き釈しやくされて無害化するまで何人も手出しできない。他者の制御を受け付けないという点において、〈聖楔者ヒエロス〉の畏光、神聖不可侵の神性と同等の性質といえる。〈聖楔者〉でもなければ、魔力災害の只ただ中なかでとても無事ではいられないだろう。
「星一郎の言動から推察するに、素晴らしい女性であったのだろうな」
　ディーナにも敬愛する兄がいる。現在は原因不明の昏こん睡すい状態であるが、それだけに姉を失った星一郎の気持ちは察して余りある。
　星一郎は本心を巧うまく隠かくすのだが、薄はく情じようにはまったく感じない。すました顔の裏側から、誠実な感情が時折見え隠れする。それは間ま違ちがいなく宿儺摩子という心から敬愛する姉が居たからこそ育はぐくまれたものだろう。
「ええ……そうね。摩子さんは素す晴ばらしい……凄すごい女性だったわ」
　刀羽華は憂うれいをますます強く滲にじませ、泣くのを堪こらえるように呟いた。
　眉まゆを顰ひそめるディーナに、刀羽華はまるで懺ざん悔げでもするような重々しい声で話しはじめた。
「摩子さんは、凄い人だったわ。能力だけじゃなく、その在り方も。両親を失った事故で大おお怪け我がを負い、身体のほとんどの自由を失った星くんに常に寄り添っていた……」
　思わぬ事を聞かされて目を見開くディーナに、刀羽華は苦笑まじりに説明した。

「彼かれ、一時はほとんどベッドから起き上がれなかったの。彼の胸の傷を見たでしょ？」
　ディーナは頷うなずいた。
　星一郎の胸には、大きく深い傷きず痕あとが刻まれていた。大穴を慌あわてて埋うめ直したように歪いびつに引ひき攣つった傷痕だ。星一郎自身も『生きているのが奇き蹟せきだ』と皮肉っていた。
「事故直後、星くんはあの傷痕から下がほとんど動かなくなってた。起き上がることもほとんど不可能で、寝ね返がえりさえまともに出来なかったわ」
「……想像できないな、そんな星一郎は」
　人間離ばなれした身体能力で敵へ向かってゆく現在の星一郎からは、考えられない過去だ。
　星一郎が両親を失ったのは十年前だと聞いている。その時に傷を負ったのだから、当時はせいぜい六歳さい程度。そんな幼い少年が両親を失って半身不ふ随ずいとは、いったいどれほど辛つらい思いをしたのだろうか。
「おまけに、悪夢でいつもうなされてた。お見み舞まいに行くと、同い年とは思えないほどに憔しょう悴すいしてて……それまではどちらかといえば意地っ張りで直情的な性格だったのに、すっかり暗くなってしまったわ」
「それも、なかなか想像できないな……」
　いつも冷静な澄すまし顔で対応する星一郎が昔は直情的だと聞かされても、ディーナには想像の埒らち外がいであった。
「そんな星くんに寄り添ってリハビリに付き合ったのが、まだ幼い摩子さんだった」
　まだ八歳そこそこの宿儺摩子は、弟の側をまったく離れなかったそうだ。自らも怪け我がをして入院していたにも拘わらず、夜も星一郎のベッド脇で彼を見守っていたらしい。幼い星一郎が悪夢に飛び起きた時、すぐに彼を慰められるようにと。
「当時は叔母の圭けい子こさんも子供二人の面倒を見れるような状態

じゃなかったから、家族付き合いのあった私の家で引き取る事になった。私も星くんの世話を手伝ったけど、摩子さんは片時も星くんの側を離れなかった」

幼く不自由な星一郎に寄り添い、時には泣きながら叱しかって奮い立たせたのだという。自らも両親を失ったばかりの少女とは思えない責任感だ。

その甲か斐いあって、星一郎は事故の後こう遺い症しようをほとんど残さず、一年ほどのリハビリで身体の自由を取り戻したのだという。

「星くんの身体が治ると、彼女はすさまじい勢いで勉強しだした。もともと頭が良かったけど、すごい勢いで知識を得ていった。私も、私の両親も心配したけど、摩子さんは『わたしが星一郎を守らなきゃ』って言って止めなかった」

「なるほど……」

星一郎は、家族を守ろうと戦うディーナを『もっとも貴とうといと思う行動だ』と言っていたが、それはやはり自分の姉がそうだったからしい。

「ご両親の遺産も保険も、星くんのリハビリでかなり消費していたから、余計に『お金が必要なんだ』って頑がん張ばったんでしょうね。おかげで摩子さんは天才少女の名を恣ほしいままにして、鳴り物入りで魔導工学の研究所に招しよう聘へいされたわ。けど、そんな事は些さ細さいなことよ。摩子さんが本当に凄いのは、そんな血の滲むような努力をしながら、星くんへの愛情をまったく途切れさせなかったことよ」

どれほど苦しくとも、常に星一郎へ笑顔を向け続けたのだという。申し訳無さそうにする幼い星一郎に『これがわたしの役目なのよ』と言って、一言たりとも辛いとは言わなかった。

「むしろ、私に頭を下げるほどだったわ。『弟に罪悪感なんて感じさせないよう相手をしてくれ』って。だから、私と亜矢香いもうとで、精せいーいつ杯ぱい星くんを振り回したわ。それが摩子さんの願い

だったし、実際楽しかったけれど……嫉しつ妬ともちょっとあった。星くんがあまりに摩子さんばっかり気にかけるのが、子供心に面白くなかったから……」
　刀羽華はそう言って、はっきりと自嘲の笑えみを浮かべた。
「そう、嫉妬はあった……嫉妬だけで済んでた。摩子さんが居なくなるまでは……」
「……」
　いつの間にか、ディーナは黙だまって刀羽華の話に傾注していた。彼女はまったく口を開いていないのに、喉がひりつく程に乾いていた。刀羽華の表情と声に、不ふ穏おんな気配を感じずにはいられなかった。
「摩子さんは、愛情のすべてを星くんに注いだ。だから星くんは自然と心に誓うようになった。自分のすべてを使って姉さんを守る、姉さんに報いる、って……どう思う？」
「……宿儺摩子は、星一郎を肉親ではなく……異性として……？」
　ディーナが問うと、刀羽華は弱々しく首を振った。
「本当の所はわからない。摩子さんの星くんへの献身はいささか度を越していた。けれど、そこまで心配はしていなかった。摩子さん自身、弟が自分を必要以上に慮おもんぱかるのを望んでいなかった。けれど……摩子さんは一方的な愛情と献身だけ残して、星くんの前から永遠に去ってしまった。彼の想いと一いつ緒しよに」
「……」
「星くんの『誰だれかを守る』という願いは、ほとんど『呪のろい』だわ……彼には見返りという考えが抜ぬけている。応こたえてくれるべき人が居なくなってしまったから当然だけど」
「……」
「見返りのない献身を尊いと見る人もいる。けれど私はそうは思わない。見返りを求めないということは、相手の心を必要としていないということだもの……」
　俯いていた刀羽華は、ゆっくりと顔を上げた。哀しみの滲んだ、泣

くのを堪えるような顔をしていた。
　だが……弱々しい、儚はかない表情の中で、瞳だけは痛いほどの圧力をディーナへ注いでいた。
「彼の献身は代替であり、自虐でしかない。彼は未いまだに、摩子さんだけを見てる。もういない彼女だけを。星くんはあなたを選んだ。摩子さんの代わりにね」
「……元々、それは星一郎自身が言っていたことだ。それも含ふくめてわたしは……」
「あなたはそれでいいかもしれない。けれどこのままでは、ますます彼は死んだ摩子さんだけしか見れなくなる。誰も愛せなくなってしまう。死人だけを追い求める、可か哀わい想そうな死人が一人増えるだけ。あなたは……彼を生きているだけの死人にするつもり？」
「……」
　ディーナは何も言えなくなってしまう。
　そして、気付いてしまう。
　星一郎が何度『君を護まもるために戦う』と言ってくれても、素す直なおに喜べなかった理由。
　簡単な事だ。星一郎はディーナ・チャレンジャーを守っているのではない。もうすでに存在しない、宿儺摩子という死人を守ろうとしているのだ。
「彼の献身に最後まで付き合う気がないのなら……彼の呪いと付き合う覚かく悟ごがないのなら、すぐに彼を解放して。このままじゃ彼は『誰かを守る』だけで、自分の心と人生をすり減らすことになる。いえ、それどころか、自分の命すら捨ててしまうかも知れない」
「……どういう意味だ？」
「忘れたの？　この『摩天の夜宴バビロン・ナイト』は、すべての神格を回収するまで終わらないのよ？」
「っ……」
　そうだ。星一郎はその身に神格を宿している。〈第二書版〉には神格を回収して統合する『神話再編システム』が内蔵されているが、そ

の方法は夜宴で降くだした敵の〈第二書版〉――神格の器うつわを砕くこと。
　星一郎の場合は……
「浮かれてそこまで考えていなかった？　もし首尾よくあなたと星くんが夜宴を勝ち残ったら、彼はどうすると思う？　ここまで聞いたなら、あなたにも想像がつくでしょう？」
「……」
「星くんを使い潰すつもりなら、仮令彼に恨まれようと、私はこの生命にかけてあなたを殺すわ。あなたが星くんを少しでも可哀想だと思うなら……もう、彼に関わらないで」
　刀羽華はディーナが何かを言う前に立ち上がり、足早にリビングから出て行った。
　残されたディーナはしばらくの間項うな垂だれていたが、やがて小刻みに震え出した肩かたを自分で抱いて押おし留とどめた。
「う、うう……」
　気にしなければいい。ディーナにとって、昏睡状態の兄を救うことが第一なのだ。他に方法がないからこそ、『摩天の夜宴』の勝者に約束された奇蹟にすがったのだ。
　勝ち残ることだけを考えなければならない。そもそも、星一郎とてそれを望んでいるではないか。自ら踏み台になると言っているのだから、踏み台にしてしまえばいい。
　それが一番だ。
　それが自分の為なすべきことだ。
　そう思いはするが、ディーナの胸中は寒々しく凍える一方だった。

「……私も、よく言うわ……」
　リビングを出た刀羽華は自嘲を浮かべた。なんて偉そうなことを言ったのだろうか。自分には、あんな偉そうなことを言う資格なんてないのに。

深まりそうになる自嘲を振り払い、刀羽華は星一郎の部屋に向かった。

一応はノックし、その後で有無を言わさずドアを開けた。

「刀羽華？」

ハーフパンツにタオルを肩に掛けただけの、いかにも風呂あがりらしい姿の星一郎が、自室に入ってきた刀羽華をじとりと睨む。

「勝手に入って……」

「ノックはしたもの」

ぺろりと舌を出し、刀羽華は星一郎の腕うでを絡め取った。

「いいじゃない。あの女が静かな内に、お話しましょ？」

「……しょうがないな」

やれやれと首を振り、星一郎はベッドに腰こし掛かけた。刀羽華は当然のようにその横へ座り、すりすりと星一郎の肌はだに頬ほおずりする。

「ふふ……久しぶりの星くんだぁ」

「何がそんなに楽しいかな？」

星一郎がぽりぽりと頬を掻く。

「昔からそうやって擦り寄るけど……僕に引っ付いても汗臭いだけじゃない？」

「そんなことないわ。星くんの汗の匂いは絶品よ！」

「匂いフェチなの？　まぁ、犬とか猫ねこの匂いが好きって人もいるしね」

星一郎はそう言って苦笑した。

無邪気に星一郎に擦り寄りながら、刀羽華の胸中に哀しみが広がった。彼は昔からこうだった。刀羽華が抱き着くのは、ペットを可愛がるようなものだろうと納なつ得とくして好きにさせていた。一応は苦言を口にするものの、星一郎は一度も嫌いやがることはなかった。

星一郎は、惜おしみない愛を与あたえてくれる姉を心の底から尊敬した。そして姉の愛に応え、自分がいつか姉を守るのだと誓っていた。あるいは姉以上に、早く大人にならねばと生き急いでいた。

刀羽華は、摩子にばかり目を向けている星一郎が面おも白しろくなく、余計にからかって視線を引こうとしたのだが、星一郎はさらりと受け流すばかりだった。

やがて叔母おばの圭子の仕事も安定し、摩子が実績を上げると、星一郎は新京都へと引っ越していった。残念ではあったが、刀羽華はそれほど心配してはいなかった。むしろ適度に距きよ離りをとって、女を磨いてやろうと思っていた。

だが、摩子が魔力災害に巻き込まれた一年前、星一郎は決定的に変わってしまった。

『刀羽華。姉さんが居なくなっちゃった』

急いで駆け付けた時、刀羽華が見つけたのは幼馴染みの少年の残ざん骸がいだった。普ふ通つうに受け答えしていたものの、彼の眼には何も映っていなかった。

その時ほど、刀羽華は摩子を恨んだことはない。姉弟の仲の良さに嫉妬することもあったが、才色兼備を体現する摩子は、刀羽華にとっても尊敬に値あたいする女性だった。

だが、実際にはどうだ？

彼女の行為が間違いとは言わない。けれど、あまりに無責任だった。

摩子の愛は、結果的に最愛の弟を生きる死人にしたのだ。姉の死を悲しんで泣くことも出来ない、あまりに無残な少年を一人生み出しただけだった。

それからも刀羽華は何度も星一郎に会いに来たが、彼の時間は一年前から止まったままだった。歯がゆく思いながらも、時間がいつか解決してくれることを願い、刀羽華は星一郎と仲の良い幼馴染みを演じるしか無かった。

それが、『摩天の夜宴』が最後の止とどめとなった。

皮肉にも星一郎が〈聖楔者〉となった。しかも、守るべき対象を見つけて参戦していた。

「……ねえ、星くん」

「ん？」
「星くんは、あの女をどう思ってるの？」
「ディーナのこと？」
　刀羽華が頷くと、星一郎は苦笑した。
「僕が守ると決めた人だ」
「……なんであの女を？」
「摩子姉さんと同じような表情をしてたから、かな」
　星一郎は懐なつかしむような眼をして答えた。
　刀羽華の胸がズキリと痛む。やはり、星一郎はまだ『姉を守る』という願い――いや、呪いにかかっているのだ。考えてみれば、あのディーナという女こそ良い面の皮かも知れない。星一郎は、姉の代わりになる〝守るべき対象〟が欲ほしかっただけなのだから。そう思いはするのだが、星一郎が守るべき対象だという一事で、『どうして自分がその位置にいないのか？』と、刀羽華は気が気でなくなってしまう。
「だから、刀羽華。悪いけれど、君がディーナに敵対するなら、僕は君を容よう赦しやしない」
「……別にいいわ」
　肩を竦すくめ、星一郎にいっそう身を寄せる。胸を押し付けるが、星一郎は暑そうに身み動じろぎするだけだった。
「別に、『摩天の夜宴』に勝ち抜こうとは思っていないし」
「そうなの？」
「私が参加したのは、あくまで選ばれたからに過ぎないわ。父様も母様も、忌寸の人たちは呪じゆ術じゆつ界に興味をなくしているから」
　長年日本の呪術界に隠いん然ぜんたる地位を持っていた忌寸だが、隠れ潜んでいた間に魔術は意味をなくしてほとんどサブカルチャーの如く扱われるようになった。有名無実化した『素盞嗚の巫女みこ』という立場に、忌寸の一族はほとほと辟へき易えきしていたのだ。魔力災害以降は、細々と伝えられていた術式でそれなりの資金を得ることにも成功している。むしろ力が大きすぎて持て余す《天命の書版》の

欠片を『摩天の夜宴』で精算出来るなら、願ったり叶ったりなのであった。
「発破は掛けられているけれど、負けたらその時はその時ね」
「けれど、刀羽華にも願いがあるんじゃない？　完成した《天命の第二書版》があれば、無限の魔力が手に入る。それで何か願いたいことはないの？」
「……私の願いは、そんなことじゃ手に入らないもの」
　泣きたくなるのを堪え、刀羽華は悪戯っぽく星一郎へ笑いかけた。
「けれど、星くんが私のものになるなら、考えなくもないかしら？」
「心にもないことを言わないの」
　星一郎がかるくチョップを降らせてくる。額を押さえ、ぺろりと舌を出した。
「バレた？」
　そう。刀羽華の願いはそんなものではない。刀羽華が願うのは星一郎を——愛する幼馴染みの少年の呪いを解くことなのだから。
（……最悪の場合、私が星くんを守らなきゃ……）
　星一郎を、献身などという呪いで失うわけにはいかない。いざとなれば自分が勝ち残らなければと、刀羽華は密かに思いを固めた。

※　※　※

　鉄クズ同然となった廃車が積み上がったスクラップ場に、冷たい月光が降り注ぐ。オイルと錆の臭いが交じり合い、さながら処刑場の如き昏い空気を漂わせていた。
　そんな人が寄り付かないスクラップ場に、からんころんと軽かろやかな下げ駄たの音が響き渡る。やがて赤錆だらけの廃車の山の陰から、和服姿の少女が姿を現した。
　波々木節奈である。

可か憐れんな雰囲気を纏わせた彼かの女じよはこの場においては浮いてしまうように思えたが、不思議と違和感はない。むしろ自動車の骸むくろたちを、彼女こそが積み上げたかのような不気味な威圧感が華奢な肉体から放出されているようですらあった。

妖気、とでもいうのだろうか。

重く怪しい気配が、下駄の音が響く度に鉄クズの山に絡み溶とけてゆく。

やがて手頃な鉄クズの山へ、節奈はしずしずと近付いていった。

「さて……」

鉄クズへ触れようとした彼女であったが、ふと何かに気付いて振ふり返かえった。

鉄クズの山の陰から無数の人ひと影かげが、音もなく湧き上がる。

「ったく……面倒クセェ……」

人影の一つが節奈へと歩み寄り、月光にその姿を晒さらした。鬣たてがみのようなオレンジ色がかった金髪に、ラフに着崩したパンツスーツ。さらに肩には大おお槌つちを担いでいる。

カルディア委員会のエージェント、ブリュンヒルデ・レーヴェは、野性味のある美貌を節奈へと向けた。

「こんな入り組んだところに入り込みやがって……ようやく見つけたぞ、波々木節奈」

「それならば、探さなければ良いのでは？」

節奈が笑顔で応じると、ブリュンヒルデは切れ長の目を細めて舌打ちをした。

「そうしたかったがな……だが、お前のせいでこっちは大忙しだ。宿儺星一郎への襲撃もそうだが、ホテルの血塗れ事件……あれもお前だろ？　部屋の掃除に哀れな少女のケアやら何やら……あれだけ動き回らされたんだ。文句の一つも言わなきゃ収まらんだろうが」

「そうなのですか？　どうしましょう、心の準備が出来ていませんわ……」

口元を押さえ眉を歪める節奈は、いかにも弱々しく儚い少女にしか

見えない。だが、すり潰された血肉で真っ赤に染まった部屋を実際に見たブリュンヒルデは、目の前に立つのがか弱いという言葉からもっともかけ離はなれた、真性の化け物だと知っていた。
　何より周囲に漂ただよう鬼気が、言葉以上に語り掛けてくる。
「……警告だ、波々木節奈。七聖条約に従い、穏便な戦いを心掛けろ。さもなくばカルディア委員会は、本格的にお前の情報を他の〈聖楔者〉に知らしめる。お前の能力、随ずい獣じゆうの権能、居場所、隠れ家も。スリーサイズからその日食べた三食のメニューに至るまで、洗いざらいだ」
「まぁ……なんて酷ひどいことを……乙おと女めの秘密を晒すだなんて……」
　よよよと泣き崩れる節奈を見て、ブリュンヒルデは担いだ大槌の柄えを握り直した。周囲の戦闘員たちも、銃器に見える魔導デバイスをいつでも撃てるよう狙いを定めた。目の前の少女から発散される気配が、その禍まが々まがしさを増している。
「そんな酷い方々には……お仕置きが必要ですわね」
「散れ！」
　ブリュンヒルデが叫んだ直後、廃車の山を突つき破やぶり、黒こく鱗りんの大だい蛇じやが鎌かま首くびをもたげた。八首の大蛇が節奈を中心に、取り囲んでいた戦闘員たちへと牙きばを剥むいて威い嚇かくする。
「さあ、〈オロチ〉……薙なぎ払はらいなさい」
『ジャアアアァァァァァアアアアアアアアアアア！」

それぞれの首が強きよう烈れつな畏光を発し、見る者の心を折ろうとする。木偶でく同然になった戦闘員たちを薙ぎ払うべく〈オロチ〉の首が襲い掛かるが、カルディア委員会の戦闘員たちは辛かろうじてながらその攻こう撃げきから身を躱かわした。

「あら？」

さらに魔導デバイスを掲かかげ、幾つもの自動化された魔術を撃ち放つ。敢え無く大蛇の表面を覆う畏光の光膜に無効化されるのだが、それを見て節奈は頬に手を添えて首を傾かしげた。

「あらあら？　どうして畏光に屈くつしないのでしょうか？　どんな細工を――」

独り言を切って、節奈は顔を上げる。月を背に、ブリュンヒルデが巨きよ大だいな戦鎚を振ふり被かぶって落ちてきていた。

「せあぁぁぁぁあああああああああああああああっ！」

――ギィィィイイイイイイイイイイイイイイイイイイ――――ッッ！

振り下ろされた大槌と節奈との薄うす皮かわ一枚の僅わずかな間かん隙げきから、虹にじ色いろの火花と激しい異音が響き渡る。

「あらあらあら？　あなたも〈聖楔者〉？　……いえ、そうじゃない。あなた……」

「ちぃっ！」

野性味めいた美貌を歪ませてブリュンヒルデは飛び退くが、追撃すべく大蛇の一首が襲いかかる。なんとか身を翻すが通り過ぎた大蛇の鱗が左ひだり腕うでをかすめ、ブリュンヒルデのスーツにじわりと血が滲んだ。

「くっ……っ!?」

さらに別の首が襲い掛かる。ブリュンヒルデはとっさに大槌を掲げて大蛇の大顎を防ぐ。再び虹色の火花と盛大な異音が撒まき散ちらされた。

「なるほど……あなた方の魔導デバイスには擬似的な神性が付加されているのですね？　おそらくは神具……神性を帯びた武器を組み込ん

でいるのではありませんか？」
「ぐっ……」
「大昔の代行者……〈聖楔者〉の先達が遺した道具たち。なるほど、それならば多少は〈聖楔者〉の畏光に抵抗力があるでしょうが……所しよ詮せんは残り香、神性の搾しぼり滓かすでしょう？　凡百の魔術師相手なら必殺の武器なのでしょうが、神性の源である《天命の書版》に選定された〈聖楔者〉に、どこまで対たい抗こうできるのでしょうか？」
「ぐ、う……」
　抗あらがうブリュンヒルデの大槌に、ビシリと大きな罅ひびが走る。同時に、大蛇の牙が徐じよ々じよにその距離を縮めはじめる。その光景は、崩れようとする城壁をたった一人で支えるかの如く、結果の決まった鬩せめぎ合あいに見えた。
「ふふ……あと少し……っ!?」
　ガクン、と節奈が仰のけ反ぞった。
　同時に、彼女の首で異音と火花が舞い散る。
　白く細い首に、魔力光を帯びた鞭むちが絡まっている。
「う、くぅ……」
　首を捻ひねって背後を見やると、艶あでやかな黒くろ髪かみの麗れい人じんが、ぎりぎりと鞭を引っ張って節奈を引きずり倒そうとしている。
「ぐっ……あな、た……」
「総員、一斉射撃！」
　グリムゲルデが黒髪を振って周囲へ命じる。
　黒鱗の大蛇を牽けん制せいしていた戦闘員たちが、一いつ斉せいに節奈へとデバイスを向ける。火炎や烈れつ風ぷうが襲い掛かり、相乗効果によって巨大な爆炎の花を咲かせた。
『ジャァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ!!」
　八首の大蛇がやたらめたらに暴れ回る。

ブリュンヒルデが隙すきと見て飛び退き、グリムゲルデも鞭を引いて暴れ回る大蛇から離れた。戦闘員たちも速やかに後退し、弾はじき飛とばされてくる廃車を身をかがめてやり過ごした。
「やったか!?」
「その言葉はあまりよろしくないわ」
煙けむりの立ち込める爆ばく心しん地ちを睨にらみ、罅割れた大槌を構えるブリュンヒルデに、グリムゲルデも鞭を握り締めて答える。
「そりゃそうだが、あのネジの吹っ飛んだ小娘に傷の一つでも負わせないと、こっちの腹が収まらない……ん？」
ぴとりと頬に何かが降りかかり、ブリュンヒルデが手で拭ぬぐった。拭った彼女の手の甲こうには、赤い血がこびりついていた。
「……一太刀は浴びせてやった、のか？」
「いえ、これは……」
「ふふふ……ちょっと驚おどろきました」
鎌首をもたげる大蛇の額を足場に、節奈が煙を裂いて姿を現した。血を滴らせる右手を持ち上げ、ぺろりと傷を舐なめ上あげる。
「ほんとうに驚きました……ふふふ。わたくし、こう見えて負けず嫌いなのです。ですからわたくしも、皆みなさんを驚かせなくてはなりませんね」
『ジャァァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ!!』
八首の大蛇が顎を開き、黒い鱗を波立たせる。八対十六個の眼球が赤々と燃え上がった。
「な、何を……!?」
ミシリ、ミシリと、周囲の鉄クズが音を立てて変形し出す。やがてスクラップ場には、無数の歪いびつな人型が立ち上がっていた。古代の鎧よろいを思わせる体躯に、蛇へびを思わせる扁へん平ぺいな頭部。鉄細工の蛇じや頭とう兵へいとでもいうべき人形が、鉄てつ錆さびの剣けんを手にじりじりと歩を進め始める。
「これが、波々木節奈の……八岐大蛇の……！」

「『錬れん鉄てつ』の権能……なるほど、こういう風に使うのですか……」
　ギチギチと錆を散らして動く蛇頭兵たちに、ブリュンヒルデとグリムゲルデが目を見張った。よくよく見れば、蛇頭兵たちには、ぽつぽつり血が染み付いている。節奈の傷はダメージではなく、この蛇頭兵たちを生み出すための手順に過ぎなかったらしい。
「焼き入れがまだですが……あなた達には丁度良いでしょうか？」
　くすりと節奈が笑うと、蛇頭兵たちは関節を軋らせてカルディア委員会のエージェントたちへ襲いかかった。
　戦闘員たちは魔導デバイスで応戦するが、蛇頭兵たちはなんら意に介さずに迫せまってくる。動きこそ錆び付いた歯車のように鈍にぶいが、ゾンビを思わせる不気味さを感じさせた。
「下がれ！」
　ブリュンヒルデが部下の戦闘員を下がらせ、蛇頭兵の一体へと大槌を振り下ろす。
　――ギィィィイイイイイイイ――――――ンンッッッ！
「なっ――」
　異音が響き、火花が散る。
　そして砕けたのは、錆の浮いた蛇頭兵ではなく、ブリュンヒルデの大槌の方だった。いかに〈オロチ〉の攻撃で罅が入っていたとはいえ、あまりにあっけない武器の最後に、ブリュンヒルデの鋭するどい美貌が引き攣った。
「こいつら……畏光を!?」
「ええ、そうです。あなた方が持つ魔導デバイスに内蔵された擬似神格と同じです。わたくしの血を通じ、最低レベルではありますが神性を宿してあります」
「つまりはこの鉄クズの兵隊の一体一体が、神具ということですか……」
　グリムゲルデの怜れい悧りな美貌に、一筋の汗がつぅ、と流れた。
　蛇頭兵の数は五十体はあるだろうか。最低で限定的ではあれ、この

一体一体に神聖不ふ可か侵しんの加護が与えられているのなら、恐るべきことだった。謂わば『伝説の武器』と称されるような神具や宝具が列をなしているのだ。悪夢のような光景である。
「……波々木節奈。あなたは七聖条約を守る気は、まったくないというのですね？」
「ええ、ありません。そもそも『摩天の夜宴』も、わたくしにはどうでもよいのですから」
「……ならばカルディア委員会は、あなたに制裁を加えなければなりません」
「ご自由に？　わたくしはわたくしの願いを叶えられれば満足ですし、それもさほど時間がかからないでしょうから」
　右手に流れた血を舐め取り、節奈はゆらりと和服の裾すそを風に流した。
「けれども一応は念のため、あなた方を屠ほふって時間稼ぎと参りましょうか……」
「撤てつ退たい！　全力で撤退だ！」
「ふふふ……あはははははっ！」
　節奈の無む邪じや気きな笑いに釣られるように、蛇頭兵たちが虚ろな口こう腔こうを晒し、目の前の獲え物ものたちへしゅるしゅると錆び付いた舌をちらつかせた。

2

「……」
「……」
「……」
　静かだった。
　星一郎は焼き鮭をほぐしながら、ひっそりとディーナと刀羽華の様子を覗うかがった。
　出会ってからこれまで、顔を合わせればいがみ合っていた二人だ

が、いまはお互たがい一言も喋しやべらない。これまでの事を考えれば静かな方が好ましいのだが、この類たぐいの静寂は騒さわがしいよりも居い心ごこ地ちが悪い。

ディーナは、何な故ぜか星一郎とも刀羽華とも顔を合わせようとしなかった。星一郎が呼びかけると返事はするが、どこか余よ所そ余よ所そしい感じだ。

刀羽華はといえば、とくに何か言うこともなく黙もく々もくと朝食を進めていた。

一晩ですっかり様変わりした二人の様子に、星一郎は内心で首を傾げた。

朝食を終え、すっかり秘密基地として定着した工場跡あとへ訓練に向かう間も、ディーナも刀羽華も無言を貫いていた。昨日までは三歩歩く毎に嫌味と雑言のやり取りをしていたので、逆に不気味なくらいだった。

居心地悪く工場跡に辿たとり着つくと、見知った人間が二人して星一郎たちを待ち構えていた。カルディア委員会のエージェントのブリュンヒルデとグリムゲルデであった。二人とも包帯を頭に巻いたりして、荒事の後と思おぼしき姿であった。

「来たな」

「星一郎様のご自宅へ直接伺おうかと思いましたが、このような姿なのでここでお待ちしておりました」

ブリュンヒルデとグリムゲルデが前置きを抜きにして報告をはじめた。昨晩、波々木節奈の居場所を捉とらえて勧告に行ったところ、問答無用で返り討ちにされてしまったらしい。

「良く無事でしたね」

無言の少女たちに代わって星一郎が応対すると、グリムゲルデが神妙な顔で頷いた。

「なんとか死者こそ出しませんでしたが、二〇名の魔導戦闘員の大半が傷を負い、半分は復帰不可能な状態です。貴重な神具を消費してしまい、カルディア委員会としてもかなりの痛手です」

　グリムゲルデはさらに、節奈が見せた『錬鉄』の権能の説明もした。
「畏光を纏まとう蛇頭兵、か……」
「出力は最低限なので、星一郎様の拳こぶしなら紙クズのように引き裂けるでしょうが、どうかご油断なさらないように。数の暴力は抗いがたいものがありますから」
「明日、新京都の〈聖楔者〉に波々木節奈の全情報が公開される運びとなった。夜宴に参加している〈聖楔者〉たちに狙われ続ければあの女も遠からず脱落するだろう」
　そう言って、カルディア委員会のエージェントたちは去っていった。星一郎たちに一足早く『錬鉄』の権能の情報を渡したのは、委員会が節奈を取り逃がしたことの詫び代わりらしい。カルディア委員会も対抗手段を模索しているようであったが、結局〈聖楔者〉に対抗できるのは〈聖楔者〉だけらしい。
「それじゃあ、さっきの情報も加味しての多対一の訓練でも――」
「その事だがな、星一郎」
　沈ちん黙もくを破ろうと率そつ先せんした星一郎に、これまで黙っていたディーナが唐とう突とつに喋り出した。
「わたしはしばらく別行動を取ろうと思う」
「ディーナ？」
「考えてみれば、あの節奈という〈聖楔者〉に狙われているのはお前と、お前の幼おさな馴な染じみだ。わたしが狙われる可能性は低いからな」
「急に何を……」
　訝しく思って近寄ると、ディーナはすっと身を引いた。
「……ディーナ？」
「……いい加減、お前も辟へき易えきしていただろう。わたしが去れば静かになる。その幼馴染みの方が付き合いが長いのだし、連携して戦たたかうにもその方がいいだろう」
「何を言って……？」

　急に何を言い出すのだろうかと手を伸のばして詰め寄ろうとすると、ディーナはびくりと肩を震ふるわし、反射的な動きで星一郎の手を弾はじいた。
「……ディーナ？」
「っ……」
　ディーナは後ろめたそうな顔になった。
　思わず手を弾いてしまったことにだろうか？
　だがそもそも、なんで彼女は急にこんな反応をし出したのだろうか？
「……どうしたの？　ディーナ？」
「ち、近寄るな！」
　今度こそはっきりと拒絶の言葉を告げられ、星一郎は動きを止めた。
「……もう一度冷静に考えろ。お前は〝守る戦い〟をしたいのだろう？　なら、そこの幼馴染みに付き合っていればそれが叶う。別にわたしに付き纏うこともあるまい」
「僕ぼくが守ろうと選んだのはディーナなんだけど」
「っ……」
　安心させるように言うと、後ろめたそうだったディーナの表情が引ひき攣つった。
「……ふざけるな」
　ディーナは身を翻ひるがえして走り出してしまった。本気の全力疾走らしく、ぐんぐんと距離が開いてゆく。
「ディーナ――」
「だめ！　星くん！」
　追いかけようとした星一郎を、刀羽華がとっさに抱だきついて引き止める。
「時間を置きましょう？　彼女だって、落ち着く時間が必要よ」
「……」
　星一郎は視線を戻もどしたが、すでにディーナの姿は見当たらな

かった。文字通り、風の如く走り去ってしまった後である。
「……」
　去り際、彼女の漏もらした呟つぶやきは怒いかりを含んだ鋭いものだった。引き攣った表情も、憤りを堪こらえているかのようであった。

「……ふざけるな！」
　走りながら、ディーナは歯軋り混じりに悪態をついた。
　ちょっと考えをまとめるために距離を取る。そんな軽い考えだったのに、いつの間にか頭にきて喧けん嘩か別れするように飛び出してしまった。
　ディーナとて、自分がそれほど我が慢まん強づよいとは思っていない。感情的になりやすいのは自分でも承知している。だが、なんでこんなに怒っているのか分からないことに、ディーナは激しく苛立った。選んだのはディーナだよと、星一郎のその言葉を聞いた瞬しゆん間かん、後ろめたさよりも怒りがこみ上げてきた。
　侮ぶ辱じよくされたような気分になって、悔しくて堪たまらなくなって、思わず『ふざけるな』と言っていた。
「くっ……」
　悔しい。
　とても悔しい。
　だが、何を悔しいと思っているのか？
　出で処どころの知れない悔しさを紛らわすべく、ディーナは疾走する。洛らく外がいを出て人目が多くなると、身体強化によってビルや民家の屋上から屋上へと駆け抜けた。もやもやとした気持ちを置き去りにしようと駆け続けるが、依然としてワケのわからぬ悔しさは胸の中心に居い座すわったままだ。
「……ちっ」
　悔しさはいつだってディーナの中にあった。敬愛する兄が昏こん睡

すい状態になった時もそうだし、自らを選定した神格名が判明するまで、ディーナは『最弱の〈聖楔者〉』と嘲笑された。自分の力の無さにいつも悔しさを抱かかえ、けれど彼女はその悔しさをバネに前進し続けてきた。劣等感を糧にして、ディーナは突き進んできた。悔しさとの付き合い方は、彼女にとって慣れ親しんできたもののはずだった。

なのに、いまディーナは、初めて感じる種類の〝悔しさ〟に翻ほん弄ろうされるばかりであった。こんな〝悔しさ〟を、彼女はいままで感じたことがなかった。

だからだろう。

普ふ段だんのディーナなら感じ取れるだろう視線を、その時の彼女は感じ取ることが出来なかった。上空で旋回する金属色の烏からすが放つ、赤い視線を。

3

その後、刀羽華と訓練と模擬戦をしたが、どうにも身の入らないものとなってしまった。

自宅に戻ってみても、やはりディーナは居なかった。

星一郎は嘆たん息そくし、汗みどろの身体を流すべく風ふ呂ろ場ばへ向かった。熱いシャワーを頭にかぶりながら、星一郎は考えを巡らせた。

ディーナが行きそうな場所は心当たりがある。彼女の兄が収容されている施し設せつで待っていれば、いつか顔を合わせることが出来るだろう。

それにいざとなれば、彼女を〝探索〟の魔ま術じゆつで見つけることも出来なくもない。星一郎は前回の戦いで、自分の権能を与えるためにディーナと経路を繋いでいる。あの縁を辿れば見付けることは容易い筈はずだ。ディーナが妨害や遮蔽を行わなければ、だが。

けれど再会した時、なんと声を掛けるべきかがうまく分からない。

というより、掛けるべき言葉がない。ディーナが言ったことはほとんど正しいのだから。
「……何が気に入らなかったのかな？」
　目的と手段が逆転している。そんな事は先刻承知だし、彼女にもそのように言っている。果たせなかった願いを叶える機会を与えてくれるように、と。
　ディーナは主として、騎き士しとなった星一郎を戦場へ送り出せば良い。
　それで彼女の願いに近づくし、自分は願いを叶えることが出来る。
　合理的な関係だ。この関係の何処が、ディーナは気に入らなかったのだろうか？
「……女心って、よく分からないな」
「それはそうでしょうね」
　不意に声を掛けられて振り向くと、湯気越しに素す肌はだを晒した刀羽華が立っていた。
「……お先にどうぞって言ってなかった？」
　思いの外、深く思考に没頭しすぎていたらしい。不意打ちで幼馴染みの裸はだかを見てしまった内心を誤ご魔ま化かすべく、星一郎は肩かたをすくめて刀羽華を皮肉った。
「なかなか出てこないから。もう三十分以上もそうしているのよ？」
「……」
　本当に思いの外、深く考え込んでいたらしい。
　刀羽華は小さく苦く笑しようした。
「久しぶりに、私が肩を流してあげましょうか？」
「刀羽華が？　また亀の子たわしで洗う気？」
「大昔の恥を持ち出さないで！」
　耳を押おさえて喚いた刀羽華は、無理やり星一郎を座らせ、なし崩し的に背中を洗い始めた。女性にしては固く、けれど確実に男とは作りの違ちがう掌てのひらが背中を擦る。
　考えてみると、刀羽華にからかわれて彼女を洗うことはあっても、

こうして逆の立場になったことは無かったかもしれない。慣れない状じよう況きように居心地が悪くなってくる。
「痒かゆいところはありませんか、お客様？」
「悪乗りし過ぎだよ、刀羽華」
　悪いた戯ずらっぽい笑い声を出す刀羽華に、星一郎は呆あきれたといわんばかりに溜ため息いきを吐ついた。
「だいたい、いったい何のお店なんだか」
「分からない？　それなら……」
　掌とは違う、柔やわらかな何かが背中に押し付けられた。
「これなら……分かる？」
　柔らかく温かな感かん触しよくが背中を上下に滑すべる。筋肉や肩けん甲こう骨こつの凹凸に、みっちりと隙すき間まなく変形し、星一郎の背中を挑発するように蠢き回る。
　いつの間にか、刀羽華の手は星一郎の胸へと回されていた。抱き着いた刀羽華は、泡あわで滑った身体をぴったりと星一郎に押し付けた。
「っ……刀羽華！」
　いくらなんでもこれはやり過ぎだ。
　エスカレートした幼馴染みを叱り付けようと振り向くと、言葉を吐はく前に唇くちびるが塞がれる。
「!?」
「ん……んん……」
　目の前いっぱいに、刀羽華の顔が迫っていた。閉じられた長い睫毛まつげが小刻みに震えている。赤く染まった肌はだが鼻先を擽くすぐり、洗剤と汗あせと何かが混じり合った、仄かに甘酸っぱい匂においが鼻腔に染み込んできた。
「っ！　刀羽華！」
　引き剥がそうとするが、彼女は力いっぱい抵抗した。
　やがて、押し倒すような形でなんとか取り押さえることに成功する。シャワーが床ゆかに転がって、噴水のように湯を巻き上げる。普

段は纏められている刀羽華の長い黒髪が、彼女の白い肌とタイルに広がった。
「……刀羽華。どういうつもり？」
「どういうつもりだと思う？」
　見上げる刀羽華は、泣きそうな顔をして逆に問い返した。
「星くんは、どう思う？」
「……いくら幼馴染みでも、ふざけが過ぎる」
「ふざけてなんていないわ。私、星くんが好きだもの」
「……何を言っているんだ？」
「私はあなたを愛してるわ、星くん」
「……」
　星一郎は一いつ瞬しゆん、刀羽華が何を言っているのかが理解できなかった。
　――好き……？
　――愛してる……？
　――刀羽華が？
　――僕を？
　幼馴染みの告白は、星一郎には現実味を欠いた外国語のように聞こえた。
「ほら、ね？　星くんは女心がまったく分かってないんだもの」
「……」
「星くん。私、星くんが好き。ずっと好きだった」
「……全然気付かなかった」
「それはそうよ。星くんはずっとずっと、摩子さんだけを見ていたんだもの」
　呆ぼう然ぜんとした星一郎の手を解き、刀羽華の両手が星一郎の頬ほおを包み込んだ。逸そらしがちになりそうな星一郎の顔を自分の方へ向けさせ、刀羽華は潤うるんだ両りよう眼めで星一郎を見上げる。
「星くん……お願い。私を見て」
「……」

「私を見て。私は星くんが好き。このまま星くんの物にして欲しい。だから、私を見て……私だけを見て、星くんの言葉を聞かせて」
「……」
　何かを言わないといけない。
　それは分かっているのだが、星一郎は一言も、一声も発することが出来ないでいた。
　目の前の綺麗に育った幼馴染みが好きなのか嫌いなのか。それすら言葉に出来ない。
　いや、嫌いなはずがない。幼い頃から家族同然に育ったことを差し引いても、好ましい存在だと感じている。
　だが愛しているのかと訊きかれればそれは……
「う……」
　ズキリ、と胸の古傷がうずく。心臓が締め付けられるように痛み出す。
　愛している、と。
　その言葉を聞いた瞬間から、星一郎はズキズキと胸が痛み出して堪らなかった。
「ぐっ、ううっ……」
　星一郎は胸を押さえて飛とび退のいた。喘ぜん息そくを患ったように荒い呼吸音が浴室に反響する。火照っていたはずの身体が悪お寒かんを覚えたように震え出す。鏡に写った自分の横顔は、幽ゆう霊れいでも見たように恐きよう怖ふで引ひき攣つって青あお褪ざめていた。
　――怖い――
　――恐こわい――
　――コワイ――
「星くん……」
「止めてくれ！」
　刀羽華の呼びかけを大声で遮る。びくりと震える幼馴染みの姿に罪悪感を覚え、それ以上の叫さけびをなんとか押し留める。
「……お願いだから止めてくれ、刀羽華……」

星一郎は逃げるように浴室を飛び出し、自分の部屋へ駆け込んで扉とびらを固く閉じた。
「う、うう……」
ガチガチと歯が鳴ってしまう。
「……なんで……なんで今さら……っ！」
星一郎は震えた。刀羽華の『愛している』という言葉が、愛しい姉との日々を思い出させ、その喪失の瞬間を否応なく想起させた。
「もう……もう、一年も経たってるんだぞ……」
とっくに乗り越えたはずだ。とっくの昔に仕方のない事だと諦あきらめた筈ではないか。
何を今いま更さら、嘆き悲しむことがあるのか。
そうは思っても、身を引き裂くような痛みは去ってくれず、弱まる気配も皆かい無むであった。
「う、ぐ……」
星一郎は蹲うずくまったまま胸を押さえる。
喘鳴のような呼吸音だけが響いていたが、やがてそこに違う音が混じった。
星一郎が顔を上げると、彼かれにとってはただの汎用デバイスと成り下がっていた〈第二書版〉が、机の上で淡く点滅し震えていた。

「……星くん……」
予想以上の反応に、浴室に取り残された刀羽華は呆然と半開きのドアを見つめていた。だがしばらくすると、顔をくしゃりと歪ゆがめ、年端のゆかぬ幼子のように喉のどをひくつかせて泣き出した。
「星くん……ごめん……ごめんね……」
最愛の幼馴染みの少年の心中を思い、刀羽華は謝りながら涙なみだを零した。
星一郎の時間は、姉の摩子を失ってから止まったままだ。分かっていた事とはいえ現実を目まの当あたりにして、刀羽華は哀しみと申し

訳無さで押し潰つぶされそうだった。
　思えば、もっと早くこうしていれば良かったのかも知れない。
　星一郎は自覚してないだろうが、哀しみは我が慢まんすれば我慢するほどに膿うむものだ。どれほど平静な顔をしていようと、一年の間に彼の胸の内で、大事な人を失った哀しみは深くその根を張ったことだろう。
　けれど、刀羽華も怖かった。告白し、星一郎に拒まれるのが恐くて、ずるずると一年も先延ばしにしてしまった。
　結果として、のっぴきならない事態で、状況に流されるようにして気持ちを告げてしまった。なんでもっと早く勇気を出せなかったのだろうと、刀羽華は自分の不ふ甲が斐いなさを心の底から後こう悔かいした。
　だが、一度言ってしまったのなら、もう元になど戻らない。
　ひとしきり涙を流し終えると、刀羽華は出しっぱなしのシャワーを止めて浴室を出た。バスタオルを巻きつけて星一郎の部屋へ向かうと、ドア越しに彼の声が漏れ聞こえた。
『場所は――分かりました。報告感謝します、グリムゲルデさん』
『〈聖楔者〉の暴走は、カルディア委員会がもっとも恐おそれること。七聖条約から離れた〈聖楔者〉を返り討ちにして貰わなければ、第二、第三の波々木節奈を生み出しかねませんから。ご武運を』
　どうやら通信を終えたようで、部屋の中で忙せわしない物音が続き、すぐにドアが開いて、服を着た星一郎が姿を見せた。
「……星くん？」
「……」
　星一郎は口を開いたものの、結局何も言わないまま刀羽華を横切って玄げん関かんへ向かった。
「星くん！　何処へ行く気!?」
「……カルディア委員会に頼んでいた報告がきた。ディーナに何かあったら連れん絡らくしてくれって。彼かの女じよはいま、波々木節奈と戦っているらしい」

刀羽華の知らないうちに、カルディア委員会へ頼んでいたらしい。
被ひ害がいの少ない戦いという矛盾した目的を掲げる委員会にしたら、節奈のような存在は最優先で排はい除じよしなければならない。どちらにせよ〈聖楔者〉を倒せるのは〈聖楔者〉だけだ。実際に被害にあっている星一郎の頼たのみなら、委員会も協力は惜しまないというところか。
「でも、星くん……あなたはそんな事したって……」
「……僕にはもうこれしか無いんだよ、刀羽華。もう、これしか……」
「やめて星くん！　摩子さんはもういない！　もう死んだの！　あなたはあなたの人生を――」
「ごめん」
小さく、消え入るような一言を呟き、星一郎は飛び出していった。
慌あわてて廊下に出るが、すでに星一郎の姿は影かげも形もなかった。〈聖楔者〉の能力を全開にして飛び出したのだろう。迷いを振り切り、捨て置いていくような素早さであった。
「星く――」
追い掛けねばと逸はやる心に、ひやりと悪寒が走った。
刀羽華は勢い良く振り返った。非常に弱い、しかし刀羽華には感じ取れる気配が、そちらの方向から漂ただよってきていた。左胸に刻まれた『神』の刻印を通し、素盞嗚尊の神格が天敵の気配を感じ取ったのを伝えてくる。
「……波々木節奈……！」
部屋に戻って支度を整えた刀羽華は、日の沈しずんだ新京都を北東方向へと向かった。それは、星一郎が飛び出していったのとは見当違いの方向であった。

4

結局、ディーナは行く当てもなく新京都を歩き回り、人ひと気けの

ない再現史し跡せきのひとつに身を潜めた。
「……何をやっているんだ、わたしは……」
　ディーナは苛立ちのあまり髪かみの毛を掻かきむしりたくなるのを何とか堪え、ベンチに座すわって夕暮れの空を見上げて嘆息した。
　彼女がたどり着いたのは、賀茂川と高野川に挟はさまれた下鴨神社だった。ここも四半世紀前の魔ま力りよく災害の被害を受け、社殿の大半が実体幻げん像ぞうによって再現されている。しかし貴重な自然環かん境きようである『糺の森』は復興直後に植林や再生が行われ、二十年掛けてようやく元に近い姿を取り戻していた。
　もっとも再現史跡には違いなく、やはり時間が来れば人払いの結界が発動し、森を含めた境内にも人の気配は一いつ切さいなくなる。
ディーナが物思いに耽るには、丁度良い環境でもあった。
「……分かっていた筈ではないか。星一郎あいつが望んでいることなど……」
　星一郎の願いは、彼が自分の口で明言している。いまさらその事をとやかく言う必要などないはずだ。
　なのに……なんで自分はこんなに苛立っているのか？
「くっ……」
　思えば、星一郎と出会ってから、ディーナは苛立ってばかりだ。心をかき乱されてばかりの気がする。
　そう思うと、尚の事むかついた。
　あんな……女心に疎いくせに女性のあしらい方ばかりが上手い、いつも涼しい顔をして何を考えているのか分からない男に、なんでこんなに心をかき乱されなければならないのだ？　優やさしく紳士で努力家な、自分がこの世で最も敬愛する男性である兄と比べると、まったく正反対の男だ。
「……あいつめ！　あいつめ！　あいつめっ!!」
　苛立ち紛まぎれに地面を蹴けりつけるが、それで誤魔化されるはずもない。
　ディーナは大きく舌打ちした。

「おのれ……ん？」
　ぞわりと違和感を感じて見上げれば、下鴨神社の大きな鳥居の上から、一羽の烏がこちらを見下ろしていた。
　いや、一羽と言って良いものだろうか？
　黒鉄色の鈍い金属光沢に、沈みかけた西日よりも真っ赤な眼球は、どう見ても生物のものではない。
『――ジャァァアアアアアアッ!!」
　鳥類のものとは思えない、鱗うろこを打ち鳴らしたような威嚇音とともに、異質な烏が翼を広げて襲いかかってくる。
　ディーナは懐ふところから引き抜いた〈第二書版〉を〈ブリューナク〉へと再構成し、急降下してきた烏へと叩たたきつけた。
　――ギィィィイイインッッ!!
「む――」
　俄にわかに畏光同士のぶつかり合いによる異音と火花が撒まき散った。
　が、烏が放つ畏光は弱く、大して拮きつ抗こうすることなくディーナの大おお槍やりによって真っ二つになった。ガランと地面に転がった烏の残ざん骸がいはすぐさま錆が浮き上がり、数秒と経たたず血に似た臭いを発する錆の塊となってぼろりと崩くずれた。
「……ちょうど良い」
　権能武装を握にぎり締しめ、ディーナは森の暗がりから漂ってくる不吉な気配に薄うすく笑った。
「ちょうどムシャクシャしていたところだ……悪いが、憂さ晴らしをさせてもらう！」
　ガシャリ。
　重々しい金属音を発して現れたのは、短甲に似た鎧姿に蛇のような頭をした異形の兵隊だった。昼間にカルディア委員会が報告してきた、波々木節奈が『錬鉄』の権能で造り出したという蛇頭兵であろう。
　しかし報告と違い、姿を見せた蛇頭兵は、錆など見当たらない鉄の

鈍い輝かがやきを宿し、動きも生き物のように滑らかだ。ただしその滑らかさは人型にも拘わらず蛇が這はい寄るようなぬめりを帯び、生理的な悪寒を感じさせた。

「何故わたしを狙ねらったのかは知らないが……容よう赦しやはしない！」

十体ほど姿を見せた蛇頭兵へ、ディーナはこれ幸さいわいと言わんばかりに嬉々として向かっていった。戦闘狂ではないが、いまは槍を振るいたくてしょうがなかった。

蛇頭兵たちは鉄製の劒をディーナへと突き出す。

ディーナの振るう〈ブリューナク〉は弱々しい畏光の抵てい抗こうもろとも蛇頭兵の劒を真っ二つに断ち切り、怖おじ気けを誘うほど精巧な蛇の頭へと切っ先を突き立てた。

――ギィィインッ！

鋭い穂先が埴はに輪わのように中空な蛇頭兵を貫通し、動きを制せい御ぎよする魔術式が畏光の輝きに晒さらされて水蒸気のように揮発する。式神としての機能を停止した蛇頭兵はさっきの烏のように錆さびの塊となってぼろぼろに崩れ落ちた。

「次！」

五分と経たず、十体の蛇頭兵たちは文字通りディーナの槍の錆となって消えた。神性の証あかしたる畏光を宿していても、所しよ詮せんは式神や使い魔に仮初めで与あたえられたもの。神性の源たる《天命の書版》に選定された〈聖楔者〉と比べれば、雫のように僅わずかな力でしかない。

「ふん……肩慣らしにも――」

――ガシャリ。

「……」

ガシャ。ガシャ。ガシャ――ジャアアアァァァァ……

日が沈み、沼のように粘ついた森の夜よ闇やみから、新たな蛇頭兵が姿を現した。

十か、二十か、それとも百か。

神社の境内を埋め尽くさんばかりに、鈍にぶい輝きがディーナを十重二十重とえはたえに包囲する。
「……何故わたしにこれほどの数を差し向けたかは知らないが……」
『ジャアアァァァ――』
「牙きばを剥くなら戦うまでだ！」
ぱちぱちと雷らい撃げきの予兆を槍に宿らせ、ディーナは蛇頭兵の群れに突撃した。
もともと槍は突きに払いと多勢には有利な武器だ。畏光ががなり立てる異音が、静かな森に悲鳴のごとく反響する。
「穿つらぬけ、〈輝ける神槍〉！」
三さん叉さ戟げきとなった穂先から発せられた雷らい光こうが蛇頭兵を十数体まとめて薙なぎ払はらう。鉄製の身体が紙のように引き裂かれて溶とけ爛ただれた。
鉄製の式神どもは血こそ流さないが、神聖な境内を血臭に似た鉄錆の臭いで穢けがしてゆく。
「……ちっ」
蛇頭兵たちを屠ってゆくディーナであったが、次々湧き上がる敵の数に舌打ちした。倒せば倒した分だけ補充され、蛇頭兵の数は減る兆しがない。雑魚同然とはいえ、眷属を作成する権能は厄やつ介かいだ。
最大出力で一気に焼き払いたいところだが、あくまで〝借り受ける〟のが《聖王》の権能である。現在のディーナでは、三叉戟までしか権能武装を解放できない。
それでも負ける事はないだろう。多少時間はかかるが、そのうち掃討できる。そもそも畏光の出力に差がありすぎるのだ。〈聖楔者〉は〈聖楔者〉にしか倒せない。
八岐大蛇の神格に選定された波々木節奈は性格や行動こそ常規を逸しているが、ここまで質の高い使い魔を短期間で大量に造り出すことから、術者としての力量はかなりのものだろう。畏光を与えていようが蛇頭兵たちだけで〈聖楔者〉を倒せないことは承知しているはずで

ある。せいぜいが時間稼ぎしか出来ない。
　何故ディーナに対して時間稼ぎをする必要があるのだろうか？
「何が目的で……っ！」
　右手の甲の『神』の刻印が幽かすかに脈動したように感じた。敵が到来した悪寒とは違う。《聖王》の神格が、親しい力の到来で喜びに震えている。
「そうか。これが狙いか……」
　直後、ディーナを取り囲んでいた戦列に亀裂が走った。一番後ろの蛇頭兵が、まるで獣けものの爪つめに引き裂かれたように砕けて宙を舞まう。蛇頭兵たちが撥はね飛とばされ、やがてそれを成した張本人が、ディーナの前へと姿を現した。
「星一郎っ！」
「……待たせたね、ディーナ」
　ゆらりと立ち上がった星一郎がディーナへ顔を向ける。
「……星一郎？」
　彼の顔を見て、ディーナは戸惑いの声を漏らした。
　いつも飄ひょう々ひょうとして動じない雰ふん囲い気きの星一郎が、やけに幼げに感じられた。実年齢以上に大人びて感じられた彼の顔が、置き去りにされた迷い子のように弱々しいものへと変わっていた。
「星一郎……お前……？」
「……君を守るのが、僕の願い。僕の戦いだ……！」
　星一郎は視線を逸らすようにして蛇頭兵の群れを睨にらみ付つけ、その全身に楔形の刻印を浮き上がらせた。
　――ぉぉぉぉおおおおおおおおおおおお――――――っっっ!!
　どこか切羽詰まったような咆ほう哮こうを発し、星一郎は蛇頭兵の群れへ再度突っ込んでいった。

四章　守護ノ盟約

1

『祇ぎ園おん様』として知られる京都の八坂神社も、四半世紀前の魔力災害によって壊かい滅めつした。とはいえ現在はその大部分が実体幻像によって代替され、往時と変わらぬ姿が再現されている。

忌いみ寸き刀と羽う華かは、自らの顕けん現げん神格たる『素す盞さの嗚おの尊みこと』が主祭神とされている八坂神社へとやってきた。

東山区祇園といえば、誰だれが飛び降りたか定かでない高台で有名な清水寺も近く、浄土宗総本山である知恩院が隣接し、京都随一の人気を誇る。それは夜が更けた中でも変わらぬはずであるが、この時ばかりは周囲を歩く人ひと影かげはほとんど見られなかった。見えざる結界に遮さえぎられているかのように。

巫ふ覡げきの一族として霊れい感かんを備え、〈聖楔者ヒエロス〉に選定された刀羽華の視覚には、八坂神社周辺に施された人ひと避よけの結界をはっきりと捉とらえた。此こ処こばかりではなく、新京都の再現史跡は、夕方六時以降にはすべて結界が張られている。『摩天の夜宴バビロン・ナイト』の舞ぶ台たいとするためだ。

西楼門をくぐり、疫神社や太田社を左手に見ながら、刀羽華は今日この夜において、この境内に人避けの結界など不要であると思わざるを得なかった。最低限の明かりだけが灯る境内の其そ処こ彼か処しこに濃い暗くら闇やみが蹲っているが、それがすぐさま命を得て飛びかかってきてもおかしくないほどの不気味な存在感がねっとりと漂っている。魑ち魅み魍もう魎りようを生み出す鬼気、瘴しよう気きの類たぐいが、神域に不吉な陰を落としていた。

本殿前の境内は、冷ややかな赤光が灯って薄明かりを投げかけていた。魔力を燃料とする鬼火である。そして舞殿の真ん中で、一人の少

女が正座して刀羽華を待ち受けていた。
　可か憐れんな着物姿に、おっとりとした柔らかな美貌。波はゞば木き節せつ奈なはやってきた刀羽華を見て、深々と頭を下げた。
「お待ち申し上げておりました、刀羽華様」
「……波々木節奈」
　刀羽華が硬かたい声を返すと、節奈は顔を上げ、名を呼ばれたのが嬉うれしくてたまらないとばかりに笑えみをこぼれさせた。
「ああ、刀羽華様……この日が来るのを一日千秋の思いで待っていました」
「……そんなに欲ほしいものなの？」
　不可解極まる表情で、疲れたような声を刀羽華は漏らした。
「日本の巫覡の頂点……そんなものを何代にも渡って求めるだなんて……」
「ええ。『八岐やまたの大蛇おろち』を祀まつる我ら波々木は、忌寸を主家として従って参りました。英えい雄ゆう神『素盞嗚尊』に倒される、悪役として」
　祭りとは、神話の再現だ。
　魔力が濃こく、神秘と魔術、呪じゆ術じゆつが身近だった古代、人々は神話を再現することで不安定な魔力に一定の法則を与えて導みちびいてきた。荒あら御み魂たまを鎮しずめてきた、のである。そして巫覡——神々の代弁者、代行者の中でも、忌寸と波々木の二家は特別な地位をこの国の呪術界に築いてきた。
　素盞嗚尊が八岐大蛇を降くだす神話は、この国においては国産みや天孫降臨と並び立つ重要なキーポイントだ。八岐大蛇、多頭龍という異形は、制御できぬ自然、荒御魂そのもの。それを降すのは、すなわち地を切り開き河を治める——平定の象しよう徴ちよう的な図式である。
　だからこそ、素盞嗚尊の神格に翻ほん訳やくされた《天命の書版》の欠片かけらを護まもる忌寸家と、八岐大蛇の欠片を護る波々木家の両一族は、永きに渡って両神格の代行者として祭りを行ってきた。打

うち倒す者と、打ち倒される者として。
「別に、本当に殺される訳ではありませんけれどね。けれど波々木のお爺じい様さま方は不満だったようです。『何な故ぜ、我々が延々と〝敗者〟の役割を演じなければならないのだ』と。『この国を鎮護してきたのは同じなのに、何な故ぜ忌寸が一方的に上なのか』と。ふふ、子供みたいですよね？」
「……」
　刀羽華も、忌寸家と波々木家の確かく執しつは知っている。
　有う象ぞう無む象ぞうの魔術を支配下に置く、本物の神格。それを使えば魔導工学が隆盛を誇る今の世で、大きな権力を得られるのに疑いはない。波々木は自らの持つ八岐大蛇という神格を背景に力を誇示しようとしたが、それに待ったをかけて抑え付けたのは他ほかならぬ忌寸だった。
「遍あまねく魔力を支配下に置く神性の輝きは、あまりに大きすぎる力です。だからこそ――魔術が陽ひの光を浴びるようになったからこそ、両家の神格は秘するべき。その決断は正しかったと思います。それで邪じゃや魔まをされたなどと逆恨みされるのはお門違いと思います」
「ええ、私もそう思いますわ。ご老人方は『いつまで我々の頭を押さえるつもりだ！』と今でも怒いかり心頭ですけれど」
　くすくすと節奈は笑う。
　彼女の他人事のような物言いに、刀羽華は訝いぶかしげに眉まゆ根ねを寄せた。
　笑いを滲にじませたまま、節奈は話を続ける。
「そんなご老人方は、この『摩天の夜宴』、神話の再編という事業にたいそう興奮なされておいででした。『忌寸を打ち倒し、この国の巫覡の頂点に立つチャンスだ！』などと息巻いて。そして、首尾よく〈聖楔者〉となったわたくしにこう申し付けました。『忌寸を完膚なきまでに叩き潰せ！』と」
「だから、こうして私を付け狙う、と」

「いいえ？　わたくしの目的はまったく別です」
　すらりと立ち上がり、節奈は舞殿にふさわしく唄うように刀羽華へ囁きかける。
「波々木の巫女みことして、刀羽華様に初めてお会いした時から……わたくし、刀羽華様をお慕い続けているのです」
「……慕う？」
「はい。貴女あなた様を愛しております、刀羽華様」
　甘あまえた声で告白された刀羽華だが、彼女は一欠片も喜べなかった。告白してくる相手が女性だというのももちろんあるが、耳に心ここ地ちよい声とは裏腹に、節奈が自分を見つめてくる瞳ひとみは、ねっとりとした欲情を隠かくしきれていない。男性に好色な目を向けられた経験を数えるのも面めん倒どうな刀羽華であるが、これほど強きよう烈れつな欲望を向けられたのは初めてだ。
「一目惚れでした。何度貴女あなた様を想って、この身を慰なぐさめたでしょう。恋こい焦がれ、しかし互いの家がそれを阻み、狂い死にしそうでした」
「……」
「それも今夜まで。わたくしは波々木の悲願も、神話の再編とその勝者にも興味はありません。わたくしが『摩天の夜宴』に参加したのは、こうして思いの丈を直接お伝えすることが出来るため……」
　節奈は童女のように笑い、娼婦のように濡ぬれた声で、告げた。
「今宵、貴女を攫さらわせていただきます、忌寸刀羽華様」
　がしゃん！
　境内の暗がりから、無数の鉄の輝きがまろび出た。複数の蛇頭兵がしゅるしゅると舌を蠢うごめかせる。
「貴女様の絹のような肌に傷が付くなど耐たえられません。どうぞ、わたくしにその身を委ねてくださいまし」
「……謹んで辞退するわ！」
　括くくった黒くろ髪かみを翻ひるがえし、刀羽華は〈第二書版〉を頭上に掲げた。

「〝神デインギルの威い光こうよ！　神の門バベルの鍵かぎよ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！　悪あく蛇だと邪鳥の討とう伐ばつ者《戦嵐神ニヌルタ》よ！　忌寸刀羽華が汝なんじの遠き末まつ裔えい〈嵐あらし纏まとう素盞嗚尊〉の名を借りて訴うつたえ奉たてまつる！〟」

　掲げられた〈第二書版〉の表面に、幾つもの亀裂が生じる。金属の装そう丁ていと魔導晶体の頁ページが分裂し、裏返り、立体パズルのようにその形態カタチを再構成させる。

「〝嵐あらし纏いて劒を振るう雄々しき戦神よ！　その威光にて悪鬼邪鬼を滅し給たまえ！〟」

　再構成の果て、刀羽華の手には神こう々ごうしい大太刀が顕現した。大蛇であろうと龍りゆうであろうと薙ぎ払ってその首を確実に斬り落とすだろう鋭するどい刃やいばが、畏光の輝きを帯びて虹にじ色いろの光沢を纏っている。

『ジャァァァアアアアッ！』

　蛇頭兵たちが威嚇音を発して飛び出した。劒を振り被るものもいたが、節奈の目的が拘こう束そくであるためか、鉄鎖を得物とするものが多い。大きく振り回された幾本もの鉄鎖が刀羽華へと襲い掛かる。

「〈クサナギ〉！」

　大剣型の権能武装を振り上げると、空気が轟と啼く。招かれた豪ごう風ふうが枯れ草を薙ぐように蛇頭兵を打ち払った。神性を帯びた虹色の風は刃の群となって蛇頭兵に襲い掛かるや、畏光の加護ごと鉄製の身体を次々に斬断してゆく。

「ああっ！　その凛り々りしいお姿！　節奈は濡れてしまいます」

　刀羽華を眺ながめる節奈がうっとりと表情を緩ゆるませる。

「もっともっと……もっと見せてください、刀羽華様」

　ガシャリガシャリと蛇頭兵が数を増して姿を現す。さらにその蛇頭兵の足元には、自在置物のような鉄製の蛇も姿を見せていた。境内の砂利が、あっというまに金属の蛇の群れに覆おおわれてゆく。

　権能武装〈クサナギ〉によって生み出される風の刃の結界によって

錬れん鉄てつされた使い魔を寄せ付けぬ刀羽華であったが、その光景は節奈の情欲がそのまま顕現したかのようで、生理的な嫌けん悪お感を抱いだかずにはいられないものであった。

「うっ……トリフネ！」

　権能武装から〈第二書版〉の頁が湧きい出し、刀羽華の頭上で精緻な紙細工のように折り重なってゆく。

　刀羽華が喚よび出した随騎トリフネは、その名の通り鳥が翼を大きく広げたような形をした飛行体であった。刀羽華が飛び乗ると、トリフネはその高度を上げ、黒鉄の輝きが蠢く境内を眼下に見下ろした。

「せあああぁぁぁああっ！」
　黒髪を翻し、風を纏った〈クサナギ〉を振り下ろす。豪風によってリーチを増した剣閃が、節奈の使い魔たちの群れに一文字の傷きず痕あとを刻みつけた。
「……悪いけれど、あなたにこれ以上かかわっている暇ひまはないわ！」
　頭上から一方的に蹂じゆう躙りんするのを躊躇ためらわず、刀羽華は大剣にさらなる豪風を呼び込む。
「いけずですね……そんなことを言わずに、お付き合い下さいませ」
　舞殿が、風船が破は裂れつするように吹ふき飛とんだ。魔力による実体幻像は、破は壊かいされるや光を発して魔力に還かん元げんされてゆく。蛍火のような残光を纏わせ、巨きよ大だいな影がぬうっと姿を現す。八首の大蛇、波々木節奈の随ずい獣じゆう〈オロチ〉だ。
『ジャァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』
〈オロチ〉の黒い鱗の隙すき間まから夥おびただしい霧きりが噴出する。
「〝大蛇居る上に、常に雲気有り。故を以ちて、名くる〟……」
　白い霧は刀羽華の呼ぶ風を喰らうかのように天へと昇り行き、祇園一帯を天蓋の如く覆い尽つくしてゆく。
「……『天あめの叢むら雲くも』」
　分厚く積もった天蓋は黒く染まり、すぐに大粒の雨が叩き寄せた。
　刀羽華は風によって吹き散らすものの、風の及およばぬ領域はすぐに雨で塗り潰された。眼下に蠢いていた黒鉄の使い魔たちが、分厚い白いヴェールに隠される。
「く、うっ……」
　見当を付けて大剣を振り下ろす。風が鉄を断たち切きる手応えはあったが、戦果を確かく認にんするには雨が邪魔だった。
「やりにくい……っ！」
　雨の幕を引き裂いて黒い影が急接近する。首を伸のばした〈オロチ〉の大顎だ。慌てて距きよ離りを取ろうとするが、それを待ち構え

ていたように別の首がトリフネを打ち据えた。
「きゃ……」
　宙に放り出された刀羽華は本殿の実体幻像へとなんとか着地する。降りしきる雨がすぐに服を濡らし、黒髪が頬や背中に張り付いた。
「ふふふ……雨に濡れたお姿も素す敵てきですわ」
　大蛇の額を足場にした節奈が、雨のヴェールでぼやけさせながら姿を見せる。水を吸って重くなった和服を脱ぎ捨て、白い襦袢を上気した肌はだに張り付かせる。
　刀羽華が魔力光を漏もらす屋根に立ち上がると、ガシャリと蛇頭兵も本殿の屋根へと這い上がってきた。
「ふふふふふ……苦労をしてあの厄介な星せいーいち郎ろう様を刀羽華様から引き離したのです。ゆっくりと二人きりの時間を楽しみましょう？」
「……お断りよ」
　早く星一郎と話をしなければ。
　雨を呼び鉄の兵を従える大蛇の巫女へ、刀羽華は大剣を向けた。

2

「おぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉおおおおお――――」
　大おお幅はばに引き上げられた身体能力に任せ、星一郎は蛇頭兵を引き裂いてゆく。貫ぬき手てが胴を貫通し、手刀が蛇の頭を叩き割る。仕留めた蛇頭兵が錆の塊に還る前に、当たるを幸いに拳こぶしを振るい、肉体を駆動して走り回る。
「がぁぁぁあああああああ――――」
　自分の喉から迸ほとばしる獣のような咆哮を、星一郎は他人事のように聴きいた。いや、こうして敵を駆く逐ちくする自分の肉体の感覚ですら、現実感を欠いた明めい晰せき夢むのようだった。
　――愛してる――

「ぁぁあああああああああああああああ――」

――アイシテル――

「ぁぁぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああっっ!!」

うるさい。

煩い。

五月蝿い。

ウルサイ！

思い出させるな。あの日を、あの瞬しゆん間かんを思い出させるな！

「あ、あ、あああああああああぁぁぁぁぁああああああっっ！」

僕ぼくの人生？

新しい生き方？

そんなものがあるワケない！

だって、僕は失ったんだ！

僕は姉さんを失ったんだ！

守るべき姉を――ずっと自分を守り続けてくれた大切な存在を失って、自分が守るべき最愛の存在を喪うしなってマトモでいられる筈はずがない。

手段と目的が逆転していようと、僕は続けるしかないんだ！

「ハァ……ハァ……ハ、ア……」

体中から血の臭いがする。傷など負っていないのに、血の臭いがしてたまらない。

自身の汗あせと蛇頭兵の残骸の錆が交じり合って血そのもののような臭いがしているのだが、星一郎にはそんなことにすら考えが及んでいなかった。今の星一郎には、湧き上がるように姿を見せる蛇頭兵の群れ――現実を忘れさせてくれる〝敵〟しか目に入っていなかった。

そう、〝敵〟だ。

〝敵〟が要る。

怒りを叩き付ける〝敵〟が。

悲しみを忘れさせてくれる〝敵〟が。
終わらせてくれる〝敵〟が。
〝敵〟だ。
〝敵〟が要る。
宿すく儺な星一郎には、どうしてもどうしても〝敵〟が要る。
「がぁぁぁあああああああ――」

「――もう止めろ！　星一郎！」

我を忘れたように暴れ回る星一郎が再び蛇頭兵の群れへ飛び込もうとするのを、ディーナはこれ以上見ていられなかった。獣のような咆哮を上げて走り出そうとする星一郎を背後から抱き止める。
「もう止めろ！　止めるんだ星一郎！　こんな戦い方は――」
「がぁぁあああああああっ！　放せ！　放せぇえええっっ!!」
超ちよう常じよう的な〈聖楔者〉と比べても飛び抜けた身体能力を持つ星一郎だ。ディーナは生身で虎か獅し子しに立ち向かうような心地にさせられた。
「やめろ！　こんな事をしてもお前が――」
「うるさい！」
感情的に暴れる星一郎の拳が、ディーナの頭を掠かすめた。
畏光の護りはあったが、異音とともにディーナの上体が仰け反り、ばたりと仰向けに倒れてしまう。
「あ……」
拳を振り上げた体勢で星一郎は固まった。倒たおれはしたもののダメージはないディーナであったが、自分を見下ろす間抜け面を見て、妙みように心の中が凪ないでゆく。
「……」
「ディーナ……ごめ――」
「穿け、〈輝ける神槍〉！」
立ち上がったディーナは、間髪容いれずに雷撃を放った。土手っ腹

に雷かみなりを食らった星一郎が、群がっていた蛇頭兵を盛大に巻き込んで吹っ飛んだ。
「……」
　雷撃の余よ韻いんを残す三叉戟を引っ提げ、ディーナは吹っ飛んだ星一郎へと近付いてゆく。途と中ちゆう、当然ながら蛇頭兵たちが襲いかかってくるのだが、
「……邪魔をするな」
　氷のような声とともに雷光が閃き、蛇頭兵は粉こな微み塵じんに粉砕される。命なき鉄の塊の筈の蛇頭兵たちであるが、ディーナのただならぬ雰囲気に圧されたように動きを鈍らせた。
　海を割るモーセのように蛇頭兵の群れを横切ったディーナは、ぶすぶすと煙けむりを上げる星一郎の前で足を止めた。
「……い、いきなり、何を……」
「畏光の加護があると、頬ほおを張れないからな」
　槍を地面に突き刺して両手を空けると、ディーナは焼け焦げた星一郎の襟を掴み上げ、思い切りその頬へ平手を叩き付けた。
「ぶっ！」
「いい加減にしろ！」
「がふっ！」
「何だあのざまは!?　星一郎、貴様は言ったな？『守るための戦いをしたい』と。なのにあの戦い方は何だ!?　あれでは餓が狼ろうか狂犬ではないか！　到底守るために戦う者の姿ではない！」
「……何が分かるんだ……！」
　頬を叩かれるだけだった星一郎が、歯軋り混じりに言い返した。
「僕は！　失ったんだ！　大切な人を守れなかった！　だから――」
「泣き言など許さん！」
「ぐがっ……」
「失った？　守れなかった？　当然だ！　現実を受け入れられないような弱虫が守れるものなどあるものか！」
　叫さけぶうちに怒りがこみ上げてきた。勢い任せにもう一発叩き込

む。
「げふっ……」
「現実を見ろ！　お前の姉は死んだ！　もういない！　お前に守れるだけの力がなかったからだ！」
「う、う……」
「どうだ？　分かったか？　目が覚めたか？　……いや、まだ覚めていないな」
　おかわりとばかりに、今度は裏打ちを食らわせる。いい音が鳴った。
「ぐぶっ……ぐ、ううう……ね、えさん……摩ま子こ姉さん……ごめんなさ――」
「泣くな！　うっとおしい！」
「うぐぅ!?」
　苛いら立だたしい。
　とても苛立たしい。
　なんだ、この姿は？
　なんてざまだ！
「……そうだ。悔しくて堪らない。こんなざまを見せられて、悔しくないわけがない」
　悔しさを糧にしてきたディーナが抱いた未知の悔しさの正体がこれだった。
　ディーナは、星一郎の不ふ甲が斐いなさが許せないのだ。自分を守ると口にした男が、自分の騎き士しになるとのたまった男が、この程度だなどと我が慢まんがならない。

　これほど自分の心を掻き乱す男がこの程度だなんて許せない。
　すっかり頬を赤く腫らした星一郎の襟首を、ぐいっと力任せに掴み上げる。
「……もう一度、チャンスをやろう。大切な人を守れなかったことを怒り、哀しみ、許せないなら、今度こそ守ってみせろ！　いつかお前が死んだ時、あの世で待っている姉に恥ずかしくないようにな！　仮令胸を張れずとも、背を丸めないですむようになって見せろ！　貴様がこのまま立ち止まるのをよしとしないのなら――」
　一言一言刻み込むように、ディーナは鋭い声で言い放つ。
「お前にわたしを守らせてやる！」
「……」
「さあ、言ってみろ。お前の願いは何だ!?」
「……僕を――」
　拘束を解かれた星一郎は、膝ひざを折り、深々と頭こうべを垂れた。
「――僕をあなたの騎士にしてください。あなたを守らせてください……」
「許可する！」
　許しを得た星一郎が顔を上げると、その表情はすっかりいつもの澄すまし顔がおに戻もどっていた。いや、よく見れば力強さを増し、瞳の奥おくに先ほどまでと違ちがう怒りを秘ひめている。
　星一郎は、立ち上がると同時にディーナの視界からふっとその姿を消した。
　一いつ瞬しゆん後、彼かれはディーナの背後で蛇頭兵たちを鉄錆に戻していた。
「ぉぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっ!!」
　怒りの咆哮。だが、今度の咆哮は、撒き散らすだけのさっきまでと違い、制御された怒りによって奏でられていた。
「僕は！　姉さんを守れなかった！」

弾はじかれたように駆け抜けながら、星一郎は悔くいるように叫んだ。
「姉さんはいない！　僕が守れなかった！　守れなかった！」
振り下ろされる劒を素手で受け止め握り潰し、蛇の頭を弾き飛ばして叫ぶ。
「弱かった！　弱い、弱い、弱すぎた！　僕は————弱い！」
蟻のように群がってくる鉄の塊を引き千切り、なおも叫ぶ。
「弱い、弱い——弱い！　だから強くなる！　もう失わない為ために！　守る為ために！　強く、強く————強く！」
怒りの咆哮、正しい怒りの声。どれほどからかっても澄まし顔を崩くずさない星一郎のものとは思えないほど、その声は生々しい感情が込められていた。
宿儺星一郎は、見た目以上に直情的な性格なのかもしれない。
怒りのままに、感情のままに突き進む姿こそが、彼の本当の姿なのかもしれない。
——可か愛わいいやつだ。
自分の発破に背中を押された男の姿に思わず微笑ほほえみそうになって、ディーナは慌あわてて首を振った。
自分は怒っているのだ。まだ笑って許してなどやらない。
ディーナは地面に突き立てた〈ブリューナク〉を引き抜き、星一郎に合流する。
「ディーナ！　申し訳ないけど——」
「あのだらしない女を助けに行きたいか？」
ディーナは不ふ機き嫌げんだと知らしめるように鼻を鳴らした。
「わたしを守ると誓ちかい直したばかりなのに、舌の根が乾かないうちにそれか」
「ごめん。だけど、僕は彼かの女じよも守りたい。もう失わないために——強くなるために」
「勝手なやつだ」
揶や揄ゆしながら、ディーナはこっそりと笑った。

そうだ。それでこそだ。

わたしの騎士を買って出るほどの男が、自分だけしか守れないケツの穴の小さい男では不甲斐ない。わたしの騎士なら、守りたいと思う全てを守ってみせろというのだ！

「いいだろう！　守ってみせろ、星一郎！　わたしも、お前が守りたいすべても！」

歓かん喜きを戦意で覆って叫び返し、ディーナは大きく頷うなずいた。頷き返した星一郎はディーナを抱え込むと、高く高く跳ちよう躍やくした。

二人の眼下に、数えるのもバカバカしくなるほどの鉄屑たちが蠢き回っている。

「〝誉れ高き《至高の聖王ギルガメッシュ》よ！　ディーナ・チャレンジャーが汝の御名を以もって招集する！〟」

権能武装の切っ先を大地に向けて構え、ディーナは神格との経路である『神』の刻印を一際鮮やかに輝かがやかした。

「〝英雄の天敵《全き人間エンキドゥ》よ！　宿儺星一郎が汝の意志を代行する！〟」

ディーナの右手の刻印に、星一郎の右手が重ねられる。『神』の刻印、経路が繋がると、支えてくれる存在を得て〈ブリューナク〉が歓喜に震ふるえた。三叉の穂先がさらに変形し、五叉の真の姿を顕現させる。

「〝遍く神々よ！　深淵なる慈悲を以って、聖王の代行たる我に力を貸し与え給え！〟」

「〝英雄の天敵にして並び立つ友！　我もまた、友を助け導く力とならん！〟」

『穿うがち貫つらぬけ、〈輝ける神槍ブリューナク〉ッッ!!』

3

刀羽華と節奈の戦いは、八坂神社の境内から、隣接する円山公園へ

と移っていた。
　節奈の『天叢雲』によって視界を制限された刀羽華は、下手に距離を取ることが出来なくなっていた。風で雲を散らそうとも思ったのだが、その効果は遅々としたものだった。それも当然で、待ち構えていた節奈はこの場の魔ま力りよくのほとんどを自身の支配下に置き、刀羽華の影響を大幅に削いでいた。
　それでも、ようやく雨足が弱まりはじめ、視界も最初よりはマシになる。滝のような雨のヴェールも、ちょっと強つよい大雨のレベルになった。
　蛇頭兵や鉄蛇も随ずい分ぶんと数を減らした。どうやら『錬鉄』の権能で量産した戦力の半分以上は星一郎の足止めに投入したらしい。
　自じ暴ぼう自じ棄きに近い心理状態のまま飛び出していった星一郎に早く合流せんと、刀羽華は〈クサナギ〉を振る速度を増した。
「ふふふ……」
　名勝でもある枝垂桜の代わりに公園の中心に鎮座する〈オロチ〉の首の一つに腰こし掛かける節奈が、大剣を振り回す刀羽華を鑑賞して微笑を漏らした。
「ふふ、焦あせっていますね、刀羽華様」
　用意した蛇頭兵が数を減らしつつあるのに、節奈は相変わらず余よ裕ゆうたっぷりであった。
「……けれど、そろそろ見るだけでは物足りなくなってきました」
　くいっと曲げられた節奈の指に釣られるように、〈オロチ〉が鎌かま首くびをもたげる。
「そろそろ肌を合わせたく思いますわ、刀羽華様」
　節奈が腰掛けるもの以外の七首が、一いつ斉せいに刀羽華へと迫せまった。
　この時を待っていた刀羽華は、濡れて張り付いた前髪の間の双そう眸ぼうを鋭く引き絞った。
「せぇぇぇえええええええいっ！」
　――ギィィィイイイイイイイイイイイイイイ――――ンン

ンッッ！
　迫ってくる黒こく鱗りんの大だい蛇じやへ権能武装を振り下ろす。畏光が拮きつ抗こうする異音と火花が舞う。
　だが、徐じよ々じよに〈クサナギ〉の刃が〈オロチ〉の加護の光膜に食い込んでゆく。元より、素盞嗚尊の神格の宿った武装なのだ。蛇殺し、竜殺しの加護が加わり、大剣が大蛇の鱗に食い込んだ。
『ジャァァァァアアアアアアアア!?』
　断ち切られた頭が末期の悲鳴を上げる。
　さらに二つの首を落とし、刀羽華と節奈の間に障しよう碍がいがなくなった。呼び込んだ風を背に受け、刀羽華は疾風となって距離を詰つめる。
「波々木節奈、覚かく悟ごっ！」
　権能武装を振ふり被かぶった刀羽華は、雨越しに見えた節奈が笑みを深めるのを目にした。
　だが、もう目と鼻の先。風を纏った大剣を振り下ろす。
　――ギィィイイイイイイイイイ――――――ッ!!
　間かん一いつ髪ぱつ、節奈は大剣と自分の間に〈オロチ〉の尾を割り込ませた。構わずにもろとも一蹴しようとした刀羽華だが、〈クサナギ〉を受けた尾は予想以上の抵てい抗こうを見せた。勝負を決めようと押し込むと、黒い鱗がぼろぼろと零れ、尾の中から〈クサナギ〉に匹敵する大剣が姿を見せた。
「なっ――」
「ふふふ……これが『錬鉄』の権能の、本当の使い方です」
　尾の中から現れた剣が、逆に刀羽華の斬撃を押し返しはじめる。
「草くさ薙なぎ剣のつるぎに匹敵する神剣をその体内で鍛造する……それが随獣〈オロチ〉の持つ『錬鉄』の権能の真の力」
　――ギィィィィイイインンッ！
　尾の剣に振り払われ、刀羽華の手から〈クサナギ〉が遠くへ弾かれていった。公園に植樹された桜の木々の間を転がり飛ばされて泥どろだらけになる。

手近な桜の木に手を付いてすぐに立ち上がって弾かれた得物を取り戻そうとした刀羽華だったが、生き残っていた鉄蛇が足に絡みついて体勢を崩された。さらに蛇頭兵が鉄鎖を投げ放つ。

鎖と蛇に絡め取られた刀羽華は、桜の木を磔はりつけ台にして拘束されてしまう。権能武装も蛇頭兵に抱え込まれてしまっている。もがくものの、鎖も蛇もびくともしなかった。

「ぐぅ……」

「ふふふ……ようやく捕まえました」

大蛇の首から飛び降りた節奈が近づいてくる。拘束された刀羽華はせめてもの抵抗に睨にらみ返した。

「ああ、その眼……ぞくぞくしてしまいます」

だがその抵抗も、節奈にはまったく通じなかった。

小雨ごしにも息いき遣づかいが感じ取れるほどまで近づいた節奈は、両手で愛おしむように刀羽華の頬を擦さすった。

「ふふふ、この時を一日千秋でお待ちしておりましたわ、刀羽華様」

蛇のように舌なめずりし、節奈が顔を近づけてくる。

唇くちびると唇が触れようとした瞬間、刀羽華は節奈の唇に噛み付いた。

「痛ぅ……」

「……私の唇を、あなたにあげる訳にはいかないわ」

「ふふ……星一郎様のために取っているのですか？」

滴したたる血を舐なめ上あげた節奈は、真っ赤に濡れた唇で弧こを描えがいた。

「ふ、ふ……星一郎様が助けに来てくれると……そんな風に思っているのですか？」

「っ!?」

唐とう突とつな痛みに、刀羽華は小さく呻うめいた。

服に忍しのび入った節奈の手が、刀羽華の乳ち房ぶさに爪つめを立てていた。お仕置きとでも言うように、節奈の爪は消えない痕を刻まんとぎゅうぎゅうと刀羽華を責め立てる。

「くっ、う……」
「ふふ。彼は来ませんよ？　あの舶来の女性のもとへと行ってしまいましたからね」
　握にぎり締しめるのをやめると、今度は柔やわらかく蠢き始めた。蛇が這はいずりまわるような不快さに、刀羽華は目を閉じて眉まゆを歪ゆがめる。
「ん……」
「ふふふ。もういいではありませんか？　殿との方がたなど忘れてしまいましょう？」
　襦袢の裾すそから忍び出た節奈の足が、刀羽華の両足を割って差し込まれる。さらに、乳房を弄るのとは別の手が、腰骨の形を確かめるように添えられた。
「う、う……」
「ほら、もう良いではありませんか？　白馬の王子様など、そう都合よく駆け付けるものではありませんよ？」
「く、う……そん、な、こと、ない……っ」
　上擦りそうになる声を抑え込み、刀羽華は節奈を睨み返した。
「星くん、は……ぜったい、きてくれる、から……ひっ！」
「お仕置きですよ」
　先さき程ほどよりも強く爪を立てられ、殺しきれない嗚お咽えつで喉のどが震えた。
「あの方は来ません。そもそも、刀羽華様ほどの方が、どうしてあのような殿方に懸想なされるのでしょうか？　わたくしには、さっぱり理解できません」
「……あなたには、わから、ないっ……」
　刀羽華は知っている。本当の星一郎がどれだけ勇敢で優しいのかを。
　幼い頃ころ——まだ星一郎の両親が健在だった頃、星一郎は現在では考えられないくらいに闊かつ達たつで直情的な男の子だった。今でこそ刀羽華が星一郎をからかっているが、昔は星一郎が刀羽華にいじ

わるばかりしていたのだ。家族同士で付き合いのある幼おさな馴な染じみであったが、正直、幼い刀羽華は幼い星一郎が苦手だった。

だが、幼い刀羽華のピンチに、星一郎は我わが身みを顧みずに飛び込んで助けてくれた。

近所の凶暴な犬に吠ほえられた時も、林で迷子になった時も、熱を出して苦しんだ時も、星一郎はすぐに飛んで来てくれた。助けを求める声を、彼はけして聞き逃すことはなかった。

そんな彼を、刀羽華は心底愛おしく、そして心配でならなかった。

いつか星一郎は、自分の身を犠ぎ牲せいにしても誰だれかを守ろうとするのではないか？

だからせめて自分は、身近で彼を支えてあげたいと思ったのだ。

「……そうですか」

痛みでも恥辱でも揺ゆるがぬ刀羽華の瞳を見て、節奈は滴るような笑えみを浮うかべた。刀羽華の乳房から手を放すと、その手をするすると下へと滑らせていく。

「う、うっ……」

「なら、存分に星一郎様をお呼びください。呼び続けてください。刀羽華様が星一郎様のお名前を呼び続けられるか、わたくしが刀羽華様から星一郎様を忘れさせてあげられるか、我慢比べといきましょう」

「……星くん……」

「ほら、もっと呼ばないと」

節奈が舌を伸ばして刀羽華の頬を舐め上げる。そして下腹部を弄っていた指先がめくれ上がったスカートの裾から入り込んできた。

「っ……星くん……星くん……星くん……！」

「ほら、もっと、もっとです」

節奈の指先がショーツの中へ滑り込む。

助けて欲ほしい。けれど無茶はしないで欲しい。そんな相反する気持ちで抑えがちだった幼馴染みを呼ぶ声であったが、自分を汚そうとするおぞましい感かん触しよくに、刀羽華はとうとう声を張り上げた。

「助けて！　星くん――――っ!!」

　――ギィィィィィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ―――――――――ンンン
ンッッッッッ！

　助けを求めた刀羽華の視界を、虹色の火花が染めた。
　次いで、拘束する戒いましめが一瞬で断ち消えた。揺らいだ身体が、力強い腕うでに支えられる。
　極ごく彩さい色しきに染まった視界が元に戻った時、彼女を見下ろす少年が優やさしく声を掛かけた。
「……遅おくれてごめんね、刀羽華」
　――やっぱり、星くんは星くんだ……
　幼き頃に何度も抱いた安堵が胸に広がり、刀羽華は星一郎の胸に顔を押し付けた。

４

「星くんっ……星くん……っ！」
　縋すがり付ついてくる刀羽華を見下ろし、星一郎は懐なつかしい気分になった。幼い頃、何かと困っている彼女を助けると、こうして体ごと抱き着いてきたものだ。
　郷愁の念に駆られた星一郎であったが、すぐにその心に怒いかりが湧き上がる。彼女を泣かした元凶と、彼女が泣くまで駆け付けられなかった自分に対たいしてた。
「……いきなりひどいですわ……」
　有無をいわさぬ奇襲で吹き飛ばした節奈が、ふらりと立ち上がった。拳を受けた頬が無残に腫れ上がっている。首を吹き飛ばさん勢いで叩たたき込こんだのだが、やはり〈聖楔者〉。畏光の加護で幾いく分ぶんか威力が削がれたらしい。

「痛っ……女性に手を挙げるなど、酷ひどい殿方です」
「残念だけど、女性というだけで手加減できるほど、僕は博愛主義じゃない」
　幼おさな馴な染じみの少女の肩かたを抱き、星一郎は怒りを滾たぎらせた瞳ひとみで節奈を睨む。
「貴様は僕の敵だ、波々木節奈」
「……いいでしょう。考えてみれば、分断策など生温かったのですね」
『ジャアァァァアアアアッ！』
　桜の木々を薙なぎ倒して這はい寄よった〈オロチ〉が、残った蛇頭兵たちに喰らいついた。ガリガリと鉄の固まりが咀そ嚼しやくされるごとに、断絶された首が再生されてゆく。
　八本の首を取り戻した黒鱗の大蛇が、大剣の生えた尾おを揺らしながら威嚇音を発する。
「力尽くで奪えば、刀羽華様も諦めざるを得な――」
　節奈の声が耳障りとばかりに、鋭するどい雷鳴が轟いた。畏光の罅ひびから侵入した電流に打たれ、節奈と〈オロチ〉が痛みの痙攣に震える。
「がっ――あ――」
「力尽くとは、趣しゆ味みが悪い」
　魔力光を発して走り込んできた大型バイクがついでとばかりに派手に跳ね上げた泥が、節奈とその随獣に降り掛かる。
　随騎ドライグに跨ったディーナは、泥まみれになった節奈を見やって皮肉げに笑った。
「力尽くというやり方は、男であろうと女であろうと見苦しい。盗人の性根がさらけ出だされたな、波々木節奈」
　ディーナは槍を握るのとは反対の手に抱えていた大剣を星一郎へ投げ寄よ越こした。刀羽華の権能武装を受け取った星一郎に、ディーナは鼻を鳴らした。
「ふんっ。それがお前の手というワケだな。危機に駆けつけて心を奪

う、なかなか悪どいやり口だ」
「それは誤解だよ。別に狙ねらってやってるワケじゃない」
「どうだか」
　もう一度不ふ機き嫌げんさを示すように鼻を鳴らすと、ディーナは〈ブリューナク〉の切っ先を節奈へ向けた。
「まぁ、良い。せっかくの見せ場だ。せいぜい格好良く演じてみせるんだな」
「いいの？」
「自分の騎士に格好つけさせてやるのも、主の務めだろうからな」
『ジャァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア――――――ッッ!!』
　降ってくる大蛇の頭を急発進で躱かわし、ディーナは挑発するように駆け回りはじめた。
「どうした!?　出来の悪い鉄人形め！」
『ジャアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!』
　怒りの声を発し、〈オロチ〉がディーナを追い始める。
　彼女の言い付けに従って、星一郎は幼馴染みの少女へと格好を付ける。
「……星くん？」
「刀羽華。正直、僕は僕のことがよく分からない。多分君の言った通りで、僕は姉さんが居なくなってからずっと、時間が止まったままだったんだと思う」
「…………」
「けどようやく、進むことが出来そうなんだ。姉さんの死に、ちゃんと向き合えることが出来そうなんだ。だから……」
「……うん」
「だから、待っててくれる？　この『摩天の夜宴』で、僕は弱い自分と決別する。いまの僕じゃ、君の気持ちに応えられる資格が無い」
「……うん、分かった」
　刀羽華は安心したように笑って、むしろ星一郎を勇気付けるように

何度も頷いた。
「十年も待ったんだもの。楽しみに待ってるわ。星くんがちゃんと、摩子さんの死と向き合って立ち直るのを」
「ありがとう、刀羽華」
　格好をつけようと思ったが、あまり格好は良くなかったように思う。だが、しょうがない。自分は一年間も大切な人の死から逃にげてきた弱虫なのだ。せいぜい、この程度が関の山だろう。
「じゃあ、行きましょう」
　星一郎の手から己おのれの権能武装を受け取り、刀羽華が言った。
「あの無礼な蛇女に、目に物を見せてやらなきゃ」
「もちろんだ」
　ここまで迷めい惑わくをかけられて、黙だまっていられる筈がない。
　波々木節奈に因果応報という言葉の意味を理解させるべく、星一郎は強く拳を握った。

「邪じや魔まをしないで下さい！」
　大蛇の頭に立った節奈が可か憐れんな顔を歪める。主の怒りを受けて追い掛けて来る〈オロチ〉をひらりと躱かわし、ディーナはドライグの騎上から大槍の穂先を向ける。
「穿つらぬけ、〈輝ける神槍〉！」
　三さん叉さ戟げきとなった〈ブリューナク〉から雷らい撃げきが迸るが、〈オロチ〉の畏光に遮さえぎられてわずかにその鱗を焦こがす程度であった。
「ちぃ……無理をしすぎたか」
　ここに駆けつける前に〈ブリューナク〉の最大出力を放ったせいで、いまだ畏光が回復しきっていなかった。再現史し跡せきの一区画をまるまる灼やき尽つくすほどの雷撃だ。やはり最大出力での一いち撃げきは一日一度が限度のようだ。

しかも、本来の〈ブリューナク〉の最大出力は随騎を砲台として撃ち放つよう設計されていた。無理やり放った最大出力の雷撃のカウンターダメージを吸収しきれず、権能武装の構造と術式に歪みが出ているようであった。

「三割、というところか！」

蛇頭兵には致命であっても〈オロチ〉にはいささか威力不足であった。それでも挑発するには十分であり、焦げ跡を付けられた黒鱗の大蛇は激怒したように暴れ狂う。

「わたくしの愛を邪魔するとは！　なんて酷い方たちなんでしょうか!?」

「ハッ！　よく言う！」

掠めただけで畏光の加護を切り裂く恐るべき尾の大剣を紙一重で避け、お返しとばかりにディーナは鼻で笑った。

「異性であれ同性であれ、一方的な気持ちの押し付けを愛とは呼ばないだろうが！　いい加減にうっとおしいぞ、ストーカーの蛇女！」

ついでに雷撃も見舞う。節奈本人を狙ったが、〈オロチ〉の巨きよ体たいに遮られた。

「……知った風なことをおっしゃいますね？　いかにも経験のない、ションベン臭い小娘の分際で！」

ストーカー呼ばわりが腹に据えかねたのか、節奈の口から聞くに堪たえない雑言が飛び出す。もっともまったくその通りなので、ディーナは思わず苦く笑しようを浮かべてしまった。

「そうだな、その通り。わたしは愛だ恋こいだなどというものにはとんと縁がない。だが、そんなわたしにも分かるぞ？　貴様が馬に蹴けられるに相応ふさわしい行いをしていることは、な！」

「このっ……！」

シャラリと〈オロチ〉の尾が持ち上げられる。その先せん端たんから伸のびた大剣が妖しい光こう輝きでギラリと輝く。

「この『羽々之太刀』で、真っ二つにおなりなさい！」

『ジャァァアアアアアアアアアアッ！』

すさまじい圧力とともに降ってくる大剣だが、ディーナが受けるまでもなく、横合いから飛び込んできた剣閃が弾はじき飛とばした。
「っ……刀羽華様……」
再び相対した刀羽華に、節奈が慄おののいたように肩を震わせた。遠目にもひと目で分かるくらい、刀羽華の全身には力が満ちていた。その表情も、それこそ恋する乙おと女めのように眩しく輝いている。節奈にとっては、さぞ眩しいことであろう。
「……お礼を言うわ、ディーナ・チャレンジャー」
大剣型の権能武装を構え、刀羽華は背中越しにディーナへ声を掛けた。
「あなたのお陰かげで、星くんは摩子さんの死と向き合う決心が出来たみたい……とても腹立たしいけれど」
「礼には及およばない。あれは、わたしのものだからな」
「……その事については、あとでゆっくり話し合いましょう」
「それで、星一郎は？」
「あそこよ」
刀羽華が示す方向を見れば、星一郎は〈オロチ〉の間近に接近していた。気付いた節奈が、慌てて〈オロチ〉に迎撃を命じる。
「薙ぎ払いなさい！」
巨きよ大だいな大顎が、星一郎を飲み下さんと降ってくる。
星一郎は避さける気配を一いつ切さい見せず、降ってくる大蛇の大顎を両手で受け止めた。彼の身体に、無数の楔くさび形の刻印が浮き上がる。
一見して細身に見える星一郎が、比べるのもバカバカしいくらいの質量差のある〈オロチ〉の首を真正面から受け止めていた。恐おそろしいほどの剛力である。
「ぐ、ぬ……おぉぉぉおおおおおおおおおおぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおお!!」
さらに、星一郎は力任せに受け止めた首を振り回した。巨大な〈オロチ〉の身体が円を描くように引き摺られ、節奈が驚愕の悲鳴を上げ

た。
「力任せか……」
「一見策士系に見えるんだけれどね……」
　意図せずして呆あきれたような声を漏もらしたディーナと刀羽華であったが、この機を逃さずに攻勢に転じた。
　ディーナは〈ブリューナク〉を馬上槍のように抱え込んで、ドライグごと突とつ進しんした。速度を味方にした大槍の先端が、畏光を引ひき裂さき大蛇の首の一本を見事に串刺しにした。
「来なさい、トリフネ！」
　刀羽華も、一度叩たたき落おとされた自らの随騎に飛び乗った。
「くっ――『天あめの叢むら雲くも』！」
〈オロチ〉にしがみつく節奈が再び水神としての権能を発揮しようとするが、すでにこの戦場の魔力への影響力は、入り乱れた複数の神格によって大きく減衰していた。風を喰はみ大雨を招く雲気は、刀羽華が招いた豪ごう風ふうによって押さえ込まれる。
「せぇぇぇぇえええええええあああああああっ！」
　トリフネで急降下した刀羽華の大剣が、さらに〈オロチ〉の首を落とす。
　星一郎に引き摺られる〈オロチ〉は、まるで網あみにかかった魚のように蛇身をくねらせた。
「く、う……放しなさい！」
　剛力を発揮する星一郎へ、尾の大剣が振り下ろされる。大蛇の顎を放して飛とび退のいた星一郎だが、
　――ギィィィイイイイイイイイイイ――――――ッッ!!
〈オロチ〉の大剣と、白しら刃は取どりをする星一郎の両手の間で異音が掻き鳴らされる。
　だが、その拮抗はすぐに破られる。腕の刻印が激しく輝くや、大剣を引き千切らんと星一郎が大蛇の尾を捻る。加えられた力で黒鱗に罅が入り、尾と大剣の付け根から血ち飛沫しぶきのように魔力光が溢あふれ出だす。

『ジャアァァァアアアアア!?』
「おおおおおおおおっ！」
　大蛇の尾から大剣を引き千切った星一郎は、その大剣を暴れる首の一つへと叩き付けた。己が鍛造した神剣に貫かれ、〈オロチ〉は地面に縫い付けられた。
　その間にもディーナと刀羽華はさらに一本ずつ首を落とし、〈オロチ〉の首は残りすでに半数を割っていた。
「ぐっ、ううっ……」
　節奈が呻いた。首を再生するための蛇頭兵たちもすでになく、『天叢雲』も抑えこまれている。勝機はなく、撤てつ退たいも出来ない。完全に追い詰められていた。
「こんなの……こんなのはおかしい！　わたくしの愛が邪魔されるなど！　これほど刀羽華様を想うわたくしが負けるだなんて！」
　油断なく包囲するディーナ、星一郎、刀羽華であったが、髪を振り乱した節奈の言動にうんざりした表情を隠せないでいた。とくに刀羽華はあからさまに眉まゆ根ねを寄せている。それも当然だろうとディーナは思った。あんなストーカー女に愛だ想おもいだと告げられても迷惑なだけだ。
　外見が可憐なだけに、波々木節奈という少女の情念は余計におどろおどろしいものに感じられてならなかった。
「いい加減に諦めろ。貴様は負けたのだ」
　三人の気持ちを代弁するようにディーナが告げると、節奈は能面のような表情になった。
「……いいえ。まだです。わたくしは負けません。わたくしの愛が負けるなど……あってはならないのです！」
　叫んだ節奈は、唐突に自分の手首に噛み付いた。手を振り、鮮血を周囲に撒まき散ちらす。錆さびの塊になっていた蛇頭兵の残ざん骸がいが、節奈の血によって俄にわかに命を取り戻す。造作も曖あい昧まいで歪なまま、出来損ないの蛇頭兵が三人に襲い掛かった。
「いまさら、この程度の数で！」

この場で再生し造り出せる人形などたかが知れている。瞬またたく間まに元の錆へと戻ってゆくが、その僅わずかな時間稼ぎで、節奈は驚くべき行動に出ていた。

「〝神デインギルの威い光こうよ！　神の門バベルの鍵かぎよ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！　太母たる龍りゆうに生み出されし《七頭龍ムッシュマッヘ》よ！　悪蛇よ！　邪龍よ！　天敵よ！　い出よ！　い出よ！　顕あらわれい出よ！　天を喰らい、地を喰らい、神を喰らい尽くせ！　汝なんじに刻まれ宿りし神格のすべてを、いま此こ処こに顕けん現げんせよ！〟」

代償、供物であろうか。節奈は流れ出る血を傷付いた〈オロチ〉へ注ぎ込んだ。

『ジャ、アア……ァァァァアアアグルルルルルルウウウウゥゥゥゥウウウウウ――！』

断たれた〈オロチ〉の首がずるりと再生した。さらに、その黒い鱗がぎちぎちと音を立てて変化してゆく。蛇の頭に龍と見まごうばかりの角が伸び、その顎にもズラリと鋭い牙きばが生え出した。

『グルゥ――――ジャオオオオオオオオオッ！』

再生し変貌した八つの首が襲い掛かる。

ディーナは星一郎をドライグに乗せて急発進し、刀羽華も慌ててトリフネを上昇させる。

使い魔を咀嚼し、多頭龍は世界へ挑むかのごとく咆ほう哮こうした。

『グルゥゥゥゥウウウウギリュアアアルグァァァアアアアアアア――――ッッ!!』

さらに、八岐の首の付け根から、新たな首が生え出した。九、十、十一、十二……どんどんとその数を増やし、もはや八岐大蛇などとは呼べないだろう。

「ギリシア神話の水蛇ヒユドラは、一説では百の首をもつというけど……」

首を増やす化け物に、ディーナの後ろの星一郎が嫌けん悪お感を含

ふくんだ声を漏らした。多頭の蛇というだけでもとびきりの異形であるが、いま目の前の怪かい物ぶつは一本一本の首がまったく形の使う奇形の塊であり、不気味さばかりが際立つものであった。
「なんという……翻ほん訳やくされた神格を複数顕現させたのか!?」
　ディーナは顔を蒼くした。
「複数の神格……」
「多頭龍は様々に翻訳されているからな……だが、これは……」
「ふふふふ……はははははっ！　いかがです？　いかがですか、この力！」
　異形の多頭龍の上で、節奈が可憐な顔に勝かち誇ほこった笑みを浮かべる。
「これがわたくしの愛の力ですわ……？」
　笑う節奈であったが、その笑い声が止まる。変貌を遂げる自分の随ずい獣じゆうから無数の蛇や蜥蜴とかげが湧き出て、彼女の足を這い登ってきたからだ。
「なんです……な、なんですか、これは！」
　湧いてきた爬は虫ちゆう類るいの群れが波のように押し寄せる。節奈の白い肌はだに巻き付き、食い付き、容よう赦しやなく締め上げてゆく。
「あ、あ、あ――――」
　悲鳴を上げる前に、その口の中にも蛇が潜り込んだ。もはや八岐大蛇の名残など欠片かけらもない、蛇の塊のように蠢くその体内へ、節奈は抵抗の間もなく飲み込まれていった。
「爬虫類が湧き出す……ゾロアスターの三頭龍アジ・ダハーカまでもか！」
「暴走している？」
「当然だ。翻訳された神格、体系の違ちがう神話を同時に引き出したのだ。例えるなら、日本語と英語とイタリア語、それにラテン語やアラビア語と……読みも表現も文法もまったく違う言語を組み合わせて筋の通った文章を作るようなものだ。そんなデタラメな言語で造られ

た物語プログラムが、制せい御ぎよなど出来るわけがない……」
『ギリャルオオオジャガァァァァアアアアアアアア――――ッッ!!』
　蛇か、蜥蜴か、それとも鰐わにか。雑多な爬虫類が一斉に鳴き喚き、歪な咆哮が祇ぎ園おんの空に響き渡った。
　ぞわぁぁぁ……
　蛇の塊――多頭龍の化け物から、無数の爬虫類が吐き出されてきた。どれもこれも不吉な赤い眼球をし、鋭い牙と爪をじゃりじゃりとかき鳴らしている。
「くっ――〈輝ける神槍〉！」
　雷撃で薙ぎ払う。幸さいわいなことに一体一体はさほど強くなさそうだったが、何しろ次々と湧いてくる。しかも、湧き出す数が徐々に増えているように感じる。最終的にどれほどの眷属を湧き出させるのか、見当もつかない。
「僕ぼくも――」
「無む駄だだ！　徒手空拳ではどうにもならない！」
　断続的に雷撃を放ちながらディーナは釘を刺すが、正直、どうにもならないのは自分も同じだった。眷属はともかく、本体である多頭龍の化け物には痛つう痒ようを与あたえていない。
　それに〈ブリューナク〉の雷撃があと何回放てるか分からない。すべてを灼き尽くす五叉戟形態の最高出力攻こう撃げきが放てれば片が付くが、少なくとも今夜は無理だ。
　一度撤てつ退たいし、カルディア委員会主導のもとに複数の〈聖楔者〉で討滅すべきだ。無論、それでは準備が整うまでに一いつ般ぱん市民に犠牲が出るのは避けられないが……
「何を考えているかは分かるよ、ディーナ」
　窘たしなめるように、星一郎が耳元で鋭い声を出した。
「君のことだから、『ここで僅かな時間でも食い止める』とか言おうとしたでしょう？　おまけに、僕に『逃げろ』と言おうとしてたんじゃない？」
「ぐっ……」

「守ってみせろと言ったのはディーナだ。だから僕は逃げない。もう、逃げたりしない」
「だが、このままでは……」
「刀羽華！」
　ディーナと同じように風の刃で湧き出る蛇の眷属たちを斬り伏せている刀羽華を呼び寄せると、星一郎は彼かの女じよの随騎へと飛び乗った。
「星くん？」
「刀羽華、イチかバチか、君の力も貸して欲しい。まだ、君には奥の手があるんだろ？」
「……確かに権能武装には、神格の権能を最大限引き出すための最高出力形態が設定してあるわ。けれどそれを使っても、あの化け物たちを倒せるかどうかは……」
「《全き人間エンキドウ》の権能がある」
　星一郎は『神』の刻印が浮き上がる右手を握り込んだ。
「ディーナ」
「ええい！　ここまで来たらやるしかないだろう！」
　焚たきつけた手前、ディーナは星一郎の提案に頷うなずくしかなかった。
「あと何発雷撃を放てるかわからない。時間はないぞ！」
「うん。刀羽華、行こう」
「わ、分かったわ！」
　刀羽華と星一郎を乗せたトリフネが多頭龍の化け物の上へと移動してゆく。本体を一撃のもとに叩たたき潰つぶすつもりだろうが、もし失敗したらあの異形のど真ん中に落下することになる。
「戦いになると無茶ばかり……普ふ段だんの方も普段の方だが、なんでこんなに極きよく端たんなのだ、あいつは！」
　苛立ちを込めて雷撃を放つディーナの顔は、まるでヤキモチを焼くように不ふ機き嫌げんに歪ゆがんでいた。

「……付き合わせてごめんね、刀羽華」
「ううん……むしろ嬉うれしいわ」
　背中に掴まる星一郎に、刀羽華は肩かた越ごしに振り向き笑い返した。
「星くんが私を頼ってくれるなんて、初めてのことだもの」
「そうだっけ？」
「ええ」
　それも当然だったかも知れない。摩子を守ろうとしていた星一郎は、誰かに頼る余よ裕ゆうなんてなかった筈はずだ。自己研鑽と言えば聞こえはいいが、どうしても視野は狭くなる。
　だからこそ、刀羽華は星一郎の変化が嬉しくてたまらない。
　ようやく支えさせてくれるのだと、刀羽華の身体が歓喜に震ふるえる。
「それで？　星くんの権能は分かったけれど、具体的にはどうするの？」
「僕の『神』の刻印と、刀羽華の刻印を重ねて経路を確立するんだ」
「……私の、刻印？」
「そう、刀羽華の刻印……」
　言って、星一郎は「あ」と間抜けな声を漏らした。
　刀羽華はそろそろと自分の胸むな元もとを見下ろす。身体の何処どこかに刻まれる『神』の刻印であるが、刀羽華のそれは左胸にある。
「……まぁ、幼馴染みだしね。いまさら胸くらい……」
「気にしない筈がないわよ!?」
「お風ふ呂ろに一いつ緒しよに入ったのに？」
「あれはあれ、これはこれ……」
　というか、今いま更さらながらになんであんな真ま似ねをしたのだろうか。思い出して顔が熱くなる。
　ディーナと言い合っていた時には売り言葉に買い言葉で流されてしまったが、なんて事をしていたのだ、自分は！
「そもそも、もうちょっと雰ふん囲い気きを――っ！」

『ギャルォォォオオオオオオリュグルアアアアアアアアア
――――ッ！』
　龍の頭が上ってきた。慌あわててトリフネを上昇させる。
　見れば、多頭龍の化け物はその首を増やしてさらに巨大化している。
「ああ、もう！　いいわ！　やるならやって！」
　出来るならベッドの上で触って欲しかった。情けない思いを抱いだいて急せかした刀羽華だが、いざ星一郎の手が胸に触ふれると、余計な考えなど吹き飛ばされた。
「う、んん……あ、ああ――――――」
　刻印が触れ合って新たな経路が確立されると、星一郎の力と想いが刀羽華の中に流れ込んできた。
　――守る。
　――守りたい。
　――もう失わないために。
　――大切な人たちを守るために。
　――戦う。
　――戦おう。
　――戦わなければ何も守れない！
　星一郎の中に渦巻く戦意は、深い愛情の裏返しだった。彼かれの心は、刀羽華の想像通りに深く、想像以上に熱かった。
「星くん……」
　そして、彼が守りたいと想う大切な人間に自分が含まれていることを、流れこんでくる熱い意志が教えてくれた。
　知らず知らずのうちに、刀羽華は涙なみだを流していた。
　彼の中に、確かに自分がいるのだ。もっといたい。もっと自分を想って欲しい。
「〝神デインギルの威光よ！　神の門バベルの鍵よ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！　悪あく蛇だと邪鳥の討とう伐ばつ者《戦嵐神ニヌルタ》よ！　忌寸刀羽華が汝の遠き末まつ

裔えい〈嵐あらし纏まとう素盞嗚尊〉の名を借りて訴うつたえ奉たてまつる！〟」

天に掲げた権能武装が、刀羽華の声に応こたえてその姿を変化させる。

刃が光輝くや、まるで牙のようにその形を拡張させた。七本の牙を生やした、異形の七支刀。招かれていた風が、その七支刀の牙と牙の間へと圧縮され、絡からみ合あった超過渦動によって巨大な竜巻が形成されてゆく。

素盞嗚尊は嵐あらしの神とも目される。そしてその翻訳の原型となった《戦嵐神ニヌルタ》もまた、風を纏い悪蛇ムツシユマツヘや邪鳥アンズーを討ったバビロニア神話屈指の英雄神である。

翻訳されてもその性質が親しいためだろうか。星一郎の《全き人間》の権能に応え、激風は刀羽華の知る規模の何倍にも増幅され、いまや収束した竜巻には圧縮された空気の摩擦で火花すら散り始めている。

「刀羽華！」
「一切合財薙ぎ払え、〈戦神の剣クサナギ〉！」
　風や嵐という表現ではとても足りない痛つう烈れつな颶ぐ風ふうが多頭龍の化け物を飲み込んだ。湧き出た眷属たちも巻き上げられ、激甚な空気渦動の只ただ中なかへと放り込まれる。
『ギャリュリュリュリュリュアアアアアギャジャアアアアアアアアアアアァァァァアアァァァァアァァアアアア――――――――ッッッ!!』
　巨きよ人じんの腕で引き絞られるように、蛇の塊が雑巾のように捻れる。火花を纏った風の刃が野菜の皮を削そぐように身体を削り取って、削ぎ取られた欠片がさらに粉こな微み塵じんに砕くだかれていく。圧あつ倒とう的てきな暴力に蹂じゆう躙りんされ、多頭龍の首が櫛くしの歯が折れるように数を減らしていった。
　巨体を構成する力を失ったのか、多頭龍の巨体が崩れ出して魔力光に還かん元げんしてゆく。
　ダメ押おしとばかりに、颶風がその勢いを増して多頭龍に殺到した。
『ギャジャァァァアアアアアアアァァァァァァァ……』
　殺到した颶風が多頭龍を爆ばく裂れつさせる。
　断だん末まつ魔まも余波の剛風に飲み込まれ、多頭龍の化け身しんは鱗うろこ一枚残さずに霧む散さんした。

5

「やった……っ!?」
　多頭龍の化け物が爆散するのを見届けて、刀羽華の身体ががくりと揺らぐ。力のすべてを出し切ったのだろう。
　異形の七支刀となった権能武装が自然に〈第二書版〉へと回帰する。さらに、星一郎と刀羽華の足場となっていたトリフネも、その姿を揺らめかせはじめた。
「これ、は――」

トリフネが魔力光に還元される。
地面にぶつかるまでの僅かな時間でなんとか姿勢を変え、刀羽華を上に抱え込んで落下する。
「ぐっ……」
背中から思い切り激突した。ビルの四階か五階くらいの高さから落下し、普ふ通つうなら背骨が砕けて即死なのだろうが、呆れたことに衝しよう撃げきで体が痺れたのみである。いよいよ化け物じみてきた自分の身体に、星一郎は感心すればいいのか呆れればいいのか迷ってしまう。
「大丈夫か!?　星一郎……」
駆け寄ってきたディーナが、何な故ぜか言葉を途と切ぎれさせた。見下ろす彼女の視線が、どんどん温度を下げてゆく。
「……星一郎。お前、いったい何をしているのだ？」
「何って……」
身を起こそうとすると、右手がむにゅりと何かに沈しずんだ。
何か？
何かなど、分かりきっている。落ちる前、星一郎が握っていたものだ。
「う、ん……星くん……もっと優しく……」
星一郎の手に握り込まれた刀羽華の左胸が、薄手の服の下で官能的に歪んでいた。
「……」
「……これは権能を使う為ために仕方がなく……」
無言になったディーナに真ま面じ目めくさった顔で説明するが、彼女は聞く耳など持たないと〈ブリューナク〉を構えた。
「そんなにしっかり握って説得力がない！　この破廉恥漢を穿け、〈輝ける神槍ブリューナク〉――」
天てん誅ちゆうとばかりに雷かみなりを放とうとしたが、槍の切っ先からは弱々しい静電気が瞬またたいただけ。それが止とどめだったのか、ディーナの権能武装も〈第二書版〉へと戻もどってしまった。

「くっ……こんな時に……」
　糖分補給にスティック羊よう羹かんを取り出そうとしたディーナだったが、封ふうを切る前にばたりと倒たおれる。刀羽華同様、力を出し切って気絶してしまった。
「……助かった、のかな？」
　とはいえ、目覚めた時どう説明すればいいのかと、星一郎は暗あん澹たんたる思いで天を仰いだ。
　と、頭上を振り仰いだ星一郎に、上空から光が投げ放たれた。かなり精密な静粛結界を使っているのだろう。ほとんど音もなく、中型ヘリが降りてきた。
「――やれやれ。〈聖楔者〉同士の戦いはたいてい人知を超えるが、こんなに荒れた戦場はお前らだけだ」
　声のした方を向くと、オレンジがかった鬣たてがみのような金きん髪ぱつの美女、ブリュンヒルデが歩いてくるところだった。肩に何かを担いでいる。ヘリからの光に照らされると、彼女が担いでいるのが波々木節奈であると分かった。
「心配すんな。もう何も出来ねぇよ」
　ブリュンヒルデが肩を揺すると、小さな呻うめきが漏れた。どうやら、かろうじて生きていたらしい。
「死んでる方が面めん倒どうがなくて良かったんだがな。ま、死ぬよりひどい目に遭っているから、ちょっとは胸が空いたかな？」
　襦袢の切れ端が張り付いただけの節奈だが、その肌の大部分が黒く染まっていた。刺青のようだが、まるで生き物のように蠢いている。薄うす皮かわ一枚下で、無数の蛇が這はい回まわっているかのようだった。
「呪じゆ詛そです」
　離はなれた位置に着陸したヘリから姿を見せたグリムゲルデが、冷たく節奈を見やって説明した。
「詳しく検査をしないと正確なところは分かりませんが、精神の方はどうなっていることやら。何しろ呪のろいの中でもとびきりの〝神の

呪い〟です。複数の顕現神格を引き出そうとした当然のリバウンドです」
　一切の同情もなく、グリムゲルデは淡たん々たんと言った。もっとも、星一郎だって同じだ。はっきり言って、節奈には当然の末路という他ない。
「丁度良いので、新京都の〈聖楔者〉たちへの警告に使わせてもらいましょう。無茶をすればこうなるぞ、と。伝承レベルの〝神の呪い〟ですし、よい実験材料ですね」
「こいつは今後、日の当たるところに出ることはない。これだけの騒さわぎを起こした波々木の本家も、後でじっくりと絞ってやらないとな」
　節奈を乱暴にヘリへ放り込むと、ブリュンヒルデは星一郎の方へ何かを放ってよこした。ボロボロになった〈第二書版〉であった。
「誰だれが回収するかは、三人で相談してくれ。世話を掛かけたな」
「お疲つかれ様さまでした。今後のご活躍をお祈りしております」
　ブリュンヒルデはひらひらと手を振り、グリムゲルデは慇いん懃ぎんに頭を下げてヘリに乗り込んだ。節奈を回収したヘリはすぐに上昇し、新京都の夜空へと溶とけるように遠ざかって行った。
「……送ってくれないんだ」
　気絶した少女二人を眺ながめ、星一郎は深々と嘆たん息そくした。

終章　聖王ト戦神

1

　目を覚ました時、波はゞば木き節せつ奈なの眼前には小さな人ひと影かげが立っていた。
　豪ごう奢しやなドレスに、顔半分を隠かくすヴェール付きの帽ぼう子し。節奈にも覚えがある。カルディア委員会の実働部隊を統括する、アスタと名乗る少女だった。
「ご機き嫌げんはいかがです、波々木節奈さん？」
「……身体が重い以外は、さほど」
「チッ！　精神がヤられてないのかよ」
　アスタの後ろに立ったブリュンヒルデが、これ見よがしに舌打ちした。
「ブリュン。残念なのは分かるけど、もうすこし控えめにしなければ」
　グリムゲルデがブリュンヒルデを窘める。もっとも節奈本人の目の前で言うのだから、この黒くろ髪かみの麗れい人じんの方が百倍は無礼である。
　四人がいるのは、真っ白な部屋だった。アスタたちの後方には、間ま違ちがいなく監視用のマジックミラーが設置してあり、鏡に写った節奈は手術台を思わせる台の上で、簡素な手術着のようなものしか身に着けていなかった。どうやら、カルディア委員会に拘こう束そくされてしまったようだ。〈第二書版〉の存在も感じられない。頬ほおに触れるが、意識してみても神格との経路である『神』の刻印は浮うかんでこない。
「あなたを選定した《七頭龍ムツシユマツヘ》は、すでにディーナ・チャレンジャーに回収されています。つまりあなたはもう、〈聖楔者ヒエロス〉ではないということね」

アスタが告げた。
節奈は悔しく想ったが、諦めることはないと自分に言い聞かせた。今回は『摩天の夜宴バビロン・ナイト』という状じよう況きようを利用したに過ぎない。刀と羽う華かを手に入れる為の方法はまだいろいろある。夜宴が終わった後で、改めて彼女をものにすればいいのだ。
節奈は立ち上がろうと身み動じろぎした。
その瞬しゆん間かん、全身に電流が走り、手術台の上から転がり落ちてしまう。
「あら？」
「あん？」
「これは？」
「ふっ……ふっ、あ、うぅ……」
落ちた衝撃で、また節奈の体内を電流が走り抜けた。痛みではない。これまで慣れ親しんできた、けれど記き憶おくにあるものの何倍も強きよう烈れつな感覚だった。
「あ、あ、はっ……う、うう……」
節奈は床ゆかの上で身み悶もだえた。手術着のザラリとした感かん触しよくですら、全身の毛穴が開くほどの衝撃を与えてくる。
「……我らが主。あたしが試してみても？」
「許可しましょう」
アスタの許しを得たブリュンヒルデは、床で身悶える節奈に近寄ると、その頬を思い切り叩たたいた。
「あ――あぁぁぁああ――――――――っっ！」
びくんと節奈は仰のけ反ぞった。潤うるんだ両眼から止とめ処どなく涙が流れた。全身の肌が上気していたが、時折その肌の表面を、蛇のような影かげが瞬くように這いずりまわる。
「我らが主。これは……」
「全身の感覚が快楽に変わってしまっているようね」
びくびくと仰け反る節奈には、もうアスタたちの声が風の音のように遠いものになっていた。衣きぬ擦ずれどころか髪かみの毛が揺ゆれ

る感触ですら、いまの節奈には堪らない快感であった。
　だが、何よりも苦しいのは、経験にない快感に震えながらも、その快感に満足できないことだ。むしろ凄すさまじい快感だからこそ、節奈はもっと強つよい快感を求めずにはいられない。
「あっ……あ、あああ……あぁ……もっと……も、っとぉ……」
「えげつない呪いだな……」
「とはいえ、一番お似合いの呪いかもしれません」
「一応、麻酔を試してみて。術式と薬物の両方で」
「効くでしょうか？」
「効かなくても構わないわ。調べる時に喘あえぎ声でうるさいかもしれないけれど」
　独り快感を貪むさぼる節奈を見下ろし、アスタたちは淡々と言葉を交わした。『摩天の夜宴』を監かん督とくするカルディア委員会にとって、波々木節奈は排はい除じよされて喜びこそすれ悲しむ必要のない存在である。
　アスタたちが立ち去った後も、節奈は狂くるったように己おのれの身体を弄り回し続けた。

2

　節奈との戦いを終えて朝を迎えた宿すく儺な家のリビングで、ディーナは刀羽華と向かい合っていた。
　ちなみに、星せい一いち郎ろうは自室でぐっすり眠ねむっている。気絶したディーナと刀羽華を抱えて帰って、さすがに体力も気力も尽きたらしい。昼間まで起こすなという書き置きが、自室のドアに貼り付けてあった。
「……まずは《七頭龍》の神格を譲ってくれたこと、礼を言う」
「構わないわ」
　ディーナの言葉に、刀羽華は気にした様子もなく頷き返した。
「もともと、私は夜宴を勝ち抜くことは二の次だったもの。神格を借

り受けることの出来るあなたが持っていた方が、何かと便利でしょう？」
「そうだな」
「それに、これからも協力し合うんだもの。お土産のひとつくらいは、ね」
　そういうことになっていた。
　ディーナの願いは、『摩天の夜宴』に勝ち抜き、昏こん睡すいした兄を救うこと。
　刀羽華の願いは、星一郎の〝呪い〟を解くこと。
　はじめから、協力しあっても何ら問題はないのだ。星一郎の事情さえ折り合えるのなら。
「協力体制を構築するにあたっての約定は、三つ」
「ひとつ目は、あなたに……って、もう『ディーナ』で良いかしら？」
「なら、わたしは『刀羽華』と呼ぶ」
「ええ。ひとつ目は、この協力体制のもとに倒した〈聖楔者〉の神格は、ディーナが回収する」
「ふたつ目は、わたしと刀羽華が最後まで戦わない」
「ええ。そしてみっつ目は……」
「……星一郎に宿った《天命の書版》を取り出す為の方法を協力して模索すること」
　ディーナと刀羽華が頷き合う。
〈第二書版〉ではなく、己の身体に《天命の書版》を宿した星一郎は、〈聖楔者〉の中でも突出した――超人か、伝説の英雄の如き並外れた身体能力を持っている。それは頼りになるが、同時に不安も抱かせる。人間と親和性のある《全き人間》といえど、神格を肉体に直接宿らせて耐たえられるのか？　人を超えた力を求めて人でなくなった逸話は事欠かない。星一郎がそうならない保証など何処にもないのだ。
　そして、『摩天の夜宴』が神格の回収を目的とする以上、星一郎の

命を犠ぎ牲せいにせず《全き人間》を回収する手段が必要だ。刀羽華はもちろん、ディーナも彼を犠牲にすることなど望んではいないのだから。

「最後の約定は、星一郎には黙だまっておいた方がいいだろうな……」

「ええ……今回のことでディーナも分かったでしょう？　普段はともかく、戦たたかいに臨んだ星くんはどんな無茶をしでかすか分からないから……」

　だからこそ、普段は感情を引っ込めているのだろうか？

　星一郎は無謀でも馬ば鹿かでもないが、いざとなれば感情を――大切な者を守ろうという願いを優先する。最愛の姉を失った事もあるのだろうが、刀羽華の話を聞くに元来そういう気質だったのだろう。

　もし自分の命を犠牲にするしかないのなら、星一郎は躊ちゆう躇ちよなく我わが身みを差し出す可能性がある。確かなことが分かるまで、密ひそかに彼の身体を探る他ないだろう。

「気に入らないところもあるが、あんな愚直で勇猛な男は滅多にいない。犠牲になど、したくない」

「ええ。なら、これからよろしく、ディーナ」

「ああ。よろしく頼む、刀羽華」

　ディーナに合わせたのか、刀羽華が手を差し出す。ディーナは刀羽華の手を取り、固く握り締めた。

　最初の出会いこそ色々あったが、ディーナは刀羽華を認めはじめていた。戦せん闘とう能力も文句ないし、あれほどいがみかかって来たのも純情故だと思えば可か愛わいらしいとも思う。どうしても意地を張ってしまうディーナには、あんな風に素す直なおに誰かを好きだと言葉には出来ない。

　刀羽華の素直さが、ディーナは羨ましく、そしてすこし尊敬していたのだ。

「――それじゃ、そういう事で」

「待て」

　そそくさとリビングを出ようとした刀羽華の襟をぐいっと掴む。
「……何処へ行く気だ？」
「もちろん、星くんのところだけど？」
「夜宴が終わるまで待つのではなかったのか!?」
「それはそれ、これはこれよ。返事は待っても、好感度上げは日々の努力が必ひつ須すなの！」
「好感度？」
「妹が言ってたわ！」
　刀羽華は手帳サイズのノートを取り出した。表紙にはいかにも女の子らしい字体で『星一郎兄様攻略マニュアル!!』と書かれていた。
「せっかく一緒に住むことになったんだから、幼おさな馴な染じみではなく女性らしいところを見せないとならないのよ！」
「星一郎はわたしの騎き士しだ！　勝手なことは許さん！」
「何よ!?　だいたいディーナは星くんのことをどう思ってるわけ？」
「……わたしの騎士だ」
「なら黙ってて！　上司が部下の恋路を邪じゃ魔ましていい法なんて何処にもないわ！」
「ぐっ……」
「それに、もう私は星くんに跡あとをつけられちゃったんだから」
　刀羽華は勝ち誇ったように笑うと、ぺらりと服の襟をめくった。彼女の左胸には、一晩経たってもしっかりと星一郎の手の跡が残っていた。
「ふふ、ずっと残っちゃったらどうしようかしら」
「なんだそのくらい！　ただ必要にかられて握られただけではないか？」
「へぇ？　なら、ディーナは星くんにこんなに強く握られたことあるの？」
「ぐっ……わ、わたしだって刻印が胸にあればそれくらい！」
「そうね。そうかもね。けれどディーナの刻印は手だものね？　ほらほら、そんな羨ましそうな顔をしないで。ね？」

「……ふん、一番肝かん心じんなところに立ち会えないくせに！　星一郎を立ち直らせたのはこのわたしなのだぞ!?」
「うっ……わ、私だってその場にいれば……」
「ふっ、どうだかな。まぁ、わたしは星一郎のことなんてどうでもいいが？　役に立つ男だとは思っているが？　それでもあいつがどうしてもというのなら、恋人になってやらんでもない。何しろ、あいつを立ち直らせたのはこのわたし、だからな！」
「う、ううう……」
「ふふ、『愛するより愛されたい』と言ったのは誰だったかな……私も罪作りな女だ」
「何よ！　この金メッキ女！」
「言ったな！　この似非えせ大和やまと撫なで子しこめ！」
　握手をして三分後。低レベルの罵ば詈り雑ぞう言ごんが掴つかみ合いになるのに、大した時間は掛からないのであった。

「……うるさいなぁ、もう」
　リビングから響いてくる騒音に、星一郎は寝ぼけ眼で起き上がった。
「女性は戦いの後で仲直りとか出来ないのかなぁ……ん？」
　ベッドの上の違和感に、星一郎は疑問の声を漏もらした。白いシーツとタオルケットのはずが、ベッドの上が黒く染まっている。
「なんだ……」
　触ってみると、シーツを黒く染めるものの正体は髪の毛だった。ぞろりと伸のびた髪の毛が、ベッドを覆おおっていたのだ。
「……なんだ、これ……」
　凄まじく伸びた自分の髪を、星一郎はしばらく呆ぼう然ぜんと見つめた。

THE GILGAMESH KNIGHT：2nd Chapter〈Reunion〉closed.

独白烏のモノローグ

注：ネタバレあるよ。

この巻に出てくるバビロニア神話の戦神ニヌルタ（シュメール神話ではニンギルス）は、怪鳥アンズーに盗まれた『天命の書版』を奪い返したりと、英雄神としても人気の神様でした。しかし本拠地（バビロニア神話の神々は都市国家の守護神として生まれて統廃合を繰り返したのです）を持たない為、様々な話のバリエーションが生まれました。

有名な叙じよ事じ詩し『エヌマ・エリシュ』の主神マルドゥークは、仏教の大だい日にち如によ来らいみたいにあらゆる神格を取り込んだのですが、英雄神という色を強く出したかったのか、同じ英雄神であるニヌルタの性質もより強く取り込んだようです。

マルドゥークは新しい神々を滅ぼそうとする太母神ティアマトーが尖せん兵ぺいとして生み出した『十一の獣』を次々と打ち倒してゆくのですが、七つ頭の悪龍ムッシュマッヘの討伐者は、元はマルドゥークではなくニヌルタ（ニンギルス）でした。そのエピソードのせいか、この戦神の持つ武器は七頭龍を模したものであった、とも云われているそうで。

多頭龍を打ち倒した神がその龍に由来する武器を持つ……神話の類似性というものは、本当に想像を掻かき立ててくれます。

あと、今回出てきた八岐やまたの大蛇おろちですが、常にその上に雲気を纏まとっていたなど、かなりの部分がムッシュマッヘと描写が似通っています。マッシュマッヘはその後の『多頭龍＝悪＝神々の天敵』という神話の類型の大元になっただろうことは間違いなさそうなのですが、遥はるか遠く離れた日本において先祖返りを起こしたように姿形が似通るというのは興味深いです。

ちなみに、鋭い人は「ニヌルタはアッカド語なのにエンキドゥはシュメール語のままなのか？」と突っ込まれるかもしれませんが、一応エンキ＝ドゥ（エンキに造られたもの）をアッカド語のエア＝バニ（エアに造られたもの）としないのには理由があります。

……べ、別に知名度だけの問題じゃないんだから！

っと、ここで紙面が尽きたようですね。それでは、また！

二〇一五年中夏　　翅はね田た大だい介すけ